

<様式>

学 校 名	山形市立第一小学校 山形市本町一丁目5番24号 TEL622-0651 FAX633-9301	校 長	石澤 友章
		研究主任	井上 桂子
研究主題	くらしと学びをつくる子どもの育成（6年次）		
研究主題設定の理由	教育目標 体・徳・共・知・美の調和のとれた人間性と 確かな学力を身につけた児童を育成する		
	教育目標達成に向かう学校の姿 違いを認め、切磋琢磨しながら誰もが成長できる学校		
	教育目標達成に向かう子どもの姿（＝研究主題化） くらしと学びをつくる子ども		
	くらしと学びの中で一貫する態度 ○自分で考える ○みんなにも自分にもやさしく ○一步ふみ出す		
	本校では、「子ども達が自分でよりよいくらしをつくること」を目指しているため、昨年度の研究の軸である個別最適な学びと協働的な学びの往還を通して、今年度も児童の主体性を高めたいと考え、研究主題を設定した。		
研究の重点	① ねらいを定めたカリキュラム・マネジメント 特別活動や総合的な学習と教科の学習とのつながり、教科間のつながりを意識して、カリ・マネ表を適宜修正しながら、効果的な教育活動のイメージをもつ。 ② 育成をめざす資質・能力を明確にした授業 個別最適な学びと協働的な学びは1単位時間ではなく、単元を通して計画的に成立させるものであるため教師が意図をもって学習指導や教材開発を行う。 人とつながるための「きく力」を身につけるために、日々の学習の中で、全学年が意識的に価値づける。 ③ 児童の見取りに基づいた教師の居方 児童が課題にどのように向き合っているのか、学びや成長の観点から見取る。 教師による学びの促進や環境の調整など、適切な関わりを通して、児童の深い学びにつなげる。		

研究の計画

日時	内容	備考
4月7日(月)	推進委員会①	今年度の方針確認
4月17日(木)	研究全体会①	授業者の選定
4月中	総合的な学習の時間 研修	
5月中	カリキュラム・マネジメント表(学級経営案)の作成	授業研日程・教科の決定
5月～6月中旬	大研①の事前研究会	特別支援学級研究授業 言語通級研究授業 1～6年の小研
7月8日(火)	大研①	
夏休み	NRTテスト、全国学テ分析	
7月～8月上旬	大研②の事前研究会 職員研修	
11月	大研②	
10月～11月中旬	大研③の事前研究会	
12月4日(木)	大研③ 単元内自由進度学習 →小研(自由進度)も同日開催	
1月7日(水)	今年度のまとめ、来年度の方針	
1月末	研究集録(配付用)完成	

※R7 から集録の製本なし。スターオフィスのキャビネットへ

<様式>

学 校 名	山形市立第二小学校 山形市香澄町三丁目 9 番 38 号 TEL 023-622-0652 FAX 023-633-9310	校 長	大沼 清司
		研究主任	林 和沙
研 究 主 題	生き生きと表現し合い、くらしを豊かにする子どもの育成(3年次) ～ 4つの資質・能力を育成する授業の追究 ～		
研 究 主 題 設 定 の 理 由	本校では、学校教育目標を「輝く未来の星 ふじかげの子どもを育成する」、重点目標を「生き生きと表現し合い、くらしを豊かにする子どもの育成」と掲げている。「生き生きと表現し合う」とは、自分の思いや考えをもち、相手や状況に応じて表現したり、友達の多様な考えに触れたりして学び合うことであり、主体的な学びを通して「社会や生活の様々な変化を前向きに受け止め、自他ともに価値ある存在として尊重し、協働しながら様々な課題を乗り越え、豊かな生活を主体的に作り出す子ども」の育成を目指している。こうした力はこれからの時代を生きていく子どもたちにとって必要な力であり、日々の授業の中で、育てていくことが大切な力である。 昨年度、研究主題に迫るために新たに「4つの資質能力」をかかげ、子ども主体の授業に取り組んできた。視点②（表現し合う楽しさを感じられる学び合いや場の設定の工夫）に特に重点を置いて実践する中で、少しずつ自分の考えを表現したり、友だちと交流したりするのを喜ぶ姿が見えている。また、支持的風土を1年通して意識してきたことで、間違いを恐れずに表現しようとする子が見られたり、相手の気持ちを考えて行動したりするなど、「挑戦力」や「思いやりの心」が育ってきていると感じる場面も増えてきている。 一方で、授業づくりでは新たに、課題設定の場面で教師から課題を下ろしてしまうことや、振り返りの時間の確保や取り組みせ方の難しさに課題を感じた。学び合いの場では、より考えを深める交流をめざし「創造力」を高めていきたい。また昨年度から取り組み始めた「スピーチ活動」では、話を聞いて共感する力がついてきた反面、質問する子の固定化や質問の内容が表面的になってしまっていることに課題がある。 そこで今年度も研究テーマを引き続き「生き生きと表現し合い、くらしを豊かにする子どもの育成(3年次)」とし、さらに追及していくことで子どもたちの力を伸ばし、教師の授業力を高めていく。めざす子どもの具体的な姿「4つの資質能力」を視点として、2つの手立てを通して迫っていく。2つの手立てとは、手立て①「心が動く課題の設定と学びをつなげるふり返りの充実」と、手立て②「表現し合う楽しさを感じられる学び合いや場の設定の工夫」である。手立て①は、「課題作り→解決の見通し→振り返り」の学びのつながりを意識しながら考えていくために、昨年度の視点①と視点③を1つにまとめた。 授業の中で有効な手立てを検証していき、教育活動全体で子ども主体の学びを通して、4つの資質・能力を付けることで、生き生きと表現し合い、くらしを豊かにする子どもを育てていく。		

	・捉え方や根拠の違いをもとした交流。 ・対話しやすい交流。 ・学びの広がりや高まりが生まれるようにコーディネートする。 ③教師の出番を的確に判断し、授業を活性化させる。 ・指示の工夫・・・考える視点や発表時の吟味する観点など。 ・発問の工夫・・・考えを引き出す。考えを深める発問など。 ・個に応じた適切な支援の工夫・・・多様な学習方法や学習形態など。 ④子どもの思考や問題解決の過程が見えるように板書の構造化を図る。 ⑤ICTなどの活用。 ③ <u>スピーチの取り組み</u> 聴き合う風土づくりや、話し手に自己肯定感や存在感をもたせるため、また子どもたちのやりとりの質の向上や子どもたち同士で話をつなげる交流を目指し、週に1回スピーチを行う。(毎週火曜日のモジュール)スピーチに取り組むことで子どもだけでなく、教師の子どもの発言から本質を引き出す力を伸ばしていきたい。																																				
研究の進め方	<table><tr><td>大研</td><td> ・各学年部で1つ(低学年部1、中学年部1、高学年部1、合計3+提案授業1) ・学年部で授業の事前研究会と事後研究会を行う。 ・授業研には、外部講師を招聘する。 ・指導案はフルサイズ指導案。授業1週間前まで完成させる。 ・指導案は全員に配付し、参観、事後研究会に参加する。 ・教科は原則単元構成を含めて考えられるもの。 </td></tr><tr><td>中研</td><td> ・大研をしない学年で行う。 ・学年で授業の事前研究会を行う。事後研究会を学年部と自主参加者で行う。 ・授業研には、外部講師を招聘する。 ・指導案は、フルサイズ指導案。授業1週間前まで完成させる。 ・指導案は全員に配付し、学年部で参観。その他は可能な限り参観する。 ・参観し、事後研に出ない場合は、用紙に感想を書いて授業者に渡す。 </td></tr><tr><td>小研</td><td> ・大研中研の授業者以外は、授業公開のみ。指導案は本時のみ。 ・事前研や事後研は任意だが、参観し事後研に出ない場合は、用紙に感想を書いて授業者に渡す。 </td></tr></table>	大研	・各学年部で1つ(低学年部1、中学年部1、高学年部1、合計3+提案授業1) ・学年部で授業の事前研究会と事後研究会を行う。 ・授業研には、外部講師を招聘する。 ・指導案はフルサイズ指導案。授業1週間前まで完成させる。 ・指導案は全員に配付し、参観、事後研究会に参加する。 ・教科は原則単元構成を含めて考えられるもの。	中研	・大研をしない学年で行う。 ・学年で授業の事前研究会を行う。事後研究会を学年部と自主参加者で行う。 ・授業研には、外部講師を招聘する。 ・指導案は、フルサイズ指導案。授業1週間前まで完成させる。 ・指導案は全員に配付し、学年部で参観。その他は可能な限り参観する。 ・参観し、事後研に出ない場合は、用紙に感想を書いて授業者に渡す。	小研	・大研中研の授業者以外は、授業公開のみ。指導案は本時のみ。 ・事前研や事後研は任意だが、参観し事後研に出ない場合は、用紙に感想を書いて授業者に渡す。																														
大研	・各学年部で1つ(低学年部1、中学年部1、高学年部1、合計3+提案授業1) ・学年部で授業の事前研究会と事後研究会を行う。 ・授業研には、外部講師を招聘する。 ・指導案はフルサイズ指導案。授業1週間前まで完成させる。 ・指導案は全員に配付し、参観、事後研究会に参加する。 ・教科は原則単元構成を含めて考えられるもの。																																				
中研	・大研をしない学年で行う。 ・学年で授業の事前研究会を行う。事後研究会を学年部と自主参加者で行う。 ・授業研には、外部講師を招聘する。 ・指導案は、フルサイズ指導案。授業1週間前まで完成させる。 ・指導案は全員に配付し、学年部で参観。その他は可能な限り参観する。 ・参観し、事後研に出ない場合は、用紙に感想を書いて授業者に渡す。																																				
小研	・大研中研の授業者以外は、授業公開のみ。指導案は本時のみ。 ・事前研や事後研は任意だが、参観し事後研に出ない場合は、用紙に感想を書いて授業者に渡す。																																				
研究の計画	<table><tr><td>4月</td><td>3日</td><td>研究推進委員会①</td><td>概要、方法の検討</td></tr><tr><td>4月</td><td>14日</td><td>研究全体会① スピーチ研修会①</td><td>研究の概要、目指す子どもの明確化、方法の共有、質疑応答・スピーチ研修</td></tr><tr><td>7月</td><td>9日</td><td>校内授業研究会</td><td>提案授業</td></tr><tr><td>7月～ 12月</td><td></td><td>校内授業研究会</td><td>1学期に大研1つ、2学期に2つ 各学年部1つは1学期に行う。 ＜大研＞ 7月15日(火)、9月8日(月)、12月4日(木)</td></tr><tr><td>7月 or 8月</td><td></td><td>スピーチ研修会②</td><td>1学期に撮ったスピーチ動画を見合う。疑問・悩み共有</td></tr><tr><td>11月</td><td></td><td>スピーチ研修会②</td><td>2学期に撮ったスピーチの動画を学年部で見合い、これまでの成果・課題について出し合う。</td></tr><tr><td>1月</td><td>26日</td><td>研究推進委員会②</td><td>研究全体会②について、実践記録のまとめについて</td></tr><tr><td>2月</td><td>16日</td><td>研究全体会②</td><td>今年度の振り返り・来年度に向けて</td></tr><tr><td>2月</td><td>27日</td><td>研究推進委員会③</td><td>来年度に向けて</td></tr></table>	4月	3日	研究推進委員会①	概要、方法の検討	4月	14日	研究全体会① スピーチ研修会①	研究の概要、目指す子どもの明確化、方法の共有、質疑応答・スピーチ研修	7月	9日	校内授業研究会	提案授業	7月～ 12月		校内授業研究会	1学期に大研1つ、2学期に2つ 各学年部1つは1学期に行う。 ＜大研＞ 7月15日(火)、9月8日(月)、12月4日(木)	7月 or 8月		スピーチ研修会②	1学期に撮ったスピーチ動画を見合う。疑問・悩み共有	11月		スピーチ研修会②	2学期に撮ったスピーチの動画を学年部で見合い、これまでの成果・課題について出し合う。	1月	26日	研究推進委員会②	研究全体会②について、実践記録のまとめについて	2月	16日	研究全体会②	今年度の振り返り・来年度に向けて	2月	27日	研究推進委員会③	来年度に向けて
4月	3日	研究推進委員会①	概要、方法の検討																																		
4月	14日	研究全体会① スピーチ研修会①	研究の概要、目指す子どもの明確化、方法の共有、質疑応答・スピーチ研修																																		
7月	9日	校内授業研究会	提案授業																																		
7月～ 12月		校内授業研究会	1学期に大研1つ、2学期に2つ 各学年部1つは1学期に行う。 ＜大研＞ 7月15日(火)、9月8日(月)、12月4日(木)																																		
7月 or 8月		スピーチ研修会②	1学期に撮ったスピーチ動画を見合う。疑問・悩み共有																																		
11月		スピーチ研修会②	2学期に撮ったスピーチの動画を学年部で見合い、これまでの成果・課題について出し合う。																																		
1月	26日	研究推進委員会②	研究全体会②について、実践記録のまとめについて																																		
2月	16日	研究全体会②	今年度の振り返り・来年度に向けて																																		
2月	27日	研究推進委員会③	来年度に向けて																																		

<様式>

学 校 名	山形市立第三小学校 山形市宮町五丁目7番58号 TEL 023-622-0653 FAX 023-633-9320	校 長	高橋 和久				
		研究主任	三宅 慶知				
研 究 主 題	子どもの粘り強さと自己調整力を育む（4年次） ～ 見方・考え方を軸にした授業づくりを通して ～						
研 究 主 題 設 定 の 理 由	これから先の時代は、「厳しい挑戦の時代」である。一人一人の多様性を原動力とし、新たな価値を見出していくことが必要となってくる。子どもたちには、こうした変化を乗り越え、高い志や意欲をもつ自立した人間として、他者と協働しながら価値の創造に挑み、未来を切り拓いていく力を身に付けることが求められる。新しい時代を生きる上で必要な資質・能力を確実に育んでいくためには、「何を教えるか」だけでなく、「どのように学ぶか」という、学びの質や深まりを重視することが必要となってくる。さらに、課題の発見と解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習やそのための指導方法を充実させていく必要がある。「生きる力」や「確かな学力」は 21 世紀の社会を生きる上で必要な力とされ、その育成が求められている。 そのような社会的背景とともに本校では、令和4年度から、「子どもの粘り強さと自己調整力を育む～見方・考え方を軸にした授業づくりを通して～」を研究主題として掲げ学校研究に取り組んできた。見方・考え方を働かせるための手立てや、「粘り強さ」と「自己調整力」を高めるための手立てを明確にし、授業研究会を行い、事後研究会等においては、子どもの具体的な姿をもとに話し合い、実践を重ねてきた。そして、「粘り強さ」「自己調整力」について、令和6年度の成果と課題を明らかにした。以下は、研究の重点について、令和6年度の成果と課題である。						
	「粘り強さ」「自己調整力」の成果 <table><tr><th>粘り強さ</th><th>自己調整力</th></tr><tr><td> ◇自分事になる 教科の見方・考え方を使う問題 および課題設定が大切 ◇見方・考え方を使える授業づくり ◇見方・考え方や付けたい力の明示と共有 ◇既習事項の活用 ◇繰り返しによる学習活動 (学習の見通し・学び方の習得) □ 掲示(考えるうえでよりどころとなる)などの 視覚的支援 □ 子ども理解・共感的な理解(生徒指導の4視点) </td><td> □ グループ学習と他者交流 ◇ 単元計画の掲示と共有及び ICT 活用など視 覚的支援→学習の見通し 次の活動とのつ ながり □ 解決過程の選択 □ 子ども理解とスモールステップ ◇=「粘り強さや自己調整力の育成」「課題設 及び見通しをもてる学習計画」「見方・考え 方を軸」など、研究主題や副題、研究の重点に 関わる成果。 </td></tr></table>			粘り強さ	自己調整力	◇自分事になる 教科の見方・考え方を使う問題 および課題設定が大切 ◇見方・考え方を使える授業づくり ◇見方・考え方や付けたい力の明示と共有 ◇既習事項の活用 ◇繰り返しによる学習活動 (学習の見通し・学び方の習得) □ 掲示(考えるうえでよりどころとなる)などの 視覚的支援 □ 子ども理解・共感的な理解(生徒指導の4視点)	□ グループ学習と他者交流 ◇ 単元計画の掲示と共有及び ICT 活用など視 覚的支援→学習の見通し 次の活動とのつ ながり □ 解決過程の選択 □ 子ども理解とスモールステップ ◇=「粘り強さや自己調整力の育成」「課題設 及び見通しをもてる学習計画」「見方・考え 方を軸」など、研究主題や副題、研究の重点に 関わる成果。
	粘り強さ	自己調整力					
◇自分事になる 教科の見方・考え方を使う問題 および課題設定が大切 ◇見方・考え方を使える授業づくり ◇見方・考え方や付けたい力の明示と共有 ◇既習事項の活用 ◇繰り返しによる学習活動 (学習の見通し・学び方の習得) □ 掲示(考えるうえでよりどころとなる)などの 視覚的支援 □ 子ども理解・共感的な理解(生徒指導の4視点)	□ グループ学習と他者交流 ◇ 単元計画の掲示と共有及び ICT 活用など視 覚的支援→学習の見通し 次の活動とのつ ながり □ 解決過程の選択 □ 子ども理解とスモールステップ ◇=「粘り強さや自己調整力の育成」「課題設 及び見通しをもてる学習計画」「見方・考え 方を軸」など、研究主題や副題、研究の重点に 関わる成果。						
「粘り強さ」「自己調整力」の課題 <table><tr><th>粘り強さ</th><th>自己調整力</th></tr><tr><td> ◆ 図・式・操作活動を結び付ける(難しさ) (一弥先生も教えてくださったことでもありま す 教科の本質との関わり) ◆ 子どもの「学びたい」を引き出す授業づくり (一弥先生も教えてくださった教科の本質を学 ぶ=楽しさにつながる) ◆ 実生活と結び付け考えたい課題設定 (オーセンティックな学びとも言えます) ■ 学習したことや見方・考え方を生活に生かす・ 結び付ける </td><td> ◆ ふり返りの活用・ねらい・位置付け ■ 自立した個に育てる 自分に還る学びの過 程 ◆ 子ども(個)が計画を立て修正しながら 学ぶ経験 ◆ 計画通りに進まなかったときに修正・調整 ◆=「粘り強さや自己調整力の育成」「ふり返りと 自己の変容」「見方・考え方を軸」など研究主 題や副題、研究の重点に関わる課題。 </td></tr></table>			粘り強さ	自己調整力	◆ 図・式・操作活動を結び付ける(難しさ) (一弥先生も教えてくださったことでもありま す 教科の本質との関わり) ◆ 子どもの「学びたい」を引き出す授業づくり (一弥先生も教えてくださった教科の本質を学 ぶ=楽しさにつながる) ◆ 実生活と結び付け考えたい課題設定 (オーセンティックな学びとも言えます) ■ 学習したことや見方・考え方を生活に生かす・ 結び付ける	◆ ふり返りの活用・ねらい・位置付け ■ 自立した個に育てる 自分に還る学びの過 程 ◆ 子ども(個)が計画を立て修正しながら 学ぶ経験 ◆ 計画通りに進まなかったときに修正・調整 ◆=「粘り強さや自己調整力の育成」「ふり返りと 自己の変容」「見方・考え方を軸」など研究主 題や副題、研究の重点に関わる課題。	
粘り強さ	自己調整力						
◆ 図・式・操作活動を結び付ける(難しさ) (一弥先生も教えてくださったことでもありま す 教科の本質との関わり) ◆ 子どもの「学びたい」を引き出す授業づくり (一弥先生も教えてくださった教科の本質を学 ぶ=楽しさにつながる) ◆ 実生活と結び付け考えたい課題設定 (オーセンティックな学びとも言えます) ■ 学習したことや見方・考え方を生活に生かす・ 結び付ける	◆ ふり返りの活用・ねらい・位置付け ■ 自立した個に育てる 自分に還る学びの過 程 ◆ 子ども(個)が計画を立て修正しながら 学ぶ経験 ◆ 計画通りに進まなかったときに修正・調整 ◆=「粘り強さや自己調整力の育成」「ふり返りと 自己の変容」「見方・考え方を軸」など研究主 題や副題、研究の重点に関わる課題。						

研究から見えた成果と課題【まとめ ○＝成果 ▲＝課題】

- 自分事として問題や課題を捉える工夫、教科の見方・考え方及び既習事項を使うことができる問題や課題設定によって、子ども自らが問題解決に向かう姿や学習有用感を得られるような学びにつながってきている。
- 教師と子どもが教科の見方・考え方を共有する、教師と子どもが単元計画を共有し掲示及び ICT の活用による視覚的支援によって、見通しをもち、自分で判断しながら学ぶ姿が見られるようになってきている。
- ▲研究の日常化という視点で見ると教師主導型の授業から、子どもを信頼し、教科の本質を大切にしながら子ども主体となる授業づくりへと転換していく。そのためには、学習形態や学び方、学習過程の工夫も必要である。
- ▲自己の変容に気付くことができるふり返りのねらい・位置付け・活用、自分の学びを修正・調整しながら自分に還る学びの過程の工夫を行い、自己調整しながら自立した学習者へと育てていく。

成果と課題を受け、本校では、「粘り強さ」とは子どもが自分事として捉えた課題に取り組み解決していこうとする際、自分の持っている知識や技能を総動員させる力だということ。「自己調整力」とは、何としても課題を解決するために他者と意見を交流させる、自分なりに調べる、助けを求める、これまでの経験を生かすなどの力だということ、そして、「粘り強さ」と「自己調整力」は相乗効果で伸びてくるものだという認識を共有した。

そこでわたしたちは、一人一人の子どもが自己肯定感をもち、身に付けてきた資質・能力を発揮しながら、自らの願いを実現していくことができるように育てていきたいと考えている。子どもたちは、人や自然、地域とかかわりながら学び、仲間とともに学ぶ中で自分を見つめ直し、さらに高まっていこうとすることができる。互いに仲間を尊重し合う関係を育みながら、子ども一人一人が自信をもち、自分の願いの実現に向かって追究を続け、学んだことを生活に生かしていくことができるよう、研究を推進していきたい。

研究の目標

学校全体として、以下の4つを「子どもを育てる4つの柱」にし、校内研究を中核としてカリキュラム全体で育む。

- 【協働性】 多様性を受け入れ、共感的な関係を築き、協働して課題に立ち向かう子ども
 - 思いやりのある聴く力の育成
 - 伝えたいという願いのある発信力の育成
 - 多様な人との出会いから学ぼうとする力の育成
- 【主体性】 課題を自分のこととしてとらえ、願いをもって自力解決に向かう子ども
 - 学びの手応えや楽しさを味わい、次の学びを求め続ける力の育成
 - 課題の解決に、自分なりの見通しをもって取り組む力の育成
 - 情報を効果的に活用し、筋道を立てて考える力の育成
- 【創造性】 夢や願いをもち、学びや経験をくらしに生かそうとする子ども
 - 気づき・考え・行動する実践力の育成
 - 自己肯定感・自己有用感の高いチャレンジ力の育成
 - 失敗体験や振り返り、他者評価を次の学びにつなぐ力の育成
- 【持続性】 日々の学びを通して自信をもち、社会のニーズに合った活動に挑む子ども
 - 学級、学年のよさをPRすることを通して、新たな目標をもったり、メタ認知を深めたりできるようにする。
 - 地域の出来事、時事的な問題、社会的なニュースなどに関心を向け、よりよくするために自ら関わりたいという願いがもてるようにする。
 - 自分の生きたい社会について話し合ったり、イメージしたりして、未来を切り拓こうとする姿勢を創る。

Keyword: 「チャレンジ」

- 向上をイメージし、今よりも前へという意識をもった学校生活にする。
- 共通の願いや目標に向かい、協力して取り組む必要感を感じられるようにする。
- 結果や成果を適正に評価し、次へつながる連続的な取り組みにしていく。

研究の内容および重点

三小の子どもたちに育成したい「粘り強さ」「自己調整力」（具体的な目指す子どもの姿）について私たちが共通理解を図った具体的な目指す子どもの姿は以下の通りである（R6まで）。

令和7年度の第1回研究全体会で学年部ごとに目指す子どもの姿を再検討し、整理していく。

粘り強さ	自己調整力
☐ もっている知識や技能を用いて、何とかして解決しようとする、あきらめないで最後まで取り組む。 ☐ 課題からはなれず、のめりこむ。 ☐ 課題を自分事として捉え、挑戦してみようとする。	☐ 自分の変容を理解する。 （できるようになった→その原因は何か） ☐ 他者の考えを受け入れたり、よさを認めたりして、自分に取り入れる。 ☐ 解決するための手段を選択する。

「粘り強さ」とは子どもが自分事として捉えた課題に取り組み解決していこうとする際、闇雲に課題に取り組み続けることなく、自分のもっている知識や技能を総動員させる力である。「自己調整力」とは、何としても課題を解決するために他者と意見を交流する、自分なりに調べる、助けを求める、これまでの経験を生かすなどの力である。「粘り強さ」と「自己調整力」はそれぞれが独立して伸びていたり、一方が身に付いてからもう一方が身に付いたりするものでもなく、相乗効果で育てていくもの、どちらかが伸びるのに比例してもう一方も伸びてくるものだと考える。

「粘り強さ」を育むために 働かせる・機能させる子どもへ	自己調整力」を育むために 働かせる・機能させる子どもへ
◆子どもが課題解決の見通しをもてる学習計画の工夫。 ☐ 掲示やICT活用。 ☐ 見方・考え方の共有。 ☐ 子ども一人一人の目標設定・学習計画。 ◆子どもが学びに向かうための導入や課題設定の工夫。 ☐ 既習事項や教科の見方・考え方を足場。 ☐ 子どもたちの興味・関心や実態を捉え、子どもたちが「解決したい」と思える導入及び課題設定。 ☐ 実生活と結び付ける・学習したことを生活に生かす学習場面や学習課題の設定。	◆適切な自己評価をするための視点の設定。 ☐ ふり返りの視点を明示。 ☐ ふり返りを共有。 ☐ 自己の変容を実感。 ◆解決方法を選択・決定できる学習過程の工夫。 ☐ 個別最適な学びや協働的な学びの視点を取り入れた学習過程や学習活動。 ☐ 解決方法を子どもたちが選択・決定できる学習過程や学習活動。
「粘り強さ」「自己調整力」を育む・働かせる・機能させるための土台 ◇子どもの実態に合わせた単元の計画、修正 ◇カリキュラム・デザインを基盤にした学級経営と研究の日常化 （主体性の醸成過程 教師・子どもの授業像 研究の日常化との関連）	

「粘り強さ」「自己調整力」どちらの視点においても、まずは「子どもの実態に合わせた単元の計画、修正」「カリキュラム・デザインを基盤にした学級経営と研究の日常化」が土台になると考える。「なぜその単元を学ぶのか」「何をその単元から学ぶのか」「どのようにその内容を学ぶのか」を明確にした単元計画を立てた上で、子どもと教師が解決の見通しを「共有」し、カリキュラム・デザインを活用した研究の日常化によって「粘り強さ」と「自己調整力」を育んでいきたいと考える。また、今年度は、「重点の選択」によって、研究の日常化やカリキュラム・デザインで重点化して授業づくりを行っていることが見えるように取り組んでいく。さらに、「育む」イメージを、「2つの資質・能力を子どもが働かせる・機能させる」ことができるようにしていくことへ私たちの考え方の転換を図っていく。

研究の方法

研究の進め方について昨年度のふり返しより

- ◇ねらいを明確にした学年協働研究⇔◇個人研究（学年部で単元を学ぶことができる）⇒**選択**
- ◇研究教科を限定しない⇔◇研究教科を1つに⇒**算数を窓口**に
- ◇系統性を見る（縦のつながり）⇒領域をそろえるのは学年まで⇒**選択**
- ◇小研の事前研・事後研 時間の確保と日程調整（年度の初めに調整できるとよい）
- ◇子どもの具体的な学びから検証（授業での見取り・事後研にも関わる）⇒**できる限り**

（1）研究の窓口：算数 （こまくさ学級は子どもの実態等に応じ、算数に限定しない）

（2）研究方法

指導案作成 - 事前研 - 本時の参観 - 事後研のプロセスを通して、子どもの「粘り強さ」と「自己調整力」が高まったかどうか、子どもたちが「粘り強さ」「自己調整力」を働かせたり、機能させたりできていたかをふり返る。できる限り「固有名詞を大切に」「子どもの学びの姿を具体的に捉えた」事後研究会にしていく。また、昨年度のふり返しで、「系統性を見ていく」という意見があったが、全学年で、「領域をそろえ」「系統性を見る」のは、難しいため、今年度は、学年で選択制による研究を行う。領域をそろえるのは、学年までとしていく。

A：学年で領域をそろえず、個人が領域や単元を決定する。

B：学年内で領域をそろえ、個人で単元を決定する。

C：学年で領域と単元を決め、1つの単元を学年協働研究で行う。

（3）全校研

年間3～4回程度の授業研究会を計画する。通常学級，特別支援学級を問わない。今年度は3回の全校研で4つの授業を計画する。こまくさ学級も含める。自主公開研は，授業研究の日程を近隣校等に周知し，参加者を募る。

（4）学年部研

学年部を基盤にして，研究主題や研究の重点に迫ることができるよう，すべての学級担任が授業実践を行う。

（5）研究のまとめ（授業実践のふり返し）

事後研から研究の重点について，成果と課題を明らかにし，また，年間を通した授業実践のふり返しを行い，一人一人が研究のまとめを作成する

研究の計画

研究全体会・研究推進委員会・全校研を教育課程に位置付けて計画。また、学年部研も計画する。

日 程		内 容	備 考
4月3日	木	研究推進委員会① 今年度の研究の方向性	推進委員決定 研究の概要・重点・研究年間計画 全体研・授業研の日程について 指導案・事前研・事後研・実践記録について確認
4月9日	水	研究推進委員会② 研究全体会①に向けて	研究の概要・重点・研究年間計画 全体研・授業研の日程について（授業者の検討） 指導案・事前研・事後研・実践記録について確認
4月17日	木	研究全体会①	研究の概要（案）提案・目指す子どもの姿検討 全体研・授業研の日程について（授業者の検討・決定） 指導案・事前研・事後研・実践記録について確認
4月30日	水	研究推進委員会③ 全校研①に向けて	目指す子どもの姿検討及び整理 全校研①に向けて 指導案・事前研・事後研・実践記録など確認
（5月2日）	金	希望者	（齊藤一弥先生講演のビデオ視聴 16：00～）
5月12日	月	研究全体会② 全校研①に向けて	目指す子どもの姿提案及び検討 指導案・事前研・事後研・実践記録について 全校研①に向けて 授業研日程調整
5月26日	月	研究全体会③	カリキュラム・デザイン表作成 学級経営の土台づくり
5月30日	金	研究推進委員会④ 全校研①に向けて 事前研	全校研①に向けて（役割分担及び事前研）
6月10日	火	全校研①	全校研①（低学年）部 研究推進委員から授業者（稲葉 玲華先生） ★指導主事の先生を検討
6月30日	金	研究推進委員会⑤	全校研①を終えて（改善点・変更点） 全校研②に向けて（事前研・一弥先生授業の参観）
7月18日	金	全校研②	全校研②（中学年）部 授業者（高梨 純奈先生） 齊藤一弥先生 ご来校・ご指導
7月29日	火	研究推進委員会⑥	全校研②を終えて（改善点・変更点） 全校研③（自主公開研）に向けて 単元の検討 事前研（日程調整など）について
8月28日	木	研究推進委員会⑦	今後の研究の方向性の確認 全校研③（自主公開研）に向けて（準備・日程等確認） 一弥先生授業の参観について
10月15日	水	研究推進委員会⑧	全校研③（自主公開研）に向けた準備確認
11月11日	火	全校研③ （自主公開研）	全校研③（自主公開研 2 授業） 授業1（高学年）部 授業者（芳賀 梢先生） 授業2（こまくさ）部 授業者（武田ひなた先生） 齊藤一弥先生・（これから検討）先生 ご来校・ご指導 ★近隣の市町村にも案内を出します。
12月10日	水	研究推進委員会⑨	12月19日研究全体会④に向けて（提案内容検討）
12月19日	金	研究全体会④	R7 校内研究のふり返し（成果と課題） 研究紀要作成について
1月8日	木	研究推進委員会⑩	研究紀要について 今年度の成果と課題検討
2月9日	月	研究推進委員会⑪	今年度の成果と課題 来年度に向けて（方向性検討）
2月19日	木	研究全体会⑤	今年度の成果と課題 来年度に向けて（方向性検討）
2月25日	水	研究推進委員会⑫	来年度に向けて研究の方向性（固める）

学 校 名	山形市立第四小学校 〒990-0055 山形市相生町4番37号 TEL 623-6019 FAX 633-9321	校 長	樋口潤一
		研究主任	逸見裕輔
研 究 主 題	研 究 主 題 つながりの中で学ぶ、しなやかな子ども ー深い子ども理解を土台にした「教師の待ちと出」を探るー（5年次）		
研 究 主 題 に つ い て	学校研究は、学校教育目標「よりよい社会や人生をとともに切り拓いていく子どもを育てる」を具現化するための方策である。本研究主題は、学校教育目標と子どもの実際の姿と期待する姿を照らして設定した。また、それに迫るための教師のあり方を副題に据え、研究の柱とした。多様性を尊重し、他者と協働的に学びながら、それぞれの強みや個性を発揮できる子どもを育てていきたい。		
研 究 の 重 点	「はじめに子どもありき」を出発点にして 1 深い子ども理解 （1） 深い子ども理解の土台＝愛情と信頼に基づく関係 深い子ども理解とは、子どもの育ちの可能性を探ることである。深い子ども理解は、愛情と信頼に基づく関係の上に成り立つものである。 子どもたちは、一人一人違っている。そして、本来力をもち自ら進んでいく力をもっている。どの子もその子らしく学び、その子らしく育ってほしい。そのために、教師は子どものありのままを受け入れ、心に寄り添い、一人一人を大切にする。子どもの願いや思いに耳を傾け、一人一人が何を求めているのかをとらえることが必要である。また、子どもの行動そのものにだけ目をやらず、行動の奥にあるもの・意味するものまで見とれる教師でありたい。そうして、その子の「人・もの・こと」に対する意味や価値を分かろうとし続けることに取り組んでいきたい。 （2） カリキュラム・マネジメント カリキュラム・マネジメントは、学級担任の日常の営みである。何より、目の前の子どもを丁寧に見つめ、その意味を授業や学級経営の改善に返していくことである。本校の子どもたちは、どんな子どもたちなのか、子どもの姿を分析する必要がある。子どもの事実をとらえ、資質・能力で分析することができるようにしたい。そして、学校全体で育てたい子ども像を共有し計画を立て、「子どもがどう育ったか」という視点でふり返り、目の前にいる子どもの指導にいかしていくことを続けていく。子どもが身に付けた資質・能力は意図的にフィードバックして、子どもが自身の成長を実感し学び続けることができるようにしたい。昨年度、それぞれの学級が「学級カリキュラム」を作成し、実践を積み重ねてきた。昨年度の学級カリキュラムを生かしながら、目指す子どもの姿に迫るために、それぞれの特色が見える学級カリキュラムを構築していく。その際、生活科・総合的な学習の時間を要に、他教科や領域、行事等と関連付けながら学級で目指す子どもの姿に迫るようにする。一人一人の思いを尊重し、子どもに学びを委ねる単元・活動を大切にしていく。 また、作成した単元配列表に、単元を入れ替えたり他教科と関連付けたりした足跡を残し、次年度に引継いでいく。内容の重点化、焦点化を図り、学びの充実や軽重のつけた実践につなげていきたい。		

	2 教師の「待ちと出」 (1) 教師の「待ち」 子どもが強い思いをもち、主体的に活動に向かったとしても、必ずしもことが順調に進むわけではない。見通しの甘さから、やり直しを余儀なくされることもある。そんなとき、どんな思いでそれら乗り越えようとしているのか、実際にどのようにして乗り越えているのか、そしてそれを支える思いは何かを捉えながら、子どもを信じて見守っていく。 ただし、子どもたちがやりたいことをただ手放しで見ているわけではない。子ども主体ということは、「子どもたちの自主性に任せる」のではない。子どもが行動を起こす元になる心を支援し、「子どもの自主性を育てる」ことである。子どもが、知識や技や見通しが無いままに、ひたすらに迷い、悩んでいることはないか。教師は策もないまま子どもを傍観していることはないか。子どもの育ちにつながる「待つこと」になっているか。そもそも子どもを信じて「待つこと」ができているか。教師は常に自分をふり返りながら、検討していく。 (2) 教師の「出」 「待つこと」だけでは子どもの育ちは成立しない。子どもが学んでいく過程を妨げてはいけませんが、学び方が分からないときに必要なことを教えないと、子どもの学びは広がらない。子どもたちの力が最大限に引き出され新しい自分に出会うためには、「教師の出」つまり、より広い視野と深い思索に根差した適切な教師の支援が大事になる。そのために、わたしたちは物事の本質を捉え、子ども理解を土台にした教材研究、内容研究を大切にいく。「教師の出」は、子どもが活動をうまくできるようにするためだけのものではない。子どもの追究を強くするために行うものである。子どもたちが身の回りの人・もの・ことに問題意識をもち、解決していくことができるようにするために、どんな場合に待ち、どこでどれぐらいどのように出るかを吟味していく。
研究の内容と方法	(1) 夢中になって学びに向かう、自立した学習者を育てる教師の待ちと出 昨年度、全職員で一つの単元内自由進度学習に取り組んだ。普段、長い時間集中して授業に参加することが難しい子が、単元の学びに没頭し、目を輝かせながら問題に取り組んでいた。また、いつも授業を牽引する子は、自分で決めた課題を自ら選択し、終わらせ、取り組みたい発展課題に試行錯誤しながら取り組んでいた。夢中になって学びに向かう子どもたちの姿を見たわたしたちは、「普段の授業の中にもこのような子どもたちの姿を求めたい。」と、共通の思いを抱いた。また、子どもたちの多様性を尊重し、個に応じた授業を展開していく必要性を痛感した。 目の前の子どもたちは一人一人違う。だからこそ、一人一人の育ちを適切に捉え、目指す子どもの姿を設定する必要がある。そのため、自立した学習者を育てるためには、深い子ども理解に根差した個に応じた教師の待ちと出が求められる。「こんな場をつくったらあの子は輝きそうだな。」「これがあればあの子も一人で学べそうだ。」「ここですまずいた場合は、〇〇の視点から助言してみよう。」と思いを巡らせるなど、個の求めに合った働きかけを吟味することで、個の学びを大切にする。一人一人が築いた学びを集団の中で紡ぐことで、個の学びがさらに磨かれ、学ぶよさを実感できるようにしていく。そうすることで、「もっと～してみたい。」という思いを膨らませ、夢中になって学びに向かい続けると考える。 (2) 子どもも教師もわくわくす・ドキドキする楽しい授業 学校生活の大半を過ごすのは授業の時間である。子どもたちが「授業が楽しみだな。」「どうしてこうなるのだろう？調べてみたいな。」「もっと～したい。」と思いを膨らませることができるよう日々を目指していきたい。そのためには、子どもの思いに耳を傾けたり、想像したりしながら、その子のことを理解しようとする姿勢が欠かせない。その上で、それぞれの思いにフィットする働きかけ（単元づく

り・教具や教材づくり・言葉がけ・環境づくり等)ができるように、その教科や単元の本質を捉えた働きかけを講じていく。また、子どもの思いと併せて、わたしたち教師自身が「面白い。」「もっと～したい。」と思えるような材や単元を構想することを大切にしたい。子どもだけでなく、教師の中にも「楽しい授業がしたい。」「もっとできるようになりたい。」という強い願いがある。それぞれの授業者が実践を通して「できるようになりたいこと」や、「目指す授業像と教師の姿」を明らかにし、実践に取り組んでいく。教師がわくわく、ドキドキする授業を構想したり実践したりすることで、子どもたちも学ぶ楽しさや喜びを味わうことができるようにしたい。

(3) 本物の事象(人・もの・こと)との出会いを大切にする

子どもの追究意欲は、常に高まった状態にあるわけではない。活動の空気が停滞し、這いまわることもたびたびある。そのようなとき、わたしたちは本物の事象(人・もの・こと)といつ・どのように出会わせるか、吟味することが求められる。

昨年度、5年総合的な学習の時間「米粉広め隊」の実践では、米粉パンを製造・販売する阿部さんに、なぜ今の職に就いたのか、どのような願いをもっているのか、お話いただいた。「米を食べて健康に生きて欲しい。」「苦しいことばかりだけど、お客さんの声があるから頑張れる。」「米の高騰で利益はほとんどない。ただ米粉パンを作ることが面白い。」など、熱い思いに触れた子どもたちの目は輝いていた。そこから「ぼくたちもこんなことをやってみたい。」「なぜこうなっているのだろう。」と、一人一人の思いが膨らみ、熱を帯びた追究に向かっていった。

このように、いつ、どのような本物の事象に出会わせるべきか、子どもの姿をもとに吟味していきたい。また、日頃から視野を広げ、子どもの学びを広げたり深めたりできる事象がないか検討するなど、教材研究に努めていく。

(4) すべての「授業」ととらえ、「生徒指導の5つの場」を意識して指導にあたる

子どもたちにとって、学校生活の全てが学びの場である。各教科領域の授業はもちろん、朝の会や帰りの会、給食や掃除の時間も「授業」としてとらえていく。本校で「三行事」として位置づけている学校行事「いちよう大運動会」「いちよう音楽会」「いちよう兄弟体験学習」も同様である。すべての「授業」について、「目の前の子どもにとって価値ある学びになっているか」という視点を持ち、教師の待ちや出を探りながら子ども一人一人の課題や育ちをとらえていくようにする。

生徒指導の5つの場……「自己決定の場」「存在感が持てる場」「人間的にふれあいが大切にされる場」「相手との関わりで行動できる場」「発達の可能性を最大限に発揮しうるような場」

(5) 「小さな学習会」

毎週金曜日の放課後に「小さな学習会」を位置づけて研修の時間とする。教材研究や情報交換、行事の詳細の打ち合わせ・検討、地域施設の見学などを行う。紙上での研修や共通の課題に取り組むなど、様々な方法を用いて日常的に研修を積み、実践にいかすことができるようにする。

(6) 校内授業研究会

校内授業研究会を通して、教師の授業力を高め、日常の授業の充実、改善を図り、目の前の子どもを育てていく。

各教科の授業づくりにおいては、教科内容そのものを研究し、教科を通した目で目の前の子どもの育ちを考えることが必要である。子どもたちは、どんな見方・考え方を働かせるのか、身に付けるべき資質・能力は何か、どのような問題解決が成し遂げられるかを吟味していく。そして、子ども自身が自分の力を自覚し、新たな課題に挑む強さと自信を身に付けることができるようにしたい。

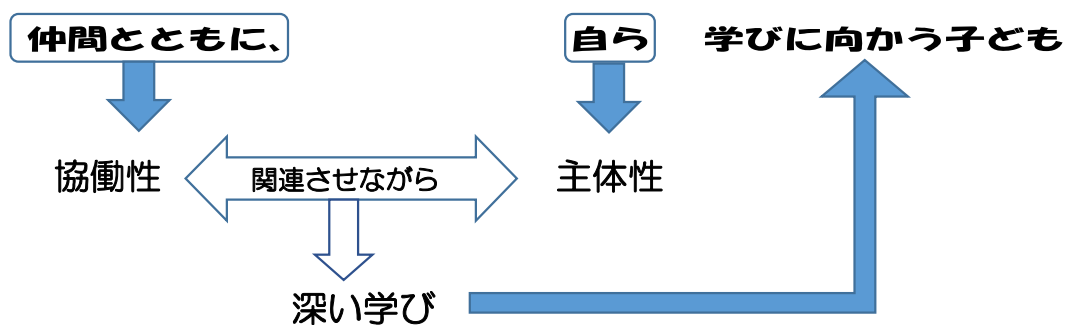
	そのために、事前・事後研究会は全員参加とし、互いの子どもの見方を聞き合うことでより子どもを多面的にとらえ、子どもの育ちを考えていくことができるようにする。とくに、今年度は「個の学びと集団の学び」について重点的に議論していく。また、教科内容の研究については、昨年度に引き続き外部講師の先生にご指導・ご助言いただきながら、教科内容の研究を進める。 (7) 研究を発信する場を意図的・計画的に運営する わたしたちの取り組みを多くの方々に見ていただいたり協議したりできる場を年2回設定する。私たちが大切にしてきたことを発信することで、手ごたえや新たな視点に出合うことができると考える。そのために、年2回予定されている研究会の場を意図的・計画的に運営し、子どもの育ちはもちろん、わたしたち教職員がさらにレベルアップできる場にしていく。また、学校外の方々を招き、教材研究や単元づくり、事後研において、様々な視点からの意見をいただくことで、本校での取り組みを広い視野で振り返る機会とする。(予定：①6月28日 日本生活科・総合学習教育学会山形大会 ②12月3日 自主公開研究会) (8) 研究のまとめ 1年間の実践を振り返るとともに子どもの育ちをまとめ、研究の足跡を残す。 (『銀杏の実』第71号)
研究の計画	4月～5月 ・研究主題と研究の柱、具体的な取り組みの共有 ・学級カリキュラム(年度当初版)作成 ・校内授業研究会(原則一学級一授業)を実施し、授業力の向上を図る 6月～ ・三大行事(「いちょう大運動会」、「いちょう音楽会」、「いちょう兄弟体験学習」)について「教師の待ちと出」を視点とした検討・ふり返り ・日本生活科・総合学習教育学会山形大会(生活科・総合的な学習の時間の授業公開) ・学級カリキュラム修正 12月 ・自主公開研究会 2月 ・研究のまとめ(1年間の授業や子どもの育ち) ・学級カリキュラムふり返り 3月 ・研究集録発行 ※年間を通して毎週金曜日(場合によっては水曜日も含む)の放課後に「小さな学習会」を設定する。

<様式>

学 校 名	山形市立第五小学校 山形市東原町一丁目1番9号 TEL 622-0655 FAX 633-9331	校 長	太田 千春
		研究主任	高橋 香菜
研 究 主 題	「一人一人の子供を主語にした授業づくりを目指して」(2年次) ～全ての子供の可能性を引き出す、個別最適な学びと協働的な学びの一体的充実～		
研 究 主 題 設 定 の 理 由	2 主題設定の理由 【社会的な背景から】 新型コロナウイルスのパンデミックや急速な AI の普及、DX による社会構造の変化など、現代の社会は複雑で予測困難となってきた。このような時代だからこそ、一人一人の子供が持続可能な社会の創り手となることができるようにするためには、自らの意思をしっかりともち、主体的に考え、多様な他者と協働しながら納得解を導き出すことができる資質・能力の育成が求められる。そして、学校教育は、生涯にわたって学び続ける基礎を培う役割を担っている。 【自立した学習者の育成】 「自立した学習者」とは、今、求められる資質・能力を身に付けるために、自らの判断と意思で、生涯にわたって能動的に学び続ける姿であると捉えている。また、自立した学習者には、自らが自己の目標を設定し、目標達成に向けて自らの学びを主体的に調整し、実行し、進捗状況を評価し目標を再設定するといった、自ら学びを調整する力が必要であると考え。さらに、一人一人の子供を自立した学習者に育成していくためには、教師主導の授業から脱却し、一人一人の子供を主語とした学習者主体の授業へと「観」を転換していく必要がある。子供自身が学習の中心に立ち、主体的に学びを進める授業への改善である。 【研究主題及びサブテーマ】 そこで、本校では、研究主題及びサブテーマを「一人一人の子供を主語にした授業づくりを目指して」～全ての子供の可能性を引き出す、個別最適な学びと協働的な学びの一体的充実～とした。本来、学習の主体は子供である。子供は、学びたいと思っており、適切な学習環境さえ与えれば、喜んで学習する存在である。子供を主語にした授業とは、こうした「子供観」に立つ「子供が学ぶ」学習者主体の授業である。将来の社会を見据え、必要となる資質・能力を育成するに当たり、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の観点から学習活動の充実の方向性を改めて捉え直し、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた子供が主語となる授業改善に挑戦したい。 【研究の経緯と今後の方向性】 昨年度、研究主題に掲げた「一人一人の子供を主語にした授業づくり」を目指して、先行実践及び理論の研究に始まり、実践研究を重ねてきた。ともに学びともに育つための教師集団になるための研究グループを組織し、「観」の転換を図ってきた。1年次の研究を通し、単元を通して育成を目指す資質・能力を明確化して子供と共有し、一人一人の子供が自ら学習状況を把握しな		

	がら学習の達成感や成就感を味わい、次なるめあてを具体化していく振り返りを単元内に意図的に設定していこうとする指導観に立つことができた。昨年度の成果を生かしつつ、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を通して、主体的・対話的で深い学びの実現に向け、内容研究を一層充実させていきながら主題に迫っていくこととする。
研究の内容	3 研究の内容 一人一人の子供を主語にした授業により、主体的・対話的で深い学びを実現し、確かな学力を育成するとともに、自らの判断と意思で、生涯にわたって能動的に学び続ける自立した学習者を育成していくうえで、以下の内容に焦点化を図り、研究を進めていく。 (1)教科の本質に触れながら深い学びに至る単元の構想 自己選択・自己決定の場が保障された中で、主体的・対話的で深い学びを通し、育成したい資質・能力を身に付けることができるような単元を構想する。 (2)自ら学びを調整する自己評価と振り返りの充実 一人一人の子供が、自ら学習状況を把握し、学習の達成感や成就感を味わうとともに、その後の学習を自ら調整することができるようにする。 (3)子供の主体的な学びを引き出す学習環境の整備 GIGAスクール構想の環境の下、ICTの効果的な活用を図りながら、一人一人の子供が必要に応じて自ら働きかけ、学びに向かうことのできる学習環境を整える。
研究の方法	4 研究の方法 (1)ともに学びともに育つための研究組織づくり 一人一人の強みや持ち味、経験年数等を考慮し、これまでの経験値が異なる教師がともに学び、方向性を共有しながら新たな学びを創造できるような組織編成とする。 研究推進委員会は、校長、教頭、教務主任、研究主任、研究副主任で組織し、研究の内容や方法等について協議するとともに、研究全体会で成果や課題を共有する。 (2)理解を深め互いの実践に生かす協働の時間 研究組織を生かしながら、協働して授業づくりを構想したり、教材をつくったりする時間を設ける。教科の本質に触れながら子供を主語にした授業を実現するために必要な内容研究を協働的に行う。 (3)実践研究に基づく理論の研究 研究の内容に基づく授業研究会を全員が行う。市の委嘱を受けて、他に開かれた公開授業を年3回実施し、それ以外は研究組織ごとの授業研究会とする。いずれの授業研究会でも、互いの授業に学び合う機会を確保する。研究の2年次となる今年度は、具体的な子供の姿をエピソードに、1年次の課題であった教科の本質に触れた深い学びについて共有することを大きなねらいとする。 授業研究会では、外部講師を招聘し、個別最適な学びと協働的な学びの一体的充実により深い学びを実現させる授業の在り方について、実際の子供の姿をもとにご指導いただき、理論に対する理解を深める。
研究の計画	5 研究の計画 <1学期> ・研究組織づくり ・6月上旬 先行実践及び外部講師招聘 ・7月 15日(火) 公開授業① ・授業研究会2本 <2学期> ・11月 19日(水) 公開授業② ・授業研究会3本 <3学期> ・2月4日(水) 公開授業③ ・研究のまとめ

学 校 名	山形市立第六小学校 山形市鉄砲町二丁目 9－5 5 TEL 622-0656 FAX 633-9341	校 長	富樫 朗
		研究主任	齋藤 優花
研 究 主 題	仲間とともに、自ら学びに向かう子どもの育成（４年次） ～子ども理解をベースにした授業づくり～		
研 究 主 題 設 定 の 理 由	本校では、「笑顔あふれる子ども」の育成を学校教育目標に掲げ、次のような子どもの姿をめざして教育活動を行っている。 (１) 学習大好き かしこい子ども「かしこく」（確かな学力） (２) みんなを大事に 豊かな子ども「ゆたかに」（豊かな心） (３) 明るく健やか 元気な子ども「すこやかに」（健やかな体）		
	【社会的背景から】 今、子ども達を取り巻く社会環境は目まぐるしく変化している。近年、コロナウィルス感染症によって世界中が経済、医療、教育など様々な場面で問題を抱えることとなり、従来のやり方を見直し、新しい方法を模索することとなった。子ども達が成人して社会で活躍する頃には社会構造や雇用環境が大きく変化し、子ども達が就くことになる職業の在り方についても、現在とは様変わりすることになると指摘されている。こうした時代の変化の中で、特に「学びに向かう力」は、自分を見失うことなく未来を切り開いていくために、また、変化が激しく先行き不透明な 21 世紀の社会を生き抜く上で必要になると考える。 新学習指導要領では、「主体的」「対話的」「深い学び」「探究的な学習」などを大切にして学習していくことが求められるようになった。特定の教科等にとどまらず学校教育全体を通じて、「どのように学ぶのか」という学びの質や深まりを重視していくことが必要になってきている。 これらのことから、物事を自分事としてとらえ、考え、社会や他者と関わりながら自己実現しようとする子どもの姿を目指し、研究主題を設定した。 【これまでの取り組み】 本校では、学校経営構想の中で育成を目指す資質・能力でもある「主体性と協働性」を特に培っていかなければならないと共通理解されている。そこで、「仲間とともに＝協働性」「自ら＝主体性」という二本柱で、学びに向かう子どもの育成に取り組んできた。「仲間とともに、自ら学びに向かう子どもの育成」のためには、「子ども理解をベースにした授業づくり」が必要である。昨年度までも、子どもたちのよい姿が見られたが、さらに仲間とともに、自ら学びに向かう子どもを育成するためにも、今年度もこのテーマで学校研究を進めていく。 また、「子ども理解をベースに」というテーマで研究に取り組むにあたり、授業での子どもの育ちについて話し合っていくことは重要だと考えている。そこで、子どものみとり方についてさらに焦点をあてて、子どもの思いや願いに耳を傾け、一人一人が何を求めているのかを考えたり、「どうしてその子がこう考えた（行動した）のかな。」と子どもの言動の奥にあるものについて考えたりするなどして、教師が子どもを理解し続けようとしながら授業に取り組んでいくことを研究の核として進めていきたい。 以上のことから、研究主題を「仲間とともに、自ら学びに向かう子どもの育成」、サブテーマを「子ども理解をベースにした授業づくり」と設定し、学校教育目標を具現化していきたいと考えた。		



【研究の内容について】

(1) 子ども理解をベースにした授業づくり

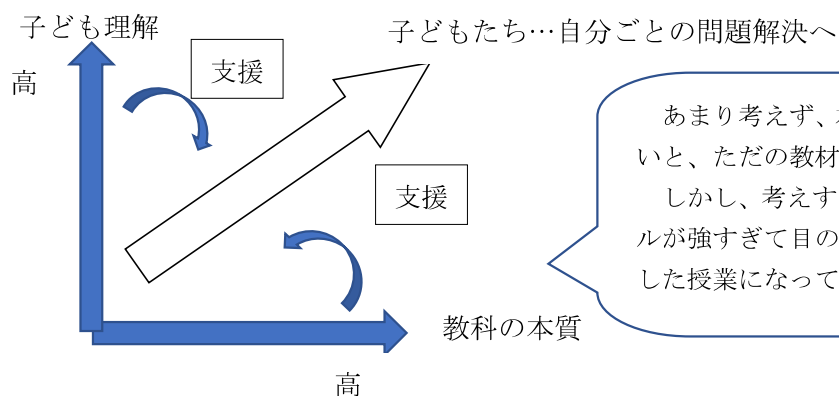
①子どもの姿（言動、行動）で語り合う。～教師のみとり方の向上＝授業力の向上～

子どもの具体的な姿を根拠として話し合うことで、何が見え、どのように解釈し、価値づけたのかを語り合っていく。一人一人が何を求めているのかを考えたり、「どうしてその子がこう考えた（行動した）のかな。」と子どもの言動の奥にあるものについて考えたり話し合ったりすることを通し、子どもの育ちを知ると共に、教師自身の子どもを見る目を鍛えることは、教師の授業力が向上することにつながる。

②子どもの見方や考え方の広がりや深まりにつながるように、教科の本質を考える。

教科の本質・教材の子どもにとっての価値について吟味する。指導案を書くときに、教科の本質を捉え、記述する。

《授業に対する教師の向き合い方》



③長期的な見通しを持って授業に望むためのカリキュラム・マネジメント表の作成。

子どもの実態とめざす子ども像に応じて教育計画を立て、見直し・修正をしていく。

(2) 研究の日常化

①授業を通覧したり開いたりして、いつでも見て学べるようにする。

日常的な実践を見合ったり全校の子ども達の様子をみとったりできるようにするために、授業を通覧したり授業を開いたりして、誰もがいつでも見て学べるようにする。

②研究便りの作成

研究推進委員が研究便りを作成し、子どもを育てるために必要な情報を共有する。

	【研究の方法について】 ・授業研究会の実施…全員（短時間勤務の先生を除く）が研究授業を行い、研究主題の実現に迫る。 ・校内研修会の実施																								
研究の組織と研究会の進め方および計画	【研究の組織について】 研究推進委員会 校長・教頭・金谷 ◎齋藤優・○粕谷・鈴木 岩田・渡邊・武田・西村 ↓ 全体会 ↓ 低学年部会 中学年部会 高学年部会 特別支援部会 言語通級部会 研究の原案作り、日程調整、 研究授業や全体会の運営、 研究の日常化の推進 等 【授業研究会の進め方について】 ・大研は上学年・下学年・特支通級から1授業提案。指導者を招聘し全体で事後研を行う。 ・小研は、部会単位で事前・事後研を行う。 ・授業研究会の記録については事後研で話し合ったことをもとに授業者が作成し、研究だよりとして全員に配付する。 ・研究概要、指導案、研究だより等は各自その都度ファイリングし、今年度の研究紀要としていく。 【今年度の計画】 <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tbody> <tr> <td style="width: 15%;">4月</td><td>今年度の研究構想・全体計画・指導案提案検討</td></tr> <tr> <td>5月</td><td>授業研計画検討・校内研修会</td></tr> <tr> <td>6月</td><td>研究授業（小研）</td></tr> <tr> <td>7月</td><td>研究授業（大研）・校内研修会</td></tr> <tr> <td>8月</td><td></td></tr> <tr> <td>9月</td><td></td></tr> <tr> <td>10月</td><td>研究授業（大研）</td></tr> <tr> <td>11月</td><td></td></tr> <tr> <td>12月</td><td>研究授業(大研) 校内研修会</td></tr> <tr> <td>1月</td><td></td></tr> <tr> <td>2月</td><td>今年度のまとめと振り返り・次年度の研究構想</td></tr> <tr> <td>3月</td><td></td></tr> </tbody> </table>	4月	今年度の研究構想・全体計画・指導案提案検討	5月	授業研計画検討・校内研修会	6月	研究授業（小研）	7月	研究授業（大研）・校内研修会	8月		9月		10月	研究授業（大研）	11月		12月	研究授業(大研) 校内研修会	1月		2月	今年度のまとめと振り返り・次年度の研究構想	3月	
4月	今年度の研究構想・全体計画・指導案提案検討																								
5月	授業研計画検討・校内研修会																								
6月	研究授業（小研）																								
7月	研究授業（大研）・校内研修会																								
8月																									
9月																									
10月	研究授業（大研）																								
11月																									
12月	研究授業(大研) 校内研修会																								
1月																									
2月	今年度のまとめと振り返り・次年度の研究構想																								
3月																									

学 校 名	山 形 市 立 第 七 小 学 校 山形市城北町二丁目9番37号 TEL 023-644-3434 FAX 023-645-8586	校 長	小沼 裕佳理
		研究主任	田中 敏子
研 究 主 題	対話を通して気づき、考え、互いの思いを引き出しながら学びを楽しむ子どもの育成 ～カリキュラム・マネジメントを軸とした日々の授業づくり～		
研 究 主 題 設 定 の 理 由	◆主題設定の理由 変化の激しい時代を生きぬく子ども達は、高い志や意欲を持った自立した人間として、他者と協働しながら価値の創造に挑み、未来を切り拓く力（課題解決力）を身に付けることが求められている。また、新しい時代を生きる上で必要な資質・能力を育むためには、「何を学ぶか」という知識の質や量の吟味に加え、「どのように学ぶか」と主体的に取り組み生活をよりよくするという学びの質を高める指導法を探ることも重要になっている。 こうした状況を踏まえ、本校では、子どもの姿から付けたい力を重点化し、指導の目標を策定した。「対話を通して他者の考えを引き出しながら考えることを楽しむ子ども」「豊かに気づき、試行錯誤する子ども」の二つである。この二つの重点目標に向かい、全ての教育活動において全教職員が共有し、取り組みを行うこと、日々の授業を目標達成のために改善することは欠かせない。そのうえで、特に今年度は、「対話を通して他者の考えを引き出しながら考えることを楽しむ子ども」の育成を重点に研究に取り組むこととした。 ◆主題・副主題について 本校の考える「対話」とは、一方向からのものでは成り立たず、それ自体が目的になってはいけなものである。子どもたち同士のおしゃべりや、やりとりのしかたが上手になることではないと考える。本校の研究では、対話はあくまで、「手段」として捉えている。対話を通すことで、自分の考えを相手が聞いてくれた時、どう感じたのかさらに聞きたくなったり、意識の深層部分にある、自分でも気が付いていない思いを引き出したりすることができる。子どもたちのたくさんのつぶやきを教師も対話を通すことで意識させたり、思考を活性化させたりすることができる。 このように、子どもの思考を具体的な姿でとらえ、教師が互いに場面を想起しながら共有することで教師自身の子どもたちへのよりよい働きかけの改善や、子どもたちの発言、内面的な思考を引き出す力が育っていくことにつながっていくと考えた。 本校が以前から取り組んでいるカリキュラム・マネジメントを日常的に活用しながら年間を見通し、教科横断的に授業づくりを進め、めざす資質・能力を子どもたちにつけることができるようにする。		
研 究 の 目 標	◆重点目標 - 対話を通して他者の考えを引き出しながら考えることを楽しむ子ども ○伝えたい思いを高め、相手に分かりやすく伝えようとする。 ○対話しながら学び合う中で互いの思考の活性化を図り、深いまなびへとつなげる。 - 豊かに気づき、試行錯誤する子ども ○生活の中で様々なことに気づく。 ○自ら課題を解決しようとする。 二つの重点目標を具現化するため、子どもの実態をよく見取り、実態に即した意図的、計画的な指導や支援を、教育課程全体を通して行っていく。具体的には、「話す・聞く」について各学年が子どもの発達段階に応じて育みたい資質・能力を明らかにしたカリキュラムを作成したうえで、日々の子どもの変容をカリキュラムに反映させながら評価・改善し、より効果的な指導や支援を行うことをめざしていく。		

1. 学校経営とカリキュラム・マネジメント

(1) 学校目標と学校全体で重点化していく資質・能力

新学習指導要領が求める資質・能力については、「新しい時代に必要とされる3つの柱」として「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性」等、各教科等で身につけるものの他にも、学習の基盤となる資質・能力や現代的な諸課題に対応した資質・能力等が示されている。

これらのことから、学校全体で重点化していく目標はどの学習でも共通に必要な「汎用的な能力」が適していると考ええる。また、育てたい資質・能力は、実際の授業での「めざす子どもの姿」を見極め、具体的に設定していくことも重要である。

これらのことから、本校でめざす資質・能力を

- ①問題発見、解決能力
- ②言語能力
- ③情報活用能力
- ④協調性

とし、学校重点目標「対話を通して他者の考えを引き出しながら考えることを楽しむ子ども」「豊かに気づき、試行錯誤する子ども」の中に育みたい資質・能力を明示した。

(2) 学校目標の具現化をめざす「学校経営グランドデザイン」

本校の教育活動を学校重点目標達成に向けた視点で整理して明記するものである。このグランドデザインをもとに、PDCAサイクルを行い、学校教育目標の見直し、教育課程の編成、学校評価との関連付けを図る。

2. 学年・学級カリキュラム・マネジメント表の作成

本校では毎年、カリキュラム・マネジメントを作成、活用しながら学習指導の充実を図っている。

本校のカリキュラム・マネジメント表は、学級経営案及び学習指導カリキュラムとしての性格を持ち合わせ、適宜改訂を図っていくものである。

カリキュラム・マネジメント表については、下記のことを原則に進めていく。

- ①学級カリキュラム・マネジメント表を一つにし、定期（前期・後期）に加え、授業研究会後の事後研で見直し、改訂を行う。（学年カリマネ表、短期カリマネ表の作成は行わない。）
- ②資質・能力を育む「PDCA」が見える「学級カリキュラム・マネジメント表」を作成する。これを教育活動計画書（学級経営案）とする。
- ③今年度の研究の重点目標達成のため、育てたい資質・能力の言語能力として「話す・聞く」を位置づける。また、授業や日常生活の中で意識して取り組んでいく対話力育成のための具体的な手立てを明記する。

3. 資質・能力を育む単元構成と授業

(1) 単元構成と授業づくりの基本的な考え方

- ①カリキュラム・マネジメント表は教科横断的なカリキュラムをデザインすることだけが目標ではない。育成する「資質・能力」にかかわる「PDCA」であるPlan（計画）、Do（実践）、See（評価）、Action（改善）がよく見えるようにし、意図的・計画的・継続的な実践で目標を達成していくことを大切にする。
- ②子ども達につけたい資質・能力は日々の授業の積み重ねで育まれる。良い授業とは、毎日容易に作れる、おいしく食べられる、栄養もある「おばあちゃんが作る朝ご飯」のようなものである。時折ある、ディナーのような食事も時には必要だが、日々の授業全てが子どもを育てると考えている。
- ③単元構成を大切にする。単元全体を通して探究型の構成にする。1時間の授業も探究型をめざしていく。

(2) 重点教科に据えた教科等の授業づくりのポイント

「学級カリキュラム・マネジメント表(学級経営案)」に位置づけられた教科、道徳、総合的な学習の時間を中心に、本校で目指す資質・能力を育成する。

授業づくりのポイントとして、対話を通して相手の考えを引き出したり、自分の考えをわかりやすく相手に伝えたりすることを楽しむ子どもを育てること念頭に置きながら、それぞれの教科でどのような手立てを講じていくことができるかを考えるようにする。

研究の方法	1 校内研修会の実施 (1) 山形大学の中井義時名誉教授より、以下の内容についてご指導いただく。 ①各学年、学級ごとのカリキュラム・マネジメント表を作成する。 ②子どもの実態や授業の様子について対話を通して学びを深め、教師自らの指導や支援、カリキュラムの修正、改善を図る。 (2) 対話を通じた研究を行っている実践校や本校の研究に有効な研修会への参加を通して研修の機会を作り、情報を共有することで学びを深める。 2 授業研究会の実施 (1) 大 研・・・全員が参観、事後研究会を実施する。 (2) 小 研・・・事前に単元と時間等の情報を共有し、だれでも参観可能とする。 (3) 事前研究会：大研について事前に単元と授業の流れ、指導のポイントを確認する。 (4) 事後研究会：児童の姿から学んだこと、学級の児童に置き換えて考えたことをグループでホワイトボードにまとめ、自身のカリマネの改訂を行う。 3 学び方の共有 (1) 各学年のカリキュラム・マネジメント表、授業研究会（大研）のまとめをデータとして蓄積し、次年度の研究につなげる。 (2) 普段の授業を積極的に開き、互いに学び合う。
研究の計画	4月14日 研究推進委員会① 4月28日 校内研修会（カリマネ研修） 5月 1日 研究全体会① 5月15日 研究推進委員会② 5月27日 研究全体会② 6月11日 研究全体会③ 6月20日 授業研究会① 7月18日 授業研究会② 7月24日 研究推進委員会③ 8月 4日 研究全体会④ 11月 6日 授業研究会③ 11月27日 授業研究会④ 12月10日 研究推進委員会④ 12月24日 研究全体会⑤ 1月16日 研究推進委員会⑤ 2月 2日 研究全体会⑥ ※授業研究会は5月時点の予定とする。

<様式>

学 校 名	山形市立第八小学校 山形市小白川町二丁目 8 番 36 号 TEL 631-2140 FAX 631-9009	校 長	豊田 博之
		研究主任	中村 千歩
研 究 主 題	『自ら楽しいくらしを創る子どもの育成』 ～ 研究の 3 つの柱「主体性・協働性・自立性」を軸に ～ (1 年次)		
研 究 主 題 設 定 の 理 由	資質・能力ベースの教育、令和の日本型教育、ウェルビーイング等、現代社会の課題解決に向けた施策や考え方が叫ばれる中、学校現場では、子どもたちの未来と今の繋がりをしっかり見据えながら教育活動を展開していかなければならないと考えている。その鍵は、『子ども自らが強い思いをもって学びやくらしを創ること』と、それを支える『教師の意識改革』にあると捉えている。 そこで、本校では、研究主題を『自ら楽しいくらしを創る子どもの育成』と設定し、その実現に向けて、研究の 3 つの柱「主体性・協働性・自立性」を軸に子ども主体の学びを構築し、実際の子どもたちの姿をもとに語り合い、子どもの育ち実現に向けて研究を進めていくことにした。 「楽しい」とは、自分自身の思いから生まれるたのしい状態のことであり、内側から湧いて来るもの、与えられるものではなく、自分自身の考え方で変わってくるものである。 研究主題にある「くらし」とは、教科等における学習はもとより、行事や総合的な学習（生活科含む）、児童会活動、道徳科、外国語活動の活動等、学校生活の全てである。本校の子どもたちは「くらしづくり」と呼んでおり、教科の学びを創ったり、縦割り班の楽しいくらしを考え実行したり、学校行事等について話し合い、目的意識や相手意識をもった活動を創ったりしている。 子どもの育ちには、子どもたちが本気で学びたくなるような活動展開や必要感を抱いて友だちとかかわりたくなるような交流場面、自立に向けた手立て等が重要となる。研究の 3 つの柱「主体性・協働性・自立性」は、子どもの育ち実現には欠かせない要素であり、授業づくりの主軸になるものと捉えている。主体的で協働的な価値ある学びを経験した子どもは、自らの生き方・あり方・学び方・考え方等の変容に気づき、自信を高めていくに違いない。 そのような学びを構築するには、子ども主体の学びに向けた「教師の意識」と、その意識に支えられた「教師の支援」が欠かせない。教師は、子どもを深く理解し、期待する子どもの姿や育つ活動プロセスを思い描き、子どもの考えや思いに寄り添いながら、場に応じた支援に努めなければならない。今、求められている「活用力・実践力」や「思考力・判断力・表現力」等の資質・能力の育成は、教師の指導力にかかっており、教師同士の活発な O J T によって高まっていく。 本校では、以上のような教育的ニーズや子どもたちの実態を鑑み、『子ども主体の学び』に焦点をあてて、授業研究会のみならず、行事や児童会活動等の特別活動・教科・総合的な学習等における子ども主体の授業や教師の支援について追究していくこととした。その日常的な教育の営み、いわゆる教職員文化を確立することが、本研究の最終ゴールであると捉えている。		
研 究 目 標	子どもの実態や学習指導要領の趣旨等を踏まえ、研究の 3 つの柱「主体性・協働性・自立性」を意識しながら日常的に教育活動を展開し、子どもの育ちに向けた「子ども主体の学びのあり方」や「教師の支援のあり方」等を探る。		

研究の内容	(1) 子ども主体の学びと教師の意識 単元づくり・授業づくりの始めの一步は、「何を教えるか」ではなく、「子どもの実態から、どんな教師の願いを描くか」さらには「子どもの興味・関心から、どんな活動を展開していくか」である。「子どもたちの実態は、こうだから…」「子どもの興味・関心はこうだから…」子どもを主語に置いた授業づくりを心がけていくことは、資質・能力ベースの教育には欠かせないことと捉えている。 また、教師には「させたい活動」がある。しかし、子どもたちの思いが乗らない状況のまま教師主導のもとに活動に取り組ませれば、子どもたちは学びに対して受け身になってしまう。単元や授業をどのように展開すれば、子どもたちが主体性を保ったまま、教師の「させたい活動」の必要性に気付くのか…そこに教材研究の醍醐味がある。 (2) 子ども主体の学びを創る研究の3つの柱 子ども主体の学びを創造するための要素は、①主体性…自分ごとになる価値ある学び ②協働性…必要感ある仲間との交流 ③自立性…自立した学習者を育てるための手立てや活動の3つと捉えている。この3つの要素は、授業研究会に留まることなく、全ての教育活動を創造する際に強く意識していく。								
研究の方法	(1) 日常的な教育活動における子ども主体の追究 ①「子ども主体のくらし」の創造 学校行事や児童会行事、委員会活動等では、子どもたちが強い課題意識をもって、自分たちの手で活動を切り拓き、互いに関わりながら取り組んでいけるように、具体的な教師の支援や児童理解のあり方等について教職員OJTにより学び合っていく。 ②「カリキュラム・マネジメント」（以下、「カリマネ」と表記）の推進 カリマネは、日常的に「子どもの育ちをマネジメントすること」である。子どもにとって、やり甲斐のある活動を通年にわたって繋げていけるように、「教育課程」並びに「学級経営案（学級カリキュラム）」について、十分に吟味して作成しなければならない。また、学級経営案（学級カリキュラム）は、年度当初の「紙キュラム」から、教育活動が進むにつれてPDCAサイクルによる加除修正を加え、年度末に完成を迎えるようなイメージで取り組む。子どもの育ちは「日常的教育活動」にあると捉えている。 ③「生活科・総合的な学習」「自由進度学習」等の実践研究 カリマネの中核となる生活科・総合的な学習は、子どもの育ちの実現に欠かすことのできない教科・領域である。子どもにとって遣り甲斐のある活動にするには、「単元の立ち上げ」や「子ども主体の学びを支える教師の支援」が重要となる。また、「自立した学習者」育成に寄与する自由進度学習についても、研修を深めていかなければならない。外部の様々な研修の機会を活用したり、校内研修会を企画したりしていきたい。 (2) 授業づくりにおける子ども主体の追究 研究授業は一人一授業（大研は各学年部より一つ）とする。研究の窓口は限定せず、学級経営の中核となる教科・領域を決めて実践を積み上げる。事前研究会や事後研究会では、研究の3つの柱を視点として話し合う。 ※事後研の記録や年度末の研究集録は作成しない。（実践を見て話し合うことに意味がある）								
研究計画	<table><tr><td>【1学期】</td><td>・研究全体会①・・・・・・・・ 4月10日 ・授業研（大研）・・・・・・ 7月14日 ・研究全体会②・・・・・・ 7月</td><td rowspan="3">※研究推進委員会は、必要に応じて実施する。</td></tr><tr><td>【2学期】</td><td>・授業研（大研）・・・・・・ 10月31日・12月3日 ・研究全体会③・・・・・・ 12月 年間反省</td><td rowspan="2">※小研は、日程を調整し、随時実施する。</td></tr><tr><td>【3学期】</td><td>・研究全体会④・・・・・・ 2月 来年度の方向性等</td></tr></table>	【1学期】	・研究全体会①・・・・・・・・ 4月10日 ・授業研（大研）・・・・・・ 7月14日 ・研究全体会②・・・・・・ 7月	※研究推進委員会は、必要に応じて実施する。	【2学期】	・授業研（大研）・・・・・・ 10月31日・12月3日 ・研究全体会③・・・・・・ 12月 年間反省	※小研は、日程を調整し、随時実施する。	【3学期】	・研究全体会④・・・・・・ 2月 来年度の方向性等
【1学期】	・研究全体会①・・・・・・・・ 4月10日 ・授業研（大研）・・・・・・ 7月14日 ・研究全体会②・・・・・・ 7月	※研究推進委員会は、必要に応じて実施する。							
【2学期】	・授業研（大研）・・・・・・ 10月31日・12月3日 ・研究全体会③・・・・・・ 12月 年間反省		※小研は、日程を調整し、随時実施する。						
【3学期】	・研究全体会④・・・・・・ 2月 来年度の方向性等								

学 校 名	山形市立第九小学校 山形市馬見ヶ崎二丁目5番1号 TEL 023-681-3600 FAX 023-681-3518	校 長	沼澤 聡
		研究主任	佐藤 かおる
研 究 主 題	豊かなくらしを、ともに創り出す子どもの育成 ～主体的な学びを支える授業づくり～		
研 究 主 題 設 定 の 理 由	【研究主題設定の理由】 現在の社会では、予測困難な不確かなことにも対応でき、持続可能な社会を形成する人材の育成が求められている。それを受けて、学校では、個人が豊かな人生を切り拓くために、他者を価値のある存在として尊重し、互いに協働しながら様々な社会的な変化を乗り越えていく力を身に付けさせる必要がある。 昨年度は、本校で育成したい4つの資質・能力、「向上心」「自己指導力」「伝え合う力」「思いやり」を育成するために、研究主題を「豊かなくらしを自ら創り出す子どもの育成 ～伝え合う力の追究～」と設定し、校内研究を進めてきた。中でも、「伝え合う力」を育成する中で、子ども達が他者とのかかわりを積極的にもち、お互いの存在を尊重しながら、より深く、広い学びを行うことができると考えた。一方、研究を進める中で、かかわりを大切にした協働的な学びの重要性や、児童が学ぶ過程で、より主体的に自分の思いをもち、生かすことの必要性を感じてきた。 そこで、今年度は育成したい資質・能力を、「挑戦力」「調整力」「創造力」「協働力」とし、昨年度の課題を受けて、中でも4つの資質・能力を育成していくための核となる、主体性の育成を中心に据えながら、研究を進めていこうと考え、本主題を設定した。		
主 題 ・ 副 主 題 に つ い て	【主題・副主題について】 ○ 豊かなくらしを、ともに創り出す子どもとは 社会や生活の様々な変化を前向きに受け止め、自他共に価値ある存在として尊重し、協働しながら様々な課題を乗り越え、豊かな生活を主体的に創り出していく子どもと捉えている。 この主題を実現するために、以下の4つの資質・能力をもとに、全ての教育活動を実践していく。 ● 挑戦力：自分の力を生かし、主体的にチャレンジする力 ● 調整力：自分自身を適切に判断して行動する力 ● 創造力：学んだことを生かし、よりよいものを創り出す力 ● 協働力：自分も相手も大切にして、つながる力 これらを重要な4つの要素と捉えて実践を積み重ねていくことで、学級づくりや授業づくり、支援のあり方や教師の意識について共通理解を図ることができると考える。そして、豊かなくらしをともに創り出す力を育んでいきたい。		
研 究	【研究の重点】 4つの資質・能力を育成する授業実践から研究主題に迫る授業づくりについて学ぶ。授業者がその授業で育てたい資質・能力の身に付いた子どもの姿を明確にし、効果的な手立てを模索していく。学年部		

の 重 点	を中心に事前研や教材研究を十分に行い、質の高い授業づくりを研究していく。こうして蓄積された成果と課題を日常の授業づくりに生かし、子どもが主体的に学ぶ授業を目指していく。																		
研 究 の 方 法	【研究の方法】 (1) 研究組織 ・研究全体会、推進委員会、各学年部会、各学年会で組織する。 (2) 授業研究 ・大研を4回行う。(講師を招聘する。) ・教科領域は国語・算数・生活科／総合の3つ。 ・事前研究は単元構想段階から学年部で行う。 ・事後研究会は、より深まる話し合いの形式で行う。 ・「校内研だより (お知らせ)」は、各学年および特別支援学級の担当者が発行する。 ・「事後研だより」は担当者が2週間以内に配付し、<u>全職員の日常の授業の向上に役立てる</u>。 ・指導案は1週間前には配付する。 (3) 『研究の日』研修会 ・毎週金曜日を「研究の日」とし、授業づくりについて日常的に学び合う場を設定する。																		
研 究 の 計 画	【研究の計画】 <table> <tr> <td>4月</td><td>研究全体会 (今年度の研究の重点、進め方の共有)</td></tr> <tr> <td>6月</td><td>授業研究会①</td></tr> <tr> <td>7月</td><td>研究全体会 (1学期のふり返り)</td></tr> <tr> <td>9月</td><td>授業研究会②</td></tr> <tr> <td>10月</td><td>授業研究会③</td></tr> <tr> <td>11月</td><td>授業研究会④</td></tr> <tr> <td>12月</td><td>研究全体会 (2学期のふり返り)</td></tr> <tr> <td>2月</td><td>研究全体会 (今年度のふり返り、次年度に向けて)</td></tr> <tr> <td>3月</td><td></td></tr> </table>	4月	研究全体会 (今年度の研究の重点、進め方の共有)	6月	授業研究会①	7月	研究全体会 (1学期のふり返り)	9月	授業研究会②	10月	授業研究会③	11月	授業研究会④	12月	研究全体会 (2学期のふり返り)	2月	研究全体会 (今年度のふり返り、次年度に向けて)	3月	
4月	研究全体会 (今年度の研究の重点、進め方の共有)																		
6月	授業研究会①																		
7月	研究全体会 (1学期のふり返り)																		
9月	授業研究会②																		
10月	授業研究会③																		
11月	授業研究会④																		
12月	研究全体会 (2学期のふり返り)																		
2月	研究全体会 (今年度のふり返り、次年度に向けて)																		
3月																			

学校名	山形市立第十小学校 〒990-0835 山形市やよい二丁目6番1号 TEL643-4102 FAX645-8590	校長	学 校 長 樋 渡 美 千 代
		研究主任	鈴 木 千 紘
研究主題	「聴き合い、支え合い、学び合う子ども～協同的学びへ～」 (1年次)		
研究主題設定の理由	本校の学校教育目標は、「しなやかな心とたくましい実践力をもち、徳・知・体の調和のとれた児童の育成」である。学校のめざす子ども像は、「ゆたかに・かしこく・たくましく」として、十小の子どもたちが、仲間と心を通わせながら自分たちで考え、未知の問題や課題にも挑戦し、最後までやり抜くことを目指している。また、学校教育を通じてよりよい社会を創るという昨今の教育的背景を踏まえ、子ども自らが学びを創っていくことができるように取り組んでいかなければならない。 そこで、研究主題を上記の「聴き合い、支え合い、学び合う子ども～協同的学びへ」とする。授業の中で見られる子どもの姿だけでなく、日常から互いを尊重し、安心した環境のもと生活や学習ができるよう追究するとともに、子どもたちの未来に役立つ実践力や活用力を高めるような教育活動を展開していきたいと考えている。 この研究主題に込めた思い（意味）は、次のとおりである。 「聴き合い」…… 学びの出発点。子どもと子ども、子どもと教師、教師と教師が聴き合い、対話的コミュニケーションを生み出す。アクティブな聴き方を推進していくことで、一人ひとりが主人公になって学ぶ等 「支え合い」…… ペアやグループの形態を取り、自然に寄り添い、聴き合いが生まれる環境を整備する。相手の尊厳を認め、対等な関係で接することができるようにする。男女4人グループ等 「学び合う」…… 聴き合う、支え合う関係を通して、「わからない」子どもが質問することから出発し、わからない子どもとわかっている子ども両方に恩恵をもたらす互恵的関係を構築する等 この研究主題を実現するために、以下の『2つの柱』をもとに全ての教育活動を実践していく。 ◎課題のデザイン…楽しみながら集中して取り組めるようなやりがいのある課題をつくる ◎支え合いの場の工夫……子ども同士がさりげない支え合いができる場をつくる。 これらを大切に、実践を積み重ねていくことで、教職員全員で教育の方向性を確かめたり、授業づくりや学級づくり、支援のあり方や教師の意識について共通理解を図ったりすることができる。さらに、十小全体で発達段階に合わせた系統的な学習方法の定着や教室環境整備を図っていくことで、人間関係づくりを学びながら、未来を豊かに生きる力を育んでいきたい。		
研究の目標	子どもが安心して過ごせる教室の物的心的環境を整備し、学ぶことを楽しみ、没頭できるようにする。その具現化に向けて、『研究の2つの柱』をもとに教育活動を創造するとともに、教師の支援のあり方を追究して、「子どもの育ちを実現できる学校」をめざす。		

1 6年間の育ちの系統性を意識した教育活動の展開

- ・子どもたちが安心して、主体的に学べるような支援や教室環境の整備を行う。
- ・学校行事や学年全体での取り組み等について「めざす子どもの姿」の共通理解を図り、具体的な活動場面において育てたい力、指導者の立ち位置、よりよい支援を話し合って共有していく。
- ・学年・学級カリキュラムシートをもとに、(更新しながら) 1年間、そして小学校生活6年間を見通して、めざす子どもの姿を意識して、子どもの育ちを実現していく。

2 単元末・単元後・未来の子どもの姿をイメージし、

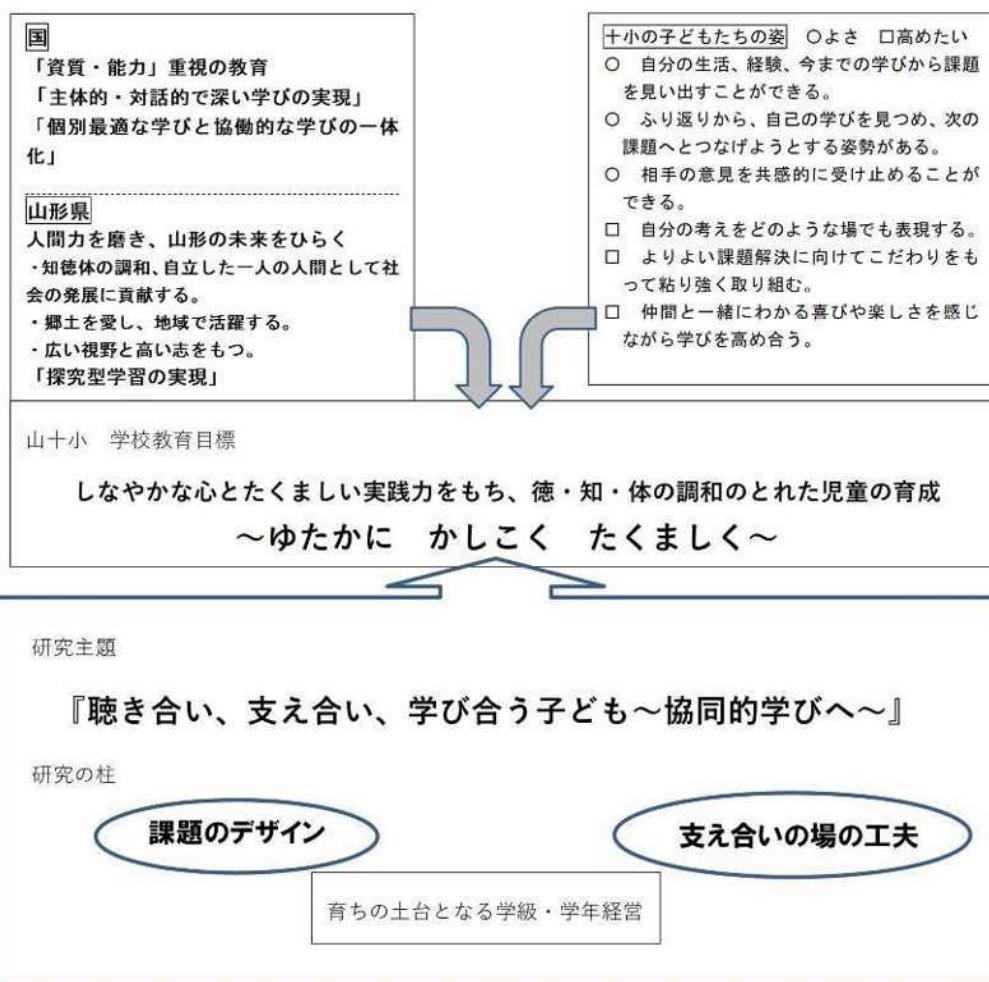
聴き合いを中心とした日々の授業づくり・授業実践・授業改善

- ・「何を学び」「何ができるようになるのか」といっためざす子どもの姿を明らかにしながら実践にあたる。子どもたち自身が「実践・活用」できる力を身に付けるために、子どもたちにとってやりがいのある課題づくり、実践・活用に結び付く学習過程の工夫、学習後の価値付け・支援を繰り返しながら取り組んでいく。
- ・子どもたちが「どのような意識で学び、かかわっているのか」を考え、よりよい支援を探り、子ども主体の学びを目指していく。

3 子どもを見る視点の共有化、

授業づくり＝学級づくりを意識し、学年・学校全体で子どもを育てる。

- ・支えがつかず取り残されている子どもがいないか、子ども同士でさりげなく支え合いができていないかを見る。
- ・子どもの姿を記録し、語り合い、子どもの変容をとらえて支え合いができていないかを考える。(授業研究会後の事後研究会、語りタイム、教科担任制での連携)
- ・子どもたちが、支え合うことのよさを実感でき、安心して過ごせる学級経営、学年で子どもを育てる学年経営に取り組む。授業と学級・学年経営は切り離すものではなく、授業を通して学級経営や学年経営を行っていく。学年間で、積極的に教科担任制を取り入れていく。



(1) 子どもの育ちに結びつく授業・単元づくりのあり方や教師の支援の仕方を学ぶ。

① 提案授業

学年部で授業づくりを行い、授業を提案する。授業研究会の持ち方を工夫し、お互いの授業を参観して学び合える形で行う。

事前研究会は、以下の内容で2回行う。

事前研究会①：授業が子どもの「支え合いの場」になっているか、課題が「やりがいのある課題」になっているかについて話し合い、授業・単元構想をもつ。

事前研究会②：予想される子どもの思考と指導事項について考え、指導案を検討する。

事後研究会は全体で行う。提案授業を実践・参観し、各自が学んだことを共有する。

② マイ授業

提案授業者以外が行う学年部での授業研究会。

事前・事後研究会は、学年部単位で行うが、他の学年も自由に参加してよい。

事後研究会で話題になったことを全体に共有化していく。

③ 日常授業実践

授業が子どもの「支え合いの場」になっているか、課題が「やりがいのある課題」になっているかを意識し、日々の授業の実践にあたる。

教材研究や教材の開発等、個人内にとどまらず、学年間や学年部間、教科担任間で連携しながら授業づくりを行う。

提案授業やマイ授業で発行された「校内研だより」を読み、自分の授業実践に活用していく。

(2) 研究の日常化（育ちの追究の日常化）を図るために、学校行事、学年での活動、総合的な学習の時間、普段の学級・学年経営等における、よりよい教師の支援を探る。

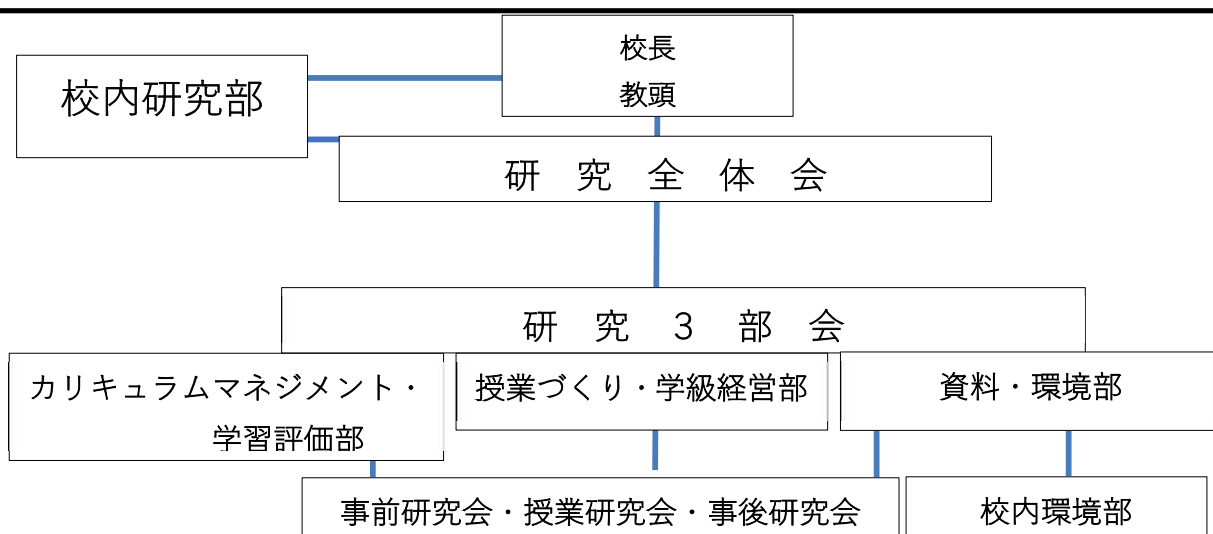
① 学校行事、学年での活動、総合的な学習の時間（生活科）などにおける育ちの追究

学年担任団で子どもの学びの姿を把握し、「めざす子どもの姿」をイメージしていく。研究主題・2つの柱をもとに、「活動内容」、「教師の支援（特に意識付けを重視）」を検討しながら実践にあたる。

② 子どもの育ちや教師の支援のあり方についての共有化

授業研究会だけでなく、日常的に子どもの学びの姿を記録していき、子どもの変容をとらえられるようにする。また、学年会や語りタイムを活用し、子どもの姿を共有化したり、よりよい支援を考えたりする。教育支援とも連携を図り、子ども理解に努める。

学校・学年の活動において「めざす子どもの姿」、教師の支援（意識）のあり方について、2つの柱にもとづいて研究全体会で共有する。各活動の実践後は、子どもの学びの姿をふり返り、子どもの育ちを言語化して蓄積する。次のよりよい支援を考えていくようにする。



年間計画・組織

研究の計画
(主なもの)

組織
の見直し

実践研究

まとめ

年度当初

◆研究の方向性の確認と見直し・研究計画・研究の組織づくり

4月

◆研究全体会（研究の概要、組織、計画等の提案）・研究3部会
研究3部会は定期的に行っていく。
☆校内研修会…山形大学 森田智幸先生 より

5月

～各学年部の提案授業の日程調整及び講師招聘～

6月

～授業づくり 教育活動の展開～
～提案授業、マイ授業へむけた 単元・授業づくり スタート～

7月

◇提案授業 A・B
☆校内研修会
◆研究全体会
(一学期のふり返し 資質・能力の見直しカリキュラムシートの更新 今後の見通し)

8月

☆校内研修会
子ども理解研修及び授業づくりを計画予定

9月

～マイ授業へ向けた 単元授業づくり 2学期～

10月

21日(火) 学校経営計画指導訪問

11月

◇提案授業 C・D
～子どもの姿を整理・分析～

12月

◆研究全体会
(2学期のふり返し、資質能力の見直し カリキュラムシートの更新
今年度の実践のまとめ提案)

1月

～学年・学校全体によるふり返し 今年度の研究実践のまとめ～
◆研究全体会（資質・能力について見直し・再検討）
☆校内研修会：子どもの姿をとらえ、実践活用を見据えた授業づくり

2月

◆研究全体会（研究の成果と課題、次年度の方向性）

3月

～次年度の研究の方向性 組織づくり～

*研究3部会は、定期的に設定し、協議する。

*提案授業研究会は研究全体会に位置づけ、分散型の全員参加とする。

*上記以外の会議や研修会等については、研究部、研究3部会で必要と認められた場合に実施する。

<様式>

学 校 名	令和7年度 山形市立南小学校	校 長	横山 聡
	山形市青田二丁目1番1号 TEL 6 3 2 - 3 6 6 0 FAX 6 3 1 - 9 0 1 9	研究主任	芦田 遥
研 究 主 題	令和7年度研究主題=学校教育目標 「夢を持ち、わたしの未来・わたしたちの未来を 豊かに創造しようとする子どもの育成」(第2次) 副題 一言語能力の育成に重点を置いたカリキュラムマネジメントー		
研 究 の 内 容	★研究の内容=学校教育目標具現化のグランドデザイン 3つの資質・能力育成と3つの教育活動の方針 ★研究の重点=言語能力に重点を置いたグループでの協働研究 教科は国語、算数、道徳・学活の3つから選択 ◎育成を目指す資質・能力 1. 生きる支えとなる資質 (1) 感性・感動・欲求の主体化 (2) 共生への志向 (人間関係形成能力・ 社会形成力) (3) 基本的自尊感情 2. 学習の基盤となる 資質・能力 3. 各教科で育成すべき 資質・能力 ◎ 各教科等の学習指導要領解説参照 ◎教育活動の方針 ※丁寧な見取りと対話による子ども理解を土台 とした教育活動の展開 ①美しさ・面白さ・心地よさに浸ったり、没頭した りする教育活動(五感・身体を使った活動) ②遊び・生活の中の「不思議」「なぜ」等の問いを 活かした教育活動「プレイフル・ラーニング」 ③生徒指導の4視点をふまえた教育活動 ※ 全ての教育活動で、意図的・計画的に育成する ① 丁寧に聞く(言語能力の育成の土台は「聞く」) ・相手の意図を考えながら聞く わからないときは問い返す ・伝わる言葉を選んで話す ②思考・感情・感覚の言語化 ③「問い」を立てることを大切にする ④「自分づくり」「学校づくり」の推進 ⑤「失敗しても OK」⇒「失敗」を問題発見・目標設定能力で 活かす ※教科の本質 ①意味学習 ②オーセンティックな学習 ③明示的な指導 ※自己決定的学習 ①順序選択学習 ②課題選択学習 ③課題設定学習		

研究の方法	学年オープンのグループでの協働的な研究 学年オープンで3つのグループを作り、縦の系統性などを意識しながらグループで事前研、授業作りを行う。わかたけ学級担任もそれぞれのグループに所属する。大研は言語能力の基盤がある程度整った2学期に3つ行う。小研の際はグループで事前研は行わず、学年で検討する。本時は可能ならグループの先生の授業を参観する。事後研は学年、参観した先生で行う。小研の日程は教務と授業者が相談の上、年間行事予定を見て決めていく。 教科をしぼっての研究授業 国語・算数・道徳の3つの教科で研究授業を行う。それぞれの教科に応じた言語能力の育成を意識し、授業作りを行う。 事後研の在り方 昨年度の方法を踏襲し、子どもの学びを丁寧に見取り、固有名詞や学びの具体的な姿から教科の本質（教科目標や教科で育成したい資質・能力）に迫ることができるような授業研究会を行う。 小研の在り方 小研は ①自分のグループの教科で通常通り45分間の授業を行う。 ②モジュール（15分間）で国語、算数、道徳・学活の活動を行う。 例）国語…詩集を活用した活動など 算数…問題の解き方などを言葉で説明するリレーなど 学活…心を通わせる言葉を育てることにつながる構成的グループエンカウンターなど の2つから選択できるようにする。

言語活動について学び合う場の設定

大研が年3回になったことで、学びの場を保障するためにも、年2回「言語能力を高めるためにどんな取り組みをしているか」についてざくばらんに情報交換する場を設ける。また、それぞれの先生方が「どんな思いで学級経営をしているか」、「言語能力を高めるためにどんな取り組みをしているか」などを紹介する研究だよりを発行していく。

学年 カリキュラム検討

1 ねらい

年間指導計画を見通し、重点的に指導する教科等（単元等）、そこで育成したい資質・能力を明確にして、児童の学力向上につなげる。

おおまかに年間を見通せるように。見通しをもって1学期の指導に当たれるように。

2 進め方

(1) 総合的な学習の時間（3～6年）の年間指導計画を、検討する。

□現時点での計画で、途中で変更になる可能性はあり。

□今後の学習を進める上で、記述しておいた方がよいことは自由に記述する。

(2) 児童の実態、学校経営方針と、年間指導計画を照らし合わせる。

生きる支えとなる資質を育むために

※丁寧な見取りと対話による子ども理解を土台とした教育活動の展開

①美しさ・面白さ・心地よさに浸ったり、没頭したりする教育活動（五感・身体を使った活動）

②遊び・生活の中の「不思議」「なぜ」等の問いを活かした教育活動

「プレイフル・ラーニング」

③生徒指導の4視点をふまえた教育活動

学習の基盤となる資質・能力を育むために

※ 全ての教育活動で、意図的・計画的に育成する

① 丁寧に聞く（言語能力の育成の土台は「聞く」）

・相手の意図を考えながら聞く

わからないときは問い返す

・伝わる言葉を選んで話す

②思考・感情・感覚の言語化

③ 「問い」を立てることを大切にする

各教科の資質・能力を育むために

※教科の本質

- | | |
|--------------|---------|
| ①有意味学習 | ③明示的な指導 |
| ②オーセンティックな学習 | ④課題設定学習 |

そこで育成したい「資質・能力」と「活動の方針」を年間指導計画に手書きする。

□ 1. 生きる支えとなる資質・能力 に関わるところを 赤

2. 学習の基盤となる資質・能力 に関わるところを 青

※言語能力に関することは必ず入れる。

3. 各教科で育成すべき資質・能力に関わるところを 黄 のペンで囲む
一番多い色のところが、その学年で一番重点とする方針として捉える。

□できれば「活動の方針」を教科に落とし込んで具体化していく。

□学校として育成を目指す資質・能力は、全ての教育活動において普段から意識して指導していくべきものだが、特に重点とする教科等（単元等）は、ある程度絞ってもよい。

（3）**他教科との関連**を図る（教科で獲得した資質・能力を活用、発揮させて解決させる）
場を設定し、年間指導計画で関連を図る単元をつなげる。

□「あの時学んだことが、ここの学習でも使えそう」と子どもに自覚させるには、私たちがまず自覚する必要がある。私たちが無自覚だと、ただ通り過ぎてしまう。

研究の計画

＜研究全体会＞

第1回 4月21日

第2回 4月30日

第3回 5月 2日

第4回 5月 9日

今後、日程を相談し、学期ごとに学年カリキュラムの振り返り、調整を行う。2回程度

第5回 7月30日

第6回 12月25日

第7回 2月20日

＜大研授業研究会 計画＞ 日程は候補の段階

第1回 ①9月8日 ②9月5日 ③9月12日

1学年 授業者：菅野 有里 教科：道徳

第2回 ①11月19日 ②11月10日 ③11月27日

5学年 授業者：石川 史朗 教科：算数

第3回 ①12月10日 ②12月16日 ③12月18日
3学年 授業者：小川 まりも 教科：国語

※小研は教務と日程を相談し、大研の合間に挿入していく。

校内研修会について

4月23日 三上英司先生による「言語能力の育成と深い学び」についての講話

7月17日 齋藤一弥先生による算数についての講話
(講話の内容は今後決定)

7月下旬 三上英司先生による言語能力に関する講話
(講話の内容は今後決定)

<様式>

学 校 名	山形市立西小学校 山形市西田三丁目2-1 TEL 6 4 5 - 0 3 9 0 FAX 6 4 5 - 8 5 9 4	校 長	小林 聡												
		研究主任	石田 愛美												
研 究 主 題	自ら考え、ともに学び合う子どもの育成（7年次） ～つながりを大切にした教育活動を通して～														
研 究 主 題 設 定 の 理 由	本主題は、「未来への夢を持って、豊かに学び、しなやかでたくましい子どもの育成」の学校教育目標を受け、主体的に学び、互いに相手を尊重しながら関わり合う中で、自分の考えを広げたり深めたりし、学び続けていこうとする児童を育成することを目指している。 1) 昨年度の研究内容について つながりを大切にした教育活動 <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"><thead><tr><th style="width: 33%;">①授業づくり</th><th style="width: 33%;">②学級づくり</th><th style="width: 33%;">③学校づくり</th></tr></thead><tbody><tr><td style="background-color: #fff9c4; vertical-align: top;"> 《授業改善の工夫》 ・ 学年部1 授業研 ・ カリキュラム・マネジメント表の作成・活用 ・ 研究の日常化 </td><td style="background-color: #c8e6c9; vertical-align: top;"> 《学級を一からつくる取り組み》 ・ 学級目標づくり ・ 担任と子どもの信頼ベースの関係づくり ・ 子どもと子どもの共感的な関係づくり </td><td style="background-color: #ffe0b2; vertical-align: top;"> 《教育活動全体で取り組む》 「めざす子どもの姿」と学校行事等を関連させる。 各指導部と連携して、教育活動全体で「めざす子どもの姿」に迫れるようにする。 </td></tr><tr><td style="background-color: #fff9c4; text-align: center;"> <u>つながりを大切にした</u> <u>単元づくりの工夫</u> </td><td style="background-color: #c8e6c9; text-align: center;"> <u>つながりを大切にした</u> <u>学級づくりの工夫</u> </td><td style="background-color: #ffe0b2; text-align: center;"> <u>つながりを大切にした</u> <u>教育活動の工夫</u> </td></tr></tbody></table>			①授業づくり	②学級づくり	③学校づくり	《授業改善の工夫》 ・ 学年部1 授業研 ・ カリキュラム・マネジメント表の作成・活用 ・ 研究の日常化	《学級を一からつくる取り組み》 ・ 学級目標づくり ・ 担任と子どもの信頼ベースの関係づくり ・ 子どもと子どもの共感的な関係づくり	《教育活動全体で取り組む》 「めざす子どもの姿」と学校行事等を関連させる。 各指導部と連携して、教育活動全体で「めざす子どもの姿」に迫れるようにする。	<u>つながりを大切にした</u> <u>単元づくりの工夫</u>	<u>つながりを大切にした</u> <u>学級づくりの工夫</u>	<u>つながりを大切にした</u> <u>教育活動の工夫</u>	①「授業づくり」 生活科，総合的な学習の時間を中核に据えたカリキュラム・マネジメント表を活用し，各教科の内容と育成を目指す資質・能力とのつながりを明確にした授業づくりを行った。特に，生活科や総合的な学習の時間では，児童の思いや願いを大切にすることで主体的に学習に向かうことができるようにした。また，各教科と生活科，総合的な学習の時間の学習との「つながり」を大切にした単元構想，授業づくりを行った。児童自身が教科の学習に「意味」を見出せるようにした。 ②「学級づくり」 学級づくり重点「学級を一からつくる取り組み」では，学級毎に創意ある取り組みを行った。学級目標を，学習，生活，学校行事等のあらゆる場面で，自ら（自分たち）の取り組みを振り返る拠り所にするすることで，自己や集団の変容や成長を自覚し，自信を高めていけるようにした。おしゃべりタイムなどにより，子どもと温かい信頼関係を築いたり，朝のスピーチや認め合いの時間などを設けたりすることで，子ども同士の共感的な関係づくりを支援するよう努めた。		
	①授業づくり	②学級づくり	③学校づくり												
《授業改善の工夫》 ・ 学年部1 授業研 ・ カリキュラム・マネジメント表の作成・活用 ・ 研究の日常化	《学級を一からつくる取り組み》 ・ 学級目標づくり ・ 担任と子どもの信頼ベースの関係づくり ・ 子どもと子どもの共感的な関係づくり	《教育活動全体で取り組む》 「めざす子どもの姿」と学校行事等を関連させる。 各指導部と連携して、教育活動全体で「めざす子どもの姿」に迫れるようにする。													
<u>つながりを大切にした</u> <u>単元づくりの工夫</u>	<u>つながりを大切にした</u> <u>学級づくりの工夫</u>	<u>つながりを大切にした</u> <u>教育活動の工夫</u>													

③「学校づくり」

運動会や学習発表会などの学校行事では、分掌部長を中心に、行事を通してどんな力を身に付けたり高めたりしていきたいのかを話し合い、「ねらい」を明確にした。また、行事ごとの「ねらい」を受けて、学年でもめあてを決め、取り組みの途中や最後に振り返りを行うことで、自分や集団の成長やよさを自覚したり、新たな目標を立てる態度を高めたりできるようにした。

④「授業づくり」「学級づくり」「学校づくり」のつながりを大切にした教育活動

「授業づくり」「学級づくり」「学校づくり」は、互いに独立しているものではなく、「子どもの育ち」を真ん中にして互いにつながり合っているものと捉えて、校内研究を進めてきた。授業改善の工夫だけではなく、日常生活や行事、委員会活動など、教育活動全体を通して子どもの資質・能力を高めようと努めてきた。そのためにも、高めたい資質・能力を明らかにし、どの場面でのような手立てをとって教育活動を行っていくかの見通しをもてるようにした。さらに、カリキュラム・マネジメント表を作成することで、これらの「つながり」をより見える化しようと試みた。

2) 昨年度の校内研究の成果と課題について

昨年度の研究を通して、「考えを伝える力が高まった」「ほかの考えを受け止める心が豊かになった」「目標に立ち返りながら、学び進められる児童が増えた」など、子どもの育ちの面で多くの成果が見られた。

一方で、「自分の思いをもつことのよさは、さらに実感させたい」「フォロアーシップの力の高まりには伸びしろがある」などの課題も挙げられた。また、「カリキュラム・マネジメント表の日常的な授業での活用に至らなかった」「総合的な学習の時間の計画や準備の時間が足りなかった」など、特に「授業づくり」に関わる研究内容の課題も明らかになった。

3) 今年度の研究の方向性について

令和6年度は「研究主題および副題」は昨年度と同様に設定する。また「研究内容」は昨年度と大きくは変更せず、明らかになった課題が解決できるようなマイナーチェンジを行いながら、校内研究を進めていく。校内研究の質をさらに高め、昨年度の課題を解決していこうとする試みによって、子どもの育ちにさらなる成果が期待できるのと同時に、教職員の「授業力」「学級・学校経営力」の向上が図れると考えるからである。

昨年度の校内研究の取り組みにより、「子どもの育ち」に関して多くの成果が挙げられた一方で、「研究の日常化」とくに「授業づくり」に関しては課題も明らかになっている。子どもたちの学校生活の大半は「授業時間」である。子どもの資質・能力を高めるために、われわれの研究を日常化していく鍵は、「授業づくりの充実」にあると考える。そこで、今年度は「授業づくり」「学級づくり」「学校づくり」の中でも、特に「授業づくり」に力を入れていきたい。

昨年度までの校内研究の取り組みを通して、「学級づくり」「学校づくり」のそれぞれの面で、子どもの育ちを支える「西小らしさ（成果）」があることも明らかになっている。これらの「西小らしさ」「西小の財産」は、今後も受け継いでいけるようにする。

研究の目標

【めざす子どもの学びの姿】

①「自分の考えをもち、学び続ける子ども」（主体的な学びの姿）

⇒自分事として課題を捉え、思いや願い、考え、こだわりをもって前向きに学ぶ姿。学習に対して見通しをもち、粘り強く取り組んだり、学びを自己調整したりする姿。学習活動を振り返って自分の変容に気付く、学びを次につなげたり、広げたりしようとする姿。

②「かかわりながら、ともに学び合う子ども」（協働的な学びの姿）

⇒友達と協力したり協働したりすることで、学びを豊かにしようとする姿。友達、教職員や地域の人との対話を通して、自分の考えを広げたり、深めたりする姿。学びを豊かに表現したり、発信し合ったりすることで、学びを広げたり、深めたりする姿。

【教育活動全体を通して高まりを目指す資質・能力】

(主体的な学びの姿に関わって)

- 1) 自分の思い・願い・考え・こだわりをもつ力
- 2) 試行錯誤したり、自己調整したりする力

(協働的な学びの姿に関わって)

- 3) 友達と協力したり協働したりする力
- 4) 発信したり表現したりする力



「授業づくり」「学級づくり」「学校づくり」のつながりを大切にした教育活動全体を通して、1) 自分の思い・願い・考え・こだわりをもつ力、2) 試行錯誤したり、自己調整したりする力、3) 友達と協力したり協働したりする力、4) 発信したり表現したりする力の高まりを目指していく。

研究の内容

1) 「子どもの育ち（高まりを目指す資質・能力）」を真ん中に、「授業」「学級生活」「学校生活」のつながりを大切にしていく。

児童の実態や、担任団の願いを基に、学年ごとに4つの「高まりを目指す資質・能力」を設定し、「生活科、総合的な学習の時間を中核とした授業づくり」を中心とした全ての教育活動を通してそれらの力の高まりを目指していく。

「高まりを目指す資質・能力」は、主体的な学びの姿と関わるものとして2つ、協働的な学びの姿と関わって2つ設定する。1) 自分の思い・願い・考え・こだわりをもつ力 2) 試行錯誤したり、自己調整したりする力、4) 発信したり表現したりする力の4つの「高まりを目指す資質・能力」を大きな視点として、子どもたちの実態や担任団の願いを基に、具体的な文言に表して設定していく。4つの「高まりを目指す資質・能力」は、「子どもの育ち」の一つの側面に過ぎない。「子どもの育ち」といっても多種多様である。子どもたち一人ひとりが見せる「がんばり」や「成長」も人それぞれであり、ここに価値があって、ここには価値がないと決めつけるものではない。しかし、我々が子どもの育ちについて語り合い、施した教育を評価し、改善していく中で指導力を向上させ、さらなる子どもの育ちに期していくための「子どもを見る共通の視点」として、4つの「高まりを目指す資質・能力」を捉えていく。

児童の実態や集団の特性が異なることから、「高まりを目指す資質・能力」の具体的な文言については、「4つの力」を大枠に、各学年で設定し、全ての教育活動を通して、育み、高めていけるようにしていく。

また、「子どもの育ち（高まりを目指す資質・能力）」を真ん中に、「授業づくり」「学級づくり」「学校づくり」のつながりを意識した教育活動を校内研究の大きな柱に据えながらも、特に「授業づくり」を充実させていくことを重点とする。

今年度も、「生活科、総合的な学習の時間を中核にした授業づくり」や「学級づくり」「学校づくり」の相互のつながりがより見える化され、日常で活用されるためのツールとして「カリキュラム・マネジメント表」を作成する。

＜カリキュラム・マネジメント表＞

①高めたい資質・能力を、学年毎に具体的な文言で設定する。②生活科・総合的な学習の時間をカリキュラム・デザインの中核に据え、各教科の重要単元との「資質・能力」でのつながりを可視化していく。③また、「学校行事」をカリキュラム・デザインに位置づけることで、年間を通した子どもの資質・能力の高まりをイメージできるようにする。

2) **生活科・総合的な学習の時間を中核にし、子どもの思いや願いから出発する単元・授業づくりを行う。(授業づくり)** **(今年度の重点)**

ポイント1 児童の思いや願いから出発する学習活動

子どもたちの「これがやりたい」「こうなりたい」「できるようになりたい」という思いや願いを大切にする。そのためにも、「憧れ」や「願い」をもったり、「問い」や「疑問」がうかんだりするような学習材や課題との出会わせ方を工夫していく。

ポイント2 生活科・総合的な学習の時間の充実

生活科・総合的な学習の時間は、自分の生活や生き方に特に関わった学習であり、子どもたちにとって自分なりの「願い」「思い」「こだわり」が生まれ、課題も自分事になりやすい。これらの学習を魅力あるものにし、充実させていくのと同時に、各教科の学習とのつながりを意識した単元づくりを行うことで、学習への意欲をたかめていく。

ポイント3 次の学びにつなげるふりかえり

自らの学習をふりかえり、学習の成果を確かめ、次の学習へと広げていけるよう促す。また、自分の成長を実感することが、子どもたちの次の学習への粘り強い取り組みを支え、よりよい学び手に成長できるように支援する。

3) **学級生活の創り手は子どもたち！子どもたちが創る「あたたかい学級」** **(学級づくり)**

ポイント1 みんなで目指す学級目標づくり

子どもたちが一人ひとりの強みやよさを活かしあい、お互いの心を温めあいながら、ともにめざすクラスづくりの重点を、子どもたちも担任も「目指したい！」と思える目的づくり、すなわち「学級目標づくり」と捉える。子どもたちが協力したり、助け合ったりする場面を意図的に設け、その成果や課題を「学級目標」に立ち返って振り返ることで個や集団の成長を目指していく。

ポイント2 児童が創る学級の暮らし・学級文化

学級の暮らしや文化を創る主体を「子どもたち」と捉え、子どもたちの積極的な参画による自律的・自治的な活動を大切にする。「どういう学級であってほしいか。」「そのためにはどのような活動やきまりごとを大切にするか?」「どういう行動や言動を増やしていきたいか?」といったことを話し合い、すり合わせる自治活動を学級文化を創造する活動の基盤とする。

ポイント3 担任－子どもの信頼ベースの関係づくり

「管理＝服従」の関係ではなく、「指導・援助＝信頼」の関係を目指す。子どもの「できているところ」「がんばっているところ」に目を向け、言葉をかけていくことで子どもたちの「心の体力(岩瀬直樹 クラスづくりの極意より)」を温め、自分らしく学習したり生活したりできるようにする。

ポイント4 子ども－子どもの共感的な関係づくり

担任と子どもの信頼ベースの関係を土台として、子どもたち同士も互いのよさや頑張りを認め合い、励まし合えるような関係づくりを目指していく。

4) **カリキュラムに積極的に子どもたちが参画する** **(学校づくり)**

ポイント1 児童が主体となって創り上げる学校行事

各分掌部長を中心に、学校行事で目指す子どもの姿をイメージし、ねらいを設定する。学校行事の計画や運営に子どもたちが積極的に参画し、主体的に活動できるように支援・指導していく。

ポイント2 各教科・総合的な学習の時間の学びを発信する場の設定

学びを学級、学校全体に向けて表現・発信する場を設定する。さらに、生活科や総合的な学習の時間の学びの成果は、積極的に地域にも発信し、子どもたちの地域の参画意識を醸成する。

ポイント3 地域資源を十分に活用した教育活動の展開

保護者や地域の人、専門家などの人的な資源や、公民館、博物館などの社会教育施設や団体、その他、各種の団体などの組織的な資源を工夫して活用していく。



《令和6年度の研究内容を図示したもの》

研究の方法

◆授業研究を通して研究主題の実現に迫る

- ・授業研究会は各学年部で1回の実施する。本時のみの研究・授業づくりとならないように、カリキュラムマネジメントや目指す資質・能力とのつながりを明確にした単元・授業づくりに学年で取り組む。授業者以外の職員も指導案づくりに関わるほか、先行授業を行ったり、同単元の別の授業を行ったりするなどして、単元・授業づくりに積極的に関わり、学年ごとに研究を深められるようにする。
- ・事後研究会はワークショップ型で行い、児童の姿を基に話し合いを行う。
- ・「事後研だより」を発行し、全職員に配布する。事後研究会の協議内容を共有化し、各自の授業実践に生かしていく。
- ・外部講師による校内研修会を計画し、研究の充実を図る。

◆「学級を一からつくる取り組み」で学級経営に力を入れる

研究主題に迫るためには教師と児童・児童同士の関係づくり、児童にとって安心できる居場所づくりが必須である。そこで「学級を一からつくる取り組み」を実施し、「教室」という安心して学習に臨むことができるコミュニティを確立することによって、校内研究を進めていく上での土壌を築いていく。

そのために、今年度も、学級経営に係る実践交流会や校内研修会、おしゃべりタイム（教師と児童一対一で話す機会）等を計画し、丁寧な児童理解を心がけ、児童の個性や長所を伸ばさせたり、成長に導いたりしながら、温かい学級・学年づくりに努めていく。

◆各指導部と連携しながら、教育活動全体でめざす子どもの姿に迫る

- ・全ての教育活動を資質・能力を育む場と考え、校内研究を意識しながら取り組んでいく。全職員は見通しをもって支援にあたり、最後まで見届ける。
- ・学校行事では、めざす子どもの姿に迫れるような「ねらい」や「内容」となっているか、研究推進委員と各指導部で連携して、検討していく。
- ・カリキュラム・マネジメントの研修会を開き、全ての教育活動と資質・能力とのつながりが「見える化」されたカリキュラム・マネジメント表づくりに努め、成果を指導に生かしていく。

研

項 目	実施時期	担当・参加者	備 考
-----	------	--------	-----

研究 の 計 画	全体授業研究会 (大研)	6月下旬・10月～12月 (高学年部・中学年部・低学年部) ※指導主事派遣申請後日程が決定	学年部 1授業 特支除く	事前研：学年 授業参観・事後研：全職員 ※助言者として校外の方1名。
	全体授業研究会 (中研)	7月～1月 ※1回目大研以降	学年部 1授業	事前研：学年 授業参観・事後研：全職員 ※助言者はお招きしない。
	研究推進委員会	定例推進委員会 4月 主題・計画の提案 5月 指導案形式の検討 1月 研究のまとめ 2月 研究紀要の作成 そのほか、必要なときに開催する	研究推進 委員	各学年の研究推進 ※情報発信、とりまとめ等 指導主事派遣申請（主任） 授業研究会の運営・記録 事 前（後）研の運営・準備 校内研修会の運営・準備 研究紀要の提案（主任） 研究紀要の取りまとめ
	研究全体会	4月 今年度の研究方針 授業研の日程調整 5月 指導案形式の検討 7月 前期の反省 12月 年間反省・実践の整理 2月 成果と課題の集約 研究紀要の作成 来年度の検討	全職員	推進委員会で提案・運営 《研究紀要》 ※各自ファイルに作成 ① 指導案 ② カリキュラム・マネジメ ント表 ③ まとめ
	校内研修会	1回目：6月 2回目：11月 3回目：1月 ※年3回を予定しています。	全職員	講師：検討中 内容：検討中

<様式>

学 校 名	山形市立東小学校	校 長	古原 靖子
		研究主任	秋山 駿
研 究 主 題	『思いをもち 学び続ける子ども』		
研 究 主 題 設 定 の 理 由	本校の学校教育目標は、「あかるく かしく たくましい子どもの育成」である。子どもたちが、仲間を受け入れたり自分を表現したりしながら、自ら考え、判断し、よりよい課題解決に向けて主体的に取り組むことをめざしている。また、学校教育活動全体を通して、自分のよさや成長を実感し、これからの社会を生き抜く粘り強さ、しなやかさを身に付けていくことをめざしている。 さらに、学校教育を通じてよりよい社会を創るという昨今の教育的背景を踏まえ、仲間と協働し、学び合う中で、基礎・基本を身に付け、学習者である子ども自らが、目標に向かって自己調整できるように取り組んでいかなければならないと考える。 そこで、研究主題を上記の「思いをもち 学び続ける子ども」とし、子どもの思いを耕し、協働的な学びの中で学習者自身が自己への気づきや次の学びへの期待を実感できるような教育活動を展開し、めざす子ども像にせまっていく。また、学ぶ心地よさを実感できる学習習慣づくり、子ども一人一人の個性を受け止めて適切な支援を探る子ども理解についても、学びの土台として継続的に取り組んでいく。 昨年度まで大事にしてきたように、授業実践の中で見られる子どもの姿だけを追究するのではなく、日々の子どもの変化をとらえ、子どもの思いと照らし合わせながら行動の意味を考えていく必要がある。授業を通して安心して過ごせる学級経営を実践し、子どもたちの未来に役立つ主体性や協働性、自己調整力を高めるような教育活動を展開していきたいと考えている。 この研究主題に込めた意味は、次のとおりである。 「思い」……学習者である子ども自身が、人、もの、ことに向き合った時に感じること 「なぜだろう」、「どうなるのかな」、「もっと〇〇できるようになりたい」、「こうやったらできそう」 「次は〇〇してみよう」等、疑問、質問、感想、こだわり等。 「学び続ける」…自分の弱みと強みを認識し、よりよい解決に向かう。あきらめずに粘り強く取り組む。 今までの学びから新たな課題、未知の学習・経験にも挑戦する。 自分の行動・言葉をふり返り、よりよい解決方法を思考する。 自分に合う学び方、自分を高める学び方に気づき、自分のよりよいくらしをつくる等 子どもが学びを自分ごととして受け止め、強い思いを抱いた時、自ら対象と関わったり、必要感に駆られて交流したりするだろう。このような主体的で協働的な学びは、自分の学び方、あり方の気づきにつながっていく。そうした教育活動の積み重ねが、子どもの自己肯定感や実践力に結びついていくものと考えている。		
研 究 の 視 点	この研究主題を実現するために、次の3つの視点をもとに、全ての教育活動を実践していく。 *子どもの思いを出発点とした課題づくり…課題を自分ごととしてとらえ、主体的に学ぶ。 *必要感のある交流…必要感をもって、人、もの、こと と関わり、学びを広げる、深める。 *学びを自覚するふり返り…自分の成長に気づき、新たな問いをもつ。 これらを重要な3要素ととらえて、実践を積み重ねていくことで、教職員全員で教育の方向性を確かめたり、学級づくりや授業づくり、支援のあり方や教師の意識について共通理解を図ったりすることができると考える。		

〈研究の内容〉

1 単元末・単元後・未来の子どもの姿をイメージし、

育てたい資質・能力を明らかにした日々の授業づくり・授業実践・授業改善

- ・「何を学び」「何ができるようになるのか」といっためざす子どもの姿を明らかにしながら実践にあたる。子どもたち自身が「実践・活用」できる力を身に付けるために、自分事になる課題づくり、実践・活用に結びつく学習過程の工夫、学習後の価値づけ・支援を繰り返しながら取り組んでいく。
- ・子どもたちが「どのような意識で学び、かかわっているのか」を考え、よりよい支援を探り、子ども主体の学びを目指していく。

2 子どもを見る視点の共有化、

授業づくり＝学級づくりを意識し、学年・学校全体で子どもを育てる。

- ・ありのままの子どもの姿を受け止め、その子どもなりのがんばり、よさを見る。
- ・子どもの姿を記録し、語り合い、子どもの変容をとらえてよりよい支援を考える。（授業研究会後の事後研究会、教科担任制での連携、学校全体での取り組みの共有化）
- ・子どもたちが、かかわることのよさを実感でき、安心して過ごせる学級経営、学年で子どもを育てる学年経営に取り組む。授業と学級経営は切り離すものではなく、授業を通して学級経営を行っていく。

〈研究の方法〉

(1) 子どもの育ちに結びつく授業・単元づくりのあり方や教師の支援の仕方を学ぶ。

- ① 提案授業 学年部（低・中・高・さわやか）I 授業
 研究中心教科 国語・社会・算数・理科・総合・生活・生活単元・自立活動 とする。
 教員同士の学びの共有化を大事にし、全員参集型の提案授業研究会を実施していく。
 学年部を中心に事前研究会を行い、授業を提案する。
 事前研究会は、以下の内容で行う。（必要に応じて2回以上の実施も検討する）
 事前研究会：子どもの学びの姿をもとに、めざす子どもの姿、つけたい資質・能力について話し合い、授業・単元構想をもつ。予想される子どもの思考と指導事項について考え、指導案を検討する。
 事前研究会は、学年部＋研究主任・副主任で行う。
 事前研究会については、学年部が基本となるが、他の学年部で参加希望があれば参加可能。
 提案授業を全職員で参観し、事後研究会では、各自が学んだことを共有する。
- ② 全員一人I 授業（マイ授業）
 提案授業者以外が行う学年部内での授業研究会。事前・事後研究会は、学年部の研究推進委員が中心となり、学年部で行う。
 事後研究会で話題になったことを全体に共有化していく。
 学年部で授業づくり、参観、事後の話し合いとなるが、他の学年部で参加希望があれば参加可能。
- ③ 日常授業実践
 3つの視点を意識し、日々の授業の実践にあたる。教材研究や教材の開発等、個人内にとどまらず、学年間や学年部間、教科担任間で連携しながら授業づくりを行う。提案授業やI 授業で発行された「校内研だより」を読み、自分の授業実践に活用していく。

(2) 研究の日常化（育ちの追究の日常化）を図るために、学校行事、学年での活動、総合的な学習の時間、普段の学級・学年経営等における、よりよい教師の支援を探る。

- ① 学校行事、学年での活動、総合的な学習の時間（生活科）などにおける育ちを追究する。
- ② 学年担任団で子どもの学びの姿を把握し、育てたい資質・能力を考え「めざす子どもの姿」をイメージしていく。
 研究主題・ 3つの視点をもとに、「活動内容」、「教師の支援（特に意識付けを重視）」を検討しながら実践にあたる。

(3) 子どもの育ちや教師の支援のあり方についての共有化

- ① 授業研究会だけでなく、日常的に子どもの学びの姿を記録していき、子どもの変容をとらえられるようにする。また、毎週木曜日の校内研修日等を活用し、教材研究や子どもの姿を共有化したり、よりよい支援を考えたりする。特別支援教育部とも連携を図り、子ども理解に努める。
- ② 学習指導部と連携を図り、学力向上のアクションプランを取り入れながら、指導、支援を工夫していく。
- ③ 学校・学年の活動において育てたい資質・能力、「めざす子どもの姿」、教師の支援（意識）のあり方について、3つの視点にもとづいて研究全体会で共有する。各活動の実践後は、子どもの学びの姿をふり返り、子どもの育ちを言語化して蓄積する。次のよりよい支援を考えていくようにする。

学 校 名	令和7年度 山形市立鈴川小学校 山形市鈴川町三丁目7番10号 TEL 6 2 2 - 2 1 5 8 FAX 6 3 3 - 9 5 7 1	校 長	鈴木 伸治
		研究主任	横山 洸
研 究 主 題	「気づき、考え、働きかけ、受けとめる」子どもの育成（第三次） —自分の思いや考えを表現し「ともに、暮らしをつくる」—		
研 究 主 題 設 定 の 理 由 と 目 標	子どもたちが人生を歩む上で様々な問題場面に出会う。それらの問題を解決するために、問題を正確に把握し（気づき）自分事としてめあて（課題）をもって問題解決に挑む主体的な態度（考え）が必要であると考え。さらに、自分一人では到底解決できない問題は、専門家や仲間と解決しようとする協働的な態度（働きかけ）も必要だろう。そして、自分なりに振り返り、その問題解決の方法や最適解を修正・更新（受け止め）し、暮らしをつくる人になってほしいと願っている。 昨年度の研究のまとめにおいて、自分の思いや考えを表現したくなる授業づくりが鈴川小学校の子どもたちの成長のために必要であると話し合われた。そのような授業の実現のためには、主に「言語化（思考を整理、広げるため）」「実体験（生活と学びをつなげるため）」「視覚化（互いの考えを共有するため）」3つの視点を大切にする必要があるのではないかという考えがでた。これら3つは、独立したものではなく、繋がり、関わっていくものと考え。 それらをふまえ、今年の研究は、「言語化、実体験、視覚化」の3つの視点で「自分の思いや考えを表現したくなる授業づくり」を行い、「気づき、考え、働きかけ、受けとめる」子どもを育成していく。そして、それら3つの視点でつくった授業における「子どもの姿」を見取り、「その子どもの姿を引き出した手立て」について話し合い、考えを広げていく。このことは、令和の日本型教育に示されている「個別最適な学び・協働的な学び」にもつながるとともに、自己調整力を養うこともできる。 これらの研究を通して、令和の日本型学校教育の充実を推進し、「気づき・考え・働きかけ・受け止める」子どもの育成を目指して校内研究を進めていく。そして、全ての子どもを「ともに、暮らしをつくる子ども」に育てていきたい。		

研究 の 内 容 及 び 方 法	研究の内容 1 子ども主体の学びの研究をする ・子どもは有能な学習者にとらえ→自ら学ぶ→学習者中心に授業を作る ・具体的な姿を通して実践研究を積み上げていく。 ・子どもの姿をもとにした事後研究会とする。 2 職員の協働研究を大切にする ① 学年での事前研究・研究授業・事後研究を推進する。 ② 授業者とその学級の児童の姿から学ぶ意識をもつ ・参観者は、学習活動案・研究授業・事後研究会で、授業者と児童の姿から成果を見出し、日頃の実践に活かすようにする。授業者は、授業後と事後研究会後で、省察した自分の成果や課題を子どもの姿から見出し、日頃の実践で活かしたり解決したりする。 ③ 学校生活全ての活動を校内研究の考え方で実践していく。 3 令和の日本型学校教育への移行 ① 能動的な学習の文脈（主体的・対話的で深い学び）を意識した単元づくり。 ② 一人一人に応じた学習の文脈（個別最適な学びと協働的な学び）を大切にして個別最適な学び・指導の個別化・学習の個性化を探究していく。 学習の流れ ① 情報の受信（インプット） → 情報を主体的に受信したくなる課題設定、課題解決へ向かう （実体験） ② 情報の発信（アウトプット） → 表出することで自覚化、異なる多様な他者の情報の分析 （言語化・視覚化） ③ 情報の再構築 → 再思考・更新・修正・一般化・概念化 まとめとふり返りを大切にしてい く （言語化・視覚化） ・各教科等の「見方・考え方」を働かせた深い学びについて、まとめることができる ・児童が学習のまとめやふり返りを自らの言葉や文字で表現できるようにする。 （振り返り→気づき→課題設定→情報収集）統合化メタ認知 学習の構造化・連続性・日々のくらしへ
---------------------------------------	---

研究の計画

4 研究の計画・組織
(1) 校内研究会の全体計画

	日程	内容(研究授業学級・授業者)	担当	アドバイザー
第 1 回	5月2日(木)	主題・計画の提案	推進委員	
第 2 回	7月23日(水)	授業研究会【大研①】 1年1組	2年	野口先生
第 3 回	10月24日(金)	授業研究会【大研②】 6年3組	5年	野口先生
第 4 回	11月5日(水)	授業研究会【大研③】 個別5組	個別	野口先生
第 5 回	12月10日(水)	授業研究会【大研④】 3年1組	4年	野口先生
第6回	12月18日(木)	研究の成果と課題について	各学年	
第7回	2月6日(金)	全体の成果と課題と来年の方向性	推進委員	

※ 同学年の学級は、同じ教科・同じ単元の授業を行い、授業創りに協働的に研究を行う。
授業研究会を学年部(低・中・高・個別)で行う。【大研】は学年部で1授業提案。【大研】ではない学年は中研。【大研】【中研】以外の先生は小研として授業を行う。
中研はできるときに設定する6月までに決めてください。

(2) 研究推進委員について

校長	教頭	1年	2年	3年	4年	5年	6年	個別	教務
鈴木	有川	横山	荒井	高橋	松田	齊藤	辻	石沢	佐藤
顧問	顧問	主任	副主任	情報	用具・会場	記録	グループ	次第	日程

- ・研究主任 横山 洸
- ・副研究主任 荒井 敦子(事後研運営)…次第、協議の視点
- ・会場準備
- ・用具準備(マジック・画用紙・マグネット・付箋)
- ・記録写真

学 校 名	山形市立千歳小学校	校 長	森谷 弘昭
		研究主任	門間 祐
研 究 主 題	自ら考え、自ら判断し、自ら決定し、 自ら行動する子供の育成（２年次） －教師の学びと子供の学びの往還を連続させて－		
研 究 主 題 設 定 の 理 由	本校の今年度の教育目標は次のものである。 自ら考え、自ら判断し、自ら決定し、自ら行動する子供の育成 大小関係なく、子供の自己決定の場を増やすことで、自信をつけたり主体性を伸ばしたりする。自分に解決する力や現状を変える力があることを何度も自覚することで、自分は社会や世界を変えていくことのできる存在だと思ったり、社会を変えるのは自分だと考えたりすることにつながる。その結果、未来や自分に夢や希望をもつ。このような考えから設定した教育目標である。 この教育目標を受けて、研究主題を次のようにした。 自ら考え、自ら判断し、自ら決定し、自ら行動する子供の育成（２年次） －教師の学びと子供の学びの往還を連続させて－ 教育目標の達成、つまり、「自ら考え、自ら判断し、自ら決定し、自ら行動する子供」を育てるために、我々教師は学ばなければならない。教師の学びと子供の学びの関係について、以下の指摘がある。 ・主体的に学び続ける教師の姿は、児童生徒にとっても重要なロールモデルである。 ・教師の学びの姿は、子供たちの学びの相似形である。 教師の学ぶ姿勢や学び方が、子供のそれにも影響を及ぼすとともに、豊かに深く学ぶ教師のもとで育つ子供もまた、豊かに深く学ぶということである。よって、上記の目標達成に向けて、教師が学ぶことは必要条件といえるだろう。 さらに、教師自身が問いを立て実践を積み重ね、振り返り、次につなげていく探究的な学びを教師自らがデザインしていくことの必要性も指摘されている。まさに、本校で育成を目指している子供の姿と同じである。これを踏まえて、校内研究をトップダウンなるものではなく、各教師の課題や興味、キャリアステージ等に応じて研究内容を決められるよう、小集団での活動を基本単位とした。ここで、根底にあるのは個人の思いに基づく学びである。小集団での研究活動において、視座を変えて見ることや、異なる視点の獲得、視野の拡張が期待でき、それによって個人の学びがより豊かに深まるだろう。さらに、ある枠組みから検討したり、理想と実態、理論と実践との乖離を小さくしたり、自身の授業観や指導観を必要に応じて変えたりすることも想定される。ここで、個人の思いや学びが淘汰されることのないよう留意したい。前述したトップダウンが小集団内でも起こらないようにしたいのである。 ここまで、教育目標に示された子供の育成に向けて、教師の学び方に焦点を当てて述べてきた。では、教師は「何」から学ぶのだろうか。 例えば、歴史研究がある。学習指導要領研究がある。どう教えられてきた（学ばれてきた）か、何をどう教える（学ぶ）のか、その変遷などから我々は知見を得られる。例えば、著名な実践者や大学の教授がいる。書籍から授業の手がかりを得たり、研修会で理論的枠組みを学んだりすることができる。同じ学校の中に授業のプロや教科教育の専門家がいない場合もある。いずれの場合も、学んだことを実践しなければ意味がない。学びを実践へと移したとき、どのように評価するのか。それは、子供の姿である。		

	学ぶ手段は様々あるが、それを踏まえた指導の評価は子供の姿に基づくものである。指導と評価の一体化とも言える。子供がどう学んでいるのか、何を学んでいるのか、子供にとってのつまずきや困り感は何か、ある子供はどう変容したか、というようなことを正確に、あるいは多様に、時に文脈を踏まえて見取る。これこそが、我々教師にとって何よりの学びである。 以上をまとめると次のように「学び」が連続していくと考えられる。 教師の学びが不可欠である。 教師の学びが子供の学びに結び付く。 教師は子供の学びの姿から新たな問いや仮説を立てる、もともともっていた考えや仮説を修正する。 新たな学びを得た教師によって子供がまた学ぶ。 子供の学んでいる姿から新しい知見を得たり、あるいはうまくいかずに悩んだりする。… 教師の独りよがりの学びとならないよう、我々の学びと子供の学びとを何度も往還していきたい。改めて、研究主題は以下のとおりである。 自ら考え、自ら判断し、自ら決定し、自ら行動する子供の育成（２年次） －教師の学びと子供の学びの往還を連続させて－
研究の内容と方法	教師の学びと子供の学びの往還を重視し、自ら考え、自ら判断し、自ら決定し、自ら行動する子供の育成を目指して、研究の内容と方法は次のように考えている。 （１）グループ編成 各教師は、自身の課題意識に基づいて、問いを立て、実践を積み重ねるのである。子供に求められている主体的・探究的な学びを教師が実践し、協働的に研究を進めることを意図している。 ①各個人で、重点教科や授業における教師の役割を考える。 ②研究推進委員で、学年、教科、経験年数等を考慮してグループを編成する。 （２）グループ単位で研究に取り組む どのように研究を進めていくかを具体的に計画するのは、各グループを構成する教師である。例えば、次のような計画が考えられる。 〇〇先生の１０月の授業研究（指導主事来校）に向けて、 ・６月に□□先生の授業研究、７月に△△先生の授業研究をグループで行う。 ・夏休みに指導案作成のため関連する文献研究や諸研修会への参加を各々行い、８月に紹介し合う。 ・９月に、著名な実践家の授業 DVD 映像を見て進め方や発問に学ぶ。 ・９月に、〇〇先生の授業をグループで見て、子供の学びの現状を把握する。 … これは一例であるが、各グループの思いや学びたいことに基づいて計画され、日常的な実践の積み重ねが前提であることは言うまでもない。後述する研究の計画は、校内全体として研究の時間を設けたものであり、各グループが必要に応じて実践の場を設けたり、校内研究という枠でとどまらず日常の実践が研究そのものになったりすることを想定する。 （３）各グループの研究の現在の位置の把握や校内での共通の学び生成のための校内授業研究会 グループでの研究を進めていく中で、視野が狭くならないように、グループでの学びを本校での学びという共通したものにするために、校内授業研究会を行う。これは、校内研究に参加する者全員が参加する授業研究会である。全３回を想定しているが、増えることも考えられる。 （４）各グループの実践を他グループの教職員に報告する 各教師の思いや学びはそれぞれ異なっている、それらは別々のものではなく、複雑に絡み合ったものだと考えられる。そこで、各グループの成果や今後の展望を踏まえた実践報告を定期的に行う。すると、各グループの実践が別の視点からも価値づけられたり、今後の研究の展開に示唆を与えたり、あるいは自らの課題の更新の必要性に気づいたりするなど、さまざまな効果を期待できる。特に、各教師の毎日の授業づくりの手がかりとなる情報は、すぐに全職員に共有できるようにしたい。

研究の計画

- 4月14日 第1回 研究全体会（昨年度のふりかえりと今年度の方向性）
- 5月1日 第2回 研究全体会（研究グループで年間計画の話し合い）
- 5月26日 第3回 研究全体会（カリキュラム・デザイン表の作成）
- 6月2日 グループ研究
- 6月23日 校内授業研究会①※
- 7月14日 第4回 研究全体会（授業研究会①省察）・グループ研究
- 7月28日 第5回 研究全体会（学級経営・心理的安全性と授業）
- 8月27日 第6回 研究全体会（全国学力・学習状況調査の分析）・グループ研究
- 9～12月 グループ研究強化期間
- 1月9日 第7回 研究全体会（研究のまとめの方向性）・グループ研究
- 1月23日 第8回 研究全体会（個人のまとめ→グループのまとめの見通し）
- 2月25日 第9回 研究全体会（研究の総括と来年度の展望）

※この計画の日程の他に、各グループでの授業づくりや授業研究など、活動に取り組む

※校内授業研究会とは、校内研究に参加する者全員で授業を見て学ぶものである。全3回を計画し、指導主事より今後の研究の方向性を示す指導・助言をいただく。

<様式>

学 校 名	山形市立金井小学校 山形市陣場三丁目 7 番 60 号 TEL 681-8471 FAX 684-6768	校 長	高橋 浩
		研究主任	安部 洋太
研 究 主 題	自ら課題を解決する子どもの育成（2 年次） —主体的に学び続ける子どもの姿を求めて—		
研 究 主 題 設 定 の 理 由	昨年度、本校では 9 年ぶりに研究主題を見直し、「人とかかわりながら、学ぶ喜びを実感する子どもの育成」から「自ら課題を解決する子どもの育成」へと更新した。 更新した理由は、AI の発達とともに日々進化する予測不能な世の中「Society5.0」を生きていくためには、自ら課題を見つけ解決し、未来を切り拓いていく力の育成が子ども達に必要なだからである。また、昨年度の校内研究の反省の中において、多くの教員から子ども達に「学びを自分事」にさせたいという思いが強く寄せられていた。学習を自分事にするためには、問いを立て、見通しをもち、課題解決をして振り返るという、学びの過程において、子ども達自身が主体的に考えて自分自身の力で学習を進めていく力、自走する力が必要であると考えている。自走する力は、特別活動やよりよい学級・学年・学校にするために必要な力でもある。ICT を効果的に生かすことで魅力ある授業づくりを行い、指示待ちではなく、主体的に課題を解決する子どもを育成するために、「主体的に学び続ける子どもの姿を求めて」と副題を設定した。		
研 究 の 視 点	視点① 子どもが追究したくなるような、子どもの思考を大切にした学習課題の設定 視点② 子ども一人一人が問いをもち、見通しをもって主体的に課題解決に取り組むための「学びの過程」を元にした授業 視点③ 「学びの過程」に沿った ICT の効果的な活用、各教科での活用場面の展開の追究 〈視点①について〉 ○子どもの問いを引き出し、学習課題を学習者の主体者である子どもたちのものとして意識させる。 〈視点②について〉 ○身につける資質・能力を明確にし、子どもの思考に沿った授業づくりと単元構成。 ○【課題の設定】、【見通し】、【整理・分析】、【振り返り】を「学びの過程」とした授業・単元づくり。 ○目的意識・相手意識をもった課題・活動・場の設定づくり。 ○自分の成長やよさに目を向ける振り返りと価値づけ。 〈視点③について〉 ○日常的な ICT 機器、タブレットの活用を進め、「学びの過程」に沿って活用を工夫していく。 ○調べ学習、写真・動画撮影、発表の仕方、交流の仕方など、課題解決をするための方法・手段として、効果的な ICT の活用をする。		

研究の内容

子どもが自分事として資質・能力を身につけるために、【課題の設定】、【見通し】、【整理・分析】、【振り返り】の「学びの過程」を授業の中、単元の中に位置づける。教科、単元、本時の学習内容によって4つをバランスよく組み込むことができない場合は、2時間扱いにしたり単元の中で軽重をつけたりする。4つの「学びの過程」が、資質・能力を身につける学びの過程として効果的だったか、子どもが自分事として学習する過程として成果と課題はどこにあるかを研究し、授業づくりと改善を図る研究にする。特に、「教科の資質・能力の定着」について重きを置き、教科としての話し合いを事前研・事後研、学年研修日などで行っていく。

例	本時(45分間)	学びの過程	単元計画(6時間扱い)	学びの過程	単元計画(6時間扱い)	学びの過程
	10分	【課題の設定】	1・2時	【課題の設定】を中心	1時	4つ全て
	15分	【見通し】を中心	3時	【見通し】を中心	2時	【課題の設定】【見通し】まで
	10分	【整理・分析】	4時	【整理・分析】を中心	3時	【整理・分析】【振り返り】
	10分	【振り返り】	5・6時	【振り返り】を中心	4時	4つ全て
					5時	【課題の設定】【見通し】【整理・分析】まで
					6時	【振り返り】

研究の方法

《校内研究に向けて》

①授業研究について

- 研究授業は、「大研」(4回)と「中研」(4回)を設定し、授業改善を進める。
- 「大研」の授業は、事前研究会は学年部で行う。授業を全員で参観し事後研究会を行う。講師を招聘し、助言指導をいただく。「大研」は、低・中・高学年・特別支援部から1つずつ行う。
- 「中研」の授業は、事前研究会、授業の参観、事後研究会を学年部と参観者で行う。講師招聘はしない。「中研」は、「大研」の授業者ではない学年部の低・中・高学年・特別支援部から1つずつ行う。
- 授業者は各学年部で、若手・中堅1人、主任・副主任1人を代表者とする(例：6学年が若手・中堅の場合は、5学年が主任・副主任)。
- 小研は行わない。研究主題に沿った授業実践を各自行い、実践報告会(1学期末と2学期末の計2回)に向けて各自研究を進める。また、「大研」・「中研」の代表者の指導案・授業づくりにあたって、学年部で一人一人が役割と責任をもって研究を進める。
- 事後研究会では、「教科の資質・能力は身についたかどうか」、「子どもは自分事として学習していたかどうか」を中心に話し合い、効果のあった手立てなどを他の授業で生かしていくようにする。事後研究会で話し合われたことについて共有できるように、学年部で分担して研究推進委員会を中心に校内研だよりを作成して配付する。
- 研究紀要の原稿は、研究に沿った実践報告を掲載する。授業を受け持つ教員全員が1末までに作成する。

②教科について

- 各学年の系統的な資質・能力の育成するために、1節に1度各学年で学習状況の確認と系統的に育成するための見通しをもち次節の学習を進める。
- 教科主任を中心に教科ごとの情報提供を積極的に行っていく。

③講師について

- 「大研」の授業研究会に講師を招聘し、助言指導をいただく。
- 夏季の校内研修会は若手研修会とも連携した授業づくりができるよう、講師を招聘し助言指導をいただく。

《日々の授業づくりについて》

①カリキュラム・マネジメントについて

各学年で年間計画を元にし、カリキュラム・マネジメントを作成する。節ごとに学年で見直しを行う。

②研究の日常化について

- 水曜日の学年研修日で、各学級の学習指導や学習進度、単元ごとに身につける各教科の資質・能力について話題とする。
- 学年の学級同士での授業参観、チーム担任制で気づいたことを元に授業改善や学年経営・学級経営に活用する。
- 確かな学び推進部と連携し、基礎・基本の定着が図れるようスキルタイムの内容や学習の進め方を検討し、提案する。
- 授業研以外でも、学年・個人で積極的に授業を開いていく。その場合、当該学年の研究推進委員が全職員に知らせるようにする。(略案も可)

研究
の
計
画

月日	予定	内容
4月17日（木）	特設部会①	研究全体会①②の確認・提案文章確認
4月23日（水）	研究全体会①	全体構想共有・大研・小研授業者決定
5月 1日（木）	研究全体会②	校内研修に向けて内容を検討
5月 9日（金）	特設部会②	提案授業、事前研・事後研究会・研修全体会③に向けて
5月16日（金）	特設部会③	提案授業、事前研・事後研究会に向けて役割分担
5月28日（水）	提案授業	提案授業&事後研
6月20日（水）	特設部会④	大研①に向けて、事前研・事後研
7月 9日（水）	大研①	大研授業&指導主事来校
7月18日（金）	特設部会⑤	研究全体会③、夏季研修会に向けて
7月30日（水）	研究全体会③	1学期の反省、2学期に向けて
8月 5日（火）	夏季研修会	外部講師を招聘し研修
8月29日（金）	特設部会⑥	1学期反省を踏まえた2学期の研究の進め方について
10月10日（金）	特設部会⑦	大研②に向けて
11月14日（金）	大研②	大研授業&指導主事来校
11月19日（水）	大研③	大研授業&指導主事来校
12月 5日（金）	特設部会⑧	大研③に向けて
12月10日（水）	大研④	大研授業&指導主事来校
12月24日（水）	研究全体会④	実践報告会、2学期の研究の反省（成果と課題）
1月16日（金）	特設部会⑨	研究全体会⑤について&次年度の研究テーマや方法について
2月18日（水）	研究全体会⑤	次年度の研究に向けて提案

学 校 名	山形市立大郷小学校 山形市大字中野 506 番地 TEL 681-8472 FAX 684-6292	校 長	鎌田 史顯
		研究主任	東海林 陽子
研 究 主 題	『自ら学びに向かう子どもの育成』（1 年次） ～価値ある学びと必要感のある交流を通して～		
研 究 主 題 設 定 の 理 由	本校の子どもたちは、とても素直で、前向きに学校生活を過ごしている。また、高学年の子どもたちを中心に、自分たちでくらしや学びを切り拓いていこうとする気運も高まってきている。しかし、自分の考えで行動に移すことに自信がもてない傾向が強いため、学びや活動に対する子どもの遣り甲斐を高め、活動プロセスにおける自分の変容に気付き、自信を高められるように支援していかなければならない。そのためには、年間を通して「子どもの育ち」を学校全体でマネジメントしていく必要があると考える。 授業づくりでは、研究会を通して、学習に向かう意欲を育み、見通しをもって活動を進める力、相手の思いに寄り添って聴く力を高めていくことが、子どもたちが主体的に学ぶ上で大切であるとわかってきた。また、カリキュラムの大きな柱となる学校行事への取り組みに関しては、目指す姿や、取り組み方、支援の仕方を全職員で具体的に話し合うことで、子どもたちがやりがいを感じ、自分たちで活動を進められるようになり、力を伸ばす取り組みになってきている。 そこで令和 7 年度は、「自ら学びに向かう子どもの育成」を目指し、教科・総合的な学習や行事や児童会活動等で、子どもが学ぶことに価値を見出し、仲間と高め合い自身の成長を実感できるような授業や教師の支援の在り方について、さらに追究することにした。 子どもたちの学びが、「できた」「わかった」「次もできるかもしれない」「くやしいから次こそは！」と、より主体的に紡がれていくように実践を重ね、教育の営みを確立していくことで、研究主題に繋がっていくものと考えている。		
研 究 の 目 標	子どもの実態や学習指導要領の趣旨を踏まえ、子どもの育ちに向け「自ら進んで学びに向かう主体的な子どもの育成」について、日常的に追究していく。		
研 究 の 内 容	（1）「価値ある学び」づくり 単元づくり・授業づくりの始めの一步は、「何を教えるか」ではなく、「<u>子どもの実態から</u>、どんな教師の願いを描くか」であり、「<u>子どもの興味・関心から</u>、どんな活動を展開していくか」である。教師には「させたい活動」がある。しかし、子どもたちの思いが乗らない状況で、その活動に取り組ませれば、教師主導に陥ってしまう。単元や授業をどのように展開すれば、子どもたちは、教師が「させたい活動」の必要性に気付くのか。それには「授業を通して身につけるべき資質・能力」「単元・学習を通して学びとること、育成される力、成長した姿」を子ども自身が把握できること。そして、徐々に育成される資質・能力を実感できた時に「もっとやってみたい」「これができたのだから次は・・・」などの新しい課題発見にもつながり、新たな価値が創造されるはずである。子どもの実態を意識しつつ、子どもたちにやりがいや達成感のある学習を積み重ねていくことが重要と捉える。		

	(2)「必要感のある交流」の場面づくり 学習では、個々の学びの保障をしっかりと行い、個で考えたり、考えを整理したり、自分の意見として整理する時間の確保を行う。その中で、「子どもたち自身」が「他の人の考えを知りたい」「自分の考えについて意見をもらいたい」「自分の考えをより良いものにするために、話し合う時間が欲しい」となる学習場面や課題の設定や、「話し合わない」と到達できないレベルの課題」など交流への必要感がもてるようにする。また、交流したことでプラスになった成功体験や、問題・課題の解決方法としての有効性の理解を図る。 以上を交流場面の大切な要素として捉え、全ての教育活動を創造する際に活用する。 (3)「主体性」を高める具体的な手立て ①学ぶ意欲を高める ・「もっと知りたい」「もっと調べたい」「確かめたい」など、思いを十分に引き出すような教師の学習のきっかけ、活動づくり。 ・学習が自分事(自分の中で学ぶ意義や価値を見出すこと)になるための働きかけ。 ・学習のゴールの姿(何ができるようになるか)を子どもたちと共有する。ゴールの姿は活動の中で生まれる課題と共に変容していくものと認識する。(ただし、カリマネの付けたい力を狙った活動になりそうか要確認。) ②学習への見通しをもたせる ・子どもと一緒に課題をつくる。 ・活動のゴールの姿(何ができるようになるか)を子どもと一緒に考え、具体的に共有する。 ・「わかった」「できた」「できるようになった」などの小さな成功体験を積み上げ、学習へのエンジンが回るようにする。 ・既習事項との結びつき ③相手の思いに寄り添って聴く力、話し合う力を高める ・話し合ったからわかった、新たな考えが広がったなど、話し合うよい経験を振り返りで価値付けていく。 ・高め合う集団(クラス)を自分たちの手でつくっていくことを意識付ける。
研 究 の 方 法	(1) 授業における自ら学びに向かう子どもの追究 ①「校内授業研究会」 研究授業は一人一授業とし、できる限り全員が参加する。研究の窓口は算数とし、課題づくり、個の学びの保障、必要感のある交流、個の学びの整理、振り返りなど、学習への見通しがもてるような実践を積み上げる。事前研究会は、授業者が自ら設定し、OJTによって「主体性を高める」ことを主軸に据えた授業づくりに重点をおく。事後研究会の運営については研究推進委員が中心となって行う。 ②「七中校区 4校合同授業研修会」 中学校区を丸抱えにして、『セブン・プライド』の「三、授業に集中し、着実な努力をします！」に乗っ取り、「子どもの育ち」を推進していく。子どもが本気となるような価値ある学びの創造や教師の支援について、4校で学ぶ。 (2) 日常的な教育活動における自ら学びに向かう子どもの追究 ①全教育活動を通して実践研究 学校行事や児童会行事、委員会活動では、子どもたちが課題意識をもって、自分たちの手で活動を考え、互いに関わりながら取り組んでいけるようにしたい。それには、大まかな活動計画を子どもと一緒に考え、子どもたち自身が活動に見通しをもって臨めるよう支援するなど、具体的な教師の支援や児童理解のあり方について教職員OJTにより学び合っていく。 ②「カリキュラム・マネジメント」(以下、「カリマネ」と表記)の推進 カリマネは、日常的に「子どもの育ちをマネジメントすること」である。子どもにとって、やり甲斐のある活動を通年にわたって繋げていけるように、「教育課程」並びに「学級経営案(学級カリキュラム)」について、十分に吟味して作成しなければならない。また、学級経営案(学級カリキュラム)は、年度当初の「紙キュラム」から、教育活動が進むにつれてPDCAサイクルによる加除修正を加え、年度末に完成を迎えるようなイメージで取り組む。子どもの育ちは「日常の教育活動」にあると捉えている。 ③「生活科」「総合的な学習の時間」の実践研究

カリマネの中核となる教科・領域は生活科・総合であり、子どもの育ちの実現には欠かすことのできない教育活動である。子どもにとって遣り甲斐のある活動にするには、「単元の立ち上げ」で、学習に向かう意欲や思いを十分に耕し、大まかな学習の流れを子どもたちと共に計画するなど、子どもが「自ら学びに向かいたいくなるための教師の支援」が重要となる。

研究の計画

月	活 動 内 容	主な研究内容
4	◆研究推進委員会	・研究の構想について ・「運動会」コンセプトの検討
5	◆研究全体会	・研究計画、提案授業、指導案 等
6	◆4校合同授業研修会	・授業研修会に向けた授業づくり (教材、教具、授業構想、指導案の作成について)
7	◆研究推進委員会	・「全校縦割りウォークラリー」コンセプトの検討 ・研究の方向性の確認
8	★授業研究会 ★特別な支援を要する子への対応研修会(適宜)	・2学期以降の授業づくりについて共通理解を図る。
9		
10		
11		
12		◆研究推進委員会 ・今年度の総括と研究紀要作成について ・「6年生を送る会」コンセプトの検討
1	◆研究全体会 ◆研究推進委員会	・学年部ごとの研究の成果と課題共通理解 ・次年度に向けての方向性
2	◆研究全体会	・次年度に向けての共通理解

※研究推進委員は、行事担当者とともに子ども主体の活動について検討する。

<様式>

学 校 名	山形市立明治小学校	校 長	中村 昌彦
	山形市大字灰塚454 TEL 681-81473 FAX 684-6879	研究主任	佐藤 綾
研 究 主 題	試行錯誤しながら追究し、ともに学び合う子供の育成 (4 年次)		
研 究 主 題 設 定 の 理 由	本校の学校教育目標は、『郷土を愛し、仲間と共に、夢をもって生きる子供を育成する』である。明治小の子供達が、6年間同じ仲間と学んでいくことの強みを生かし、仲間と心を通わせながら、学びを積み重ね、学んだことを生かし、自分たちで考え、学びを、生活を、学校を創っていくことをめざしている。 児童の実態から、研究主題を「試行錯誤しながら追究し、ともに学び合う子供の育成」とし、自分たちの生活や経験の中から課題を見出し、共に解決しようとしながら、更にこれからの自分たちの生活や学習への活用力を高めるような教育活動を展開していきたいと考えた。 研究主題に掲げた「試行錯誤しながら追究し」とは、「やってみたい」「分かりたい」「解決したい」など、子供自身に湧き上がった思いを原動力として能動的・協働的に問題解決に向かう過程で見せる子供の姿ととらえている。現在の本校の児童の実態からも、学習者中心の視点を大切に、自分の思いをもとに探究を続ける力を育て、資質・能力を発揮しながら学びを深めている姿をめざす。また、「ともに学び合う子供」とは、失敗や間違いをお互いの学びのチャンスと捉えられる温かく安心した雰囲気、力を合わせる共生的な関係の中で、学びを広げたり深めたりする姿をめざしていきたいと考え、本研究の主題を設定した。		
研 究 の 目 標	①全ての教育活動において、「試行錯誤を生み出すための工夫」・「学びをつなぐための工夫」の2つの視点に沿って日々の教育活動における実践を重ねていく。 ②子供の育ちに結びつく教師の意識の持ち方や支援の方向性を追究する。		
研 究 の 仮 説	・教師が、子供自身で学習課題を設定したり、学習の方法や順序を選択したりする単元を構成することで子供が試行錯誤しながら追究する力が育まれるのではないかな。 ・教師が、子供自身が試行錯誤できる場を工夫して設定することで、子供同士が関わり合い、共に学びあうことの楽しさを子供に実感させることができるのではないかな。		

研究構想図

学校教育目標

郷土を愛し、仲間と共に、夢をもって生きる子供を育成する

「試行錯誤しながら追究し、ともに学び合う子供の育成」(4 年次)

◎めざす子供像 ・試行錯誤しながら探究する子供 ・ともに学び合う子供

試行錯誤を生み出すための工夫

能動的・協働的に解決に向かう過程で見せる姿を、資質・能力を発揮しながら学びを深める姿と捉え、活動を構想する。学び合い、考えを深める授業になるよう、湧き上がった思いや自分の考えを言語化できるようにしていきたい。

学びをつなぐための工夫

すぐには、答えが見つからない問題もある。学びは連続している。そこで、友達と学び合っ解決したり、既習事項を紐解いたり、他教科と合わせたりなど、学びをつないでいくことで、学びを深めていけるようにしたい。

□試行錯誤しながら粘り強く解決しようとするために

- 自分の考えをもち、追究する時間や追究方法の選択を保障する。(個別最適な学び)
- 思考を言語化していくよさを実感できるような工夫をする。
(思考や感性に関わる言葉がつまったノートづくり、思考ツールの活用など)
- 教師の「出」と「待ち」を意識する。
(どんな情報を、どこで、どのように獲得できるようにするか。)
- 発問、言葉がけ、個別支援の工夫
- 視覚的な手立ての工夫

子供がワクワクするしかけ
(場面設定) づくり

□「自分ごと」となる学習課題にしていくために

- これまでの学びや、自分の生活、経験から学習課題を設定する。
- 「解決したい」「こうすればできそうだ」といった子供の強い思いを引き出し、解決の見通し(ゴール・プロセス)がもてるようにする。

□ともに学び合う良さを実感できる授業づくりのために (協働的な学び)

- かかわることのよさを実感し、安心して過ごせる学級経営を行う。
- 子供の思考をつなげる教師の問い返しを意識する。
「それってどういうこと?」「わからない」「ちょっと待って」と自然と言える学級を目指す。
「みんなでやったらわかった」「友達とやったら解決できてよかった」と実感できる経験を積み重ね、価値づけていく。

□学びの手応えを実感するために

- ふり返りで自分の学びや知識のつながりを実感する。
- ふり返りから次の課題を見つけ、自分たちの次の学習につながっていく経験を積み重ねてい

学級カリキュラムマネジメント表の作成

- ・年間を通して育てたい資質・能力のイメージをもつ。
- ・育てたい資質・能力を視点として、教科と教科、教科と特別活動や学校行事をつなぐ。

研究の方法	① 試行錯誤を促す場面と協働的に学ぶ場面を組み入れたカリキュラムマネジメント表の作成 ・ 4月・5月にカリキュラムマネジメント表やアクションプランを全学年で話し合いながら作成する時間を確保する。 ・ 試行錯誤を生み出すために、自由進度学習を取り入れていく。 ・ 子供が育つ学習や活動にするために、「試行錯誤を生み出すための工夫」「学びをつなぐための工夫」の2つの視点に沿って活動内容や支援の在り方などについて意識したカリキュラムマネジメント表を作成する。カリキュラムマネジメント表の作成の際に、年間で重点とする単元を決め、明記する。また、・アクションプランとカリキュラムマネジメントの資質・能力等が関連させ作成する。 ②教職員間での授業についての研修 ～子供たちが「試行錯誤」できる授業づくりをめざして～ ・学校全体での授業研究会(七中校区合同研究会) 【事前研究会①】学級カリキュラムマネジメント表と学習指導要領を持ち寄り、めざす子供の姿、つけたい資質・能力、学びや遊びとのつながりについて話し合い、授業・単元の構想をもつ。 【事前研究会②】予想される子供の思考と指導事項、手立てについて考え、指導案を中心に検討する。 【事後研究会】子供の姿で語り合い、成果と課題を共有する。記録をとり、課題やテーマに沿って全員で検証し、授業づくりに生かす。 ※指導案は、「試行錯誤を生み出す学習課題」「試行錯誤できる場の設定・工夫」の2つの視点、もしくはどちらか1つに沿って書く。 ③子供の姿を共有する場を設定する。 ・ 複式学級で学ぶ子供たちの姿や、複式を生かして子供たちが協働的に学ぶ姿を教師で共有する。重点単元の実践の際に、教師が互いに授業を見合う機会を設定し、視点に沿った手立てを中心に検証する。
研究の計画	・研究全体会… 4/30(今年度の研究の方針・カリキュラムマネジメント表作成) ・7/30・12/22・3/9 単元内自由進度学習の実践をした資料を持ち寄って話し合いを行う。そこで実践してみての成果と課題、悩みなどを共有する。 ・七中学区4校合同授業研究会…6/24 ・実践記録集の発行… 3月

<様式>

学 校 名	山形市立出羽小学校	校 長	武田 重泰
		研究主任	村山 豪
研 究 主 題	一人ひとりが自分らしく輝く子どもの育成（1年次）		
研 究 主 題 設 定 の 理 由	出羽小学校では、学校教育目標「自分・仲間・夢 かがやく出羽の子どもを育てる」を具現化するために、「はみ出せ心」「ひらめけ頭」「とび出せ体」を成長の合い言葉として、全ての教育活動において、子どもと教師で目標を共有し取り組んでいる。そして、子ども一人ひとりが具体的に目標を設定し、取り組みを考え、ふり返りながら、なりたい自分を意識して生活することで、一人ひとりが、自分の居場所をつくり、自分らしく輝ける学校をつくっている。 昨年度は、「考え続ける子どもを育てる(2年次)」を研究テーマに、きき合う関係づくりとそれにおける教師の支援の2つに焦点を当てて授業実践を行ってきた。 誰とでも自分の考えていることを表現できる子どもや相手の考えていることに耳を傾けることができる子どもが増えてきた。しかし、教科の本質に迫る対話までには至っていないことが多かった。また、教師の支援については、教材研究が不十分なため、学ばなければならないことが何なのかを理解していないことがあったり、出（課題提示、発問、板書等）のタイミングや方法を迷ってしまえなかったりすることがあった。子ども中心の授業をより深いものにするには、児童理解意を基盤にしながらも、教師の教材研究と指導法について学ぶ必要があるということが見えてきた。 また、1年間の子どもの姿から見えてきた課題は、自己肯定感が低い子どもが多くチャレンジしようとする気持ちも低いことである。自分らしく輝くことができず、もどかしさを感じている子どもや、教科の本質にふれたより深い学びにおける楽しさを十分に感じるできない子どももいる。 これらの実態から、きき合う関係づくりは継続し、もう一度「自分らしく輝く出羽の子」の具体的姿の明確化と育成する手立てについて改めて考えていく必要があるのではないかという考えに至った。		
研 究 の 目 標	「授業の中で自分らしく輝く子ども」と「一人ひとりが楽しいと思える授業」の2つに焦点を当てる。 （1）「授業の中で自分らしく輝く子ども」について 例）・友だちの姿を見て声をかける姿 ・頭をかかえて考える姿 ・身振り手振りを交えながら、必死に自分の考えを伝えようとする姿 ・「どういうこと？」と問い返ししながら、相手の考えを理解しようとする姿 ・思わず「あ～」と言って納得する姿 ・時間になっても書き続ける姿 ・時間を忘れて取り組む姿 ・思わず頭や体が寄っていく姿 ・本文を一生懸命読む姿 ・「あ！」とひらめいて話し始めたり書き始めたりする姿 ・何回も自分の考えを書き直して考え続ける 上記の具体的な姿を日常的に引き起こす授業をつくっていく。また、年間を通して、「自分らしく輝く		

子ども」の具体的な姿を共有して増やしていく。

（２）「一人ひとりが楽しいと思える授業」について

本校における「楽しい」とは、教科の本質にせまり、「なぜ？」にこだわった先の「できた！」「わかった！」という姿や考えること自体が楽しいと思える姿である。その「楽しい」を実現させるためにより深い教材研究をする。

低・中・高学年の発達段階に応じて、下記の「きき合う姿」を育成する。

学年	具体的な姿の例	身に付けたい言葉の例	学習形態の例
低学年	- 話を聞くときは静かにする - 話し手に体を向ける - うなずきながら聞く - 理由を問える	「なんでそう思ったの」 →「だって・・・」 「ちょっと聞いてくれる？」 「思いついたんだけど、話していい？」	ペア～３人
中学年	- 聞き手の様子を見ながら話を区切って話す - 相手の話を自分の言葉で言い換える	「ここまでのいい？」 「伝わった？」 「言ってみて」 教師が批判のモデルを示す 「ん？」「どういうこと？」 「そうかなあ？」	３人～４人
高学年	- 誰とでもきき合える - 教科の本質にせまっている - 本時の課題や内容と合っている - 問える - 相手の話を再現できる - 批判できる	「〇〇さんの言いたいことってこういうこと？」 「〇〇さんはどう思う？」 「ん？」 「ちがうと思うよ。だって・・・」	

本校の研究は仮説研究ではありません。

研
究
の
仮
説

研究の内容および方法

(1) 授業研究会

各担任は教科を選び、1回の研究授業を行って教室を開く。
年度末に研究テーマについての成果と課題を各自資料にまとめる。※授業研究のまとめではない。

①「みんなで授業を語る会」(大研)

- ・山形大学の森田智幸先生を招聘した、子どもの見取りに焦点を当てた研修。(2回)
- ・指導主事を招聘した、教科の本質及び指導法に焦点を当てた研修。(2回)
- ・各学年部と特別支援部で1授業ずつ提案する。(計4授業)
- ・事前研は研究推進委員と該当学年部のメンバーで行う。
- ・森田智幸先生の来校日は、原則2時間目を研究授業、3・4時間目を通覧してもらい、午後には事後研究会を設定する。

②「授業を語る会」(小研)・・・原則一人1回(大研授業者と七中学区授業者は除く)

- ・小研の日程については、授業の進度、子どもの実態に応じて変更も可とする。
- ・学年部で事前研と事後研を行う。
- ・小研に参加できるように週予定を調整する。各学年部の小研は、1回ずつは参観すること。

③事後研究会

- ・事後研は、ワークショップ形式や全体での話し合い形式など適宜工夫する。
「授業の中で自分らしく輝く子ども」の姿を見つけ、撮影し、共有する。
- ・事後研の運営は、研究推進委員が分担して行う。

(2) 研究全体会

- ・年度初め、1学期末、2学期末、年度末に研究全体会をもち、研究への理解を深めたり、成果と課題を共有し合ったりする。
- ・森田智幸先生の講話(1回)

(3) 日常的に授業を開いて見合う。

前期と後期で1回ずつ「見る見るウィーク」を設定する。
学年問わず出入り自由で見合う。

(4) 月1回の校内研修会(でわ〜ずかふえ)を開く。(実施計画については別紙参照)

研究の計画

研究授業研究会計画 R7.5.13現在

研究全体会

回	月日	内容
1	4月14日(月)	今年度の校内研究について
2	7月28日(月)	1学期の成果と課題 2学期に向けて
3	12月24日(水)	1学期の成果と課題 3学期に向けて
4	2月4日(水)	1年間の成果と課題 来年度に向けて

①校内研提案授業

回	月日	授業者	学級	教科
1	6月11日(水)	村山	5年1組	算数 高

①-1「みんなで授業を語る会」(大研)

回	月日	授業者	学級	教科
0	4月14日(月)	森田先生による講話		
1	7月4日(金)	森田先生	武口 5年2組	高 中 特 低
2	9月1日(月)	指導主事	小池 3年1組	体育
3	11月28日(金)	指導主事	加藤他 はなわか	
4	12月18日(木)	森田先生	和田 1年3組	

※11月28日の授業研は、はなわか合同での授業を行う

①-2「七中学区4校合同授業研究会」

回	月日	授業者	学級	教科
1	6月24日(火)	武田	4年1組	中

②「授業を語る会」(小研)

	回	月日	授業者	学級	教科
1学期	1	7月9日(水)	小野	6年1組	国語
	2	9月17日(水)	具志堅	4年2組	図工
2学期	3	9月30日(火)	秋葉	6年2組	
	4	11月4日(火)	片山	2年1組	学活
	5	11月18日(火)	高橋	1年1組	
	6	12月3日(水)	3年次研	門脇	3年2組

山大院生等への授業提供(村山)	
1	4月22日(火)5, 6校時
2	6月下旬から7月上旬
3	未定
4	未定

1年1組	○	1年2組	○	1年3組	○
2年1組	○	2年2組	○	2年3組	○
3年1組	○	3年2組	○	3年3組	○
4年1組	○	4年2組	○	4年3組	○
5年1組	○	5年2組	○	5年3組	○
6年1組	○	6年2組	○	6年3組	○

経験者研修		3年次、5年経験者研修者の小研について
低 岡田先生	10月16日	初任者代表授業は、研究推進委員も事前研および事後研に参加して、学びを深める。
中 門脇先生	12月3日	3年次フォローアップ研
高 秋葉先生	9月30日	5年経験者研 ※初任研代表授業は授業のみ参観

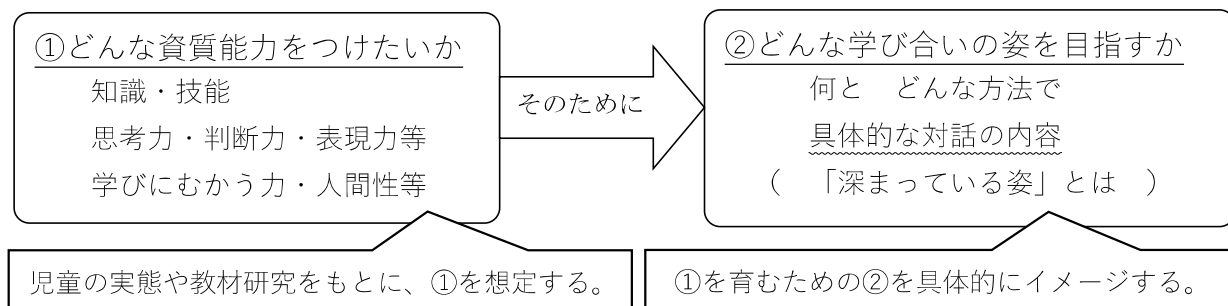
<様式>

学 校 名	山形市立楯山小学校 山形市大字青柳字一本木64番地 TEL686-2006 FAX686-4183	校 長	佐藤 勝子
		研究 主任	橋本 京
研 究 主 題	学び合い、考えを深める子どもの育成 ～子どもの思考に沿った授業を通して～		
研 究 主 題 設 定 の 理 由	本校では、「いのち 夢 なかまをつなぐ 子どもの育成」を学校教育目標に掲げ次のような子どもの姿を目指し、教育活動を行っている。 いのち たくましく元気な子ども (体) 夢 学びに向かう子ども (知) なかま やさしく思いやりのある子ども (徳) 昨年度までの3年間は、物事を多角的多面的にとらえ、気づき、考え、社会や他者と関わりながら自己実現しようとする子どもの姿を目指し、「気づき、考え、学び合う子どもの育成」を主題に研究を積み上げてきた。その中で、学びを深めていくためには、「言葉」を適切に用いて、自分の内言を言語化する力が不可欠であることを再確認した。それをふまえ、対話的に学んでいく授業づくりに力を入れて取り組んできた。 成果としては、多くの研究授業の実践を通して、様々な「学び合う姿」のイメージを広げ、教師間で共有することができた。また、児童の「相手意識をもって自分の意見を話す力」や、「聴くことが大切であるという意識」が高まったという成果があげられた。 その反面、資質能力を身に付けるための手段である「他者との交流」が、目的になってしまっていないか、交流によって学びは深まっているといえるのかという課題点も見えてきた。 そこで今年度は、対話的な学びを通して資質能力を高めていくという「学び合い」は引き続きのテーマとし、さらに、その学び方を通して「思考を深めていくこと」に焦点をあてて授業研究を進めることとした。思考が深まらなかった要因として、「児童が課題を自分事として捉えられていないこと」「深めていこうとする動機付けが不十分だったこと」が挙げられた。そのため、「子どもの思考に沿った授業づくり」を副主題とし、課題設定や発問を通して児童の主体性を引き出せるような授業づくりを目指していくこととした。		

1. 目指す子どもの姿

- 課題を自分事として捉え、粘りよく学ぶ子ども
- 他者と意見を交わし、考えを深める子ども

2. 研究の手順



※②の姿は、より具体的に想定する。特に、「学びが深まっている姿」とは、どのような姿なのかについて教材研究や指導理解をもとに、丁寧に検討する。

3. ②の姿を引き出すために

以下の3つの視点に分けて、それぞれ手立てを講じていく。

(1) 課題設定

- ・ 児童の興味関心を引き出す課題
- ・ 児童の思考に沿った課題
- ・ つけたい資質能力が確実に習得できるような焦点化された課題

(2) 学習場面

- ・ 児童の思考を段階的に引き出す発問
- ・ 児童にとって必要感のある学習形態
- ・ 体験活動や操作活動、ICT 機器等の学習用具の効果的な活用

(3) まとめと振り返り

- ・ 視点を与え、目的を明確にする
- ・ 振り返りの活用、またはフィードバックを行う
- ・ 質を高めるための声かけ（具体性、分析力、次への見通しなどへの価値づけ）

4. 授業研究のもち方

①全員が研究授業を行う。

②事前研究会は授業日の1か月前に1回目、2週間前に2回目を学年部ごと行う。

1回目は略案程度で。「どんな資質能力をつけたいか」「そのためにどんな学び合いの姿を求めるか」等を中心に、相談ベースで。

2回目は完成した指導案を検討。「手立てや授業構成が有効か」「誤字脱字、書き方等のミスはないか」などを中心に行う。

③事後研究会は全体で行う。

- ・司会・記録・授業の写真は、学年部で分担する。
- ・事後研を行う場所は授業を行った教室とし、可能な限り板書も残しておく。
- ・原則としてワークショップ形式で行う。

電子黒板やタブレット等を活用し、意見集約ができないか検討中。

- ・事後研の内容を受け、授業者が「授業研だより」を発行し、次回の授業研に生かせるようにする。

4月 3日	木	研究推進委員会		
4月 4日	金	校内研究日①	今年度の研究の方向性について	
4月30日	水	校内研究日②	カリキュラムについて	
5月28日	水	校内研究日③	指導案について	
6月16日	月	校内研究日④	4年 国語	
7月18日	金	校内研究日⑤	2年 算数	
10月29日	水	校内研究日⑥	1年 国語	6年 総合
11月 5日	水	校内研究日⑦	3年 国語	いずみ 自立活動
12月 3日	水	校内研究日⑧	5年 国語	
1月28日	水	校内研究日⑨	研究の振り返り 研究のまとめと来年度の方向性について	
2月9日	月	校内研究日⑩	研究紀要作成	

<様式>

学 校 名	山形市立高瀬小学校 山形市大字下東山1264番地 TEL686-2264 FAX686-4184	校 長	菱川 若葉
		研究主任	高嶋 彩乃
研 究 主 題	自ら学び、共に伝え合う高瀬っ子の育成 ～課題解決へ向け、粘り強く取り組み、表現する力を養う～ (1年次)		
研 究 主 題 設 定 の 理 由	学校教育目標 本校では、「やさしく かしく たくましく ～チャレンジ～」を教育目標に掲げ、 ・「自他を認め合う子供」<やさしく> ・「学びを活かせる子供」<かしく> ・「自分をより良くする子供」<たくましく> を目指し、児童の育成にあたっている。 課題と研究について 本校では、学校教育目標を具現化するために、校内研究を推進していく。 昨年度までは、研究主題を「健やかで たくましい 高瀬っ子の育成 ～自他の高まりを表現することを通して、学びの質を向上させる子供を目指して～」と設定し、体育の授業を中心に、「自分のめあてをもち、主体的に学び続ける姿」「自他の高まりを表現しながら、共に学び合う姿」を養ってきた。体育の研究授業では、仲間と関わりながら、主体的・対話的に学ぶ子どもたちの姿が多く見られ、体育における校内研究の成果として挙げられた。 本年度の研究の進め方を検討するため、昨年度末の研究全体会において、本校の子どもたちの実態を振り返ったところ、体育以外の他教科の学習においても、「粘り強く課題と向き合う力」や「相手に応じてわかりやすく表現する力」を伸ばしていきたいという意見が出た。また、体育の研究で積み重ねてきた授業づくりの成果を、他教科の授業づくりにも生かしていくための方法についても意見が出た。 そこで、今年度は、昨年度の研究をどの教科でも生かせるように研究主題を設定し、体育の授業に特化するのではなく、学年部ごとに様々な教科を設定し、実践を通して、子どもたちの課題解決を目指していく。 授業づくりについて 「主体性」と「関わり」を中心に子どもの姿を見とり、子どもの姿を通して授業づくりを進める。授業づくりの際は、目指す子どもの姿を念頭に置きながら子どもの実態をとらえ、主体的に学ぶための教師の様々な支援、単元構成や場の設定等の工夫について探っていく。また、必要感のある子ども同士の関わり方を探る。それらによって、子どもの学びがさらに深まるようにする。 これまでの成果と課題を踏まえ、目指す子どもの姿を次のように設定する。 ○課題解決へ向け、粘り強く取り組む子ども ○相手に応じてわかりやすく表現できる子ども 目指す子どもの姿にせまるために、今年度は各学年部で教科を設定し、昨年度までの成果の積み重ねとともに、子どもたちの課題解決のための授業実践をしていく。		

研究 の 内 容	(1) 授業実践 <授業づくりの柱> 目指す子どもの姿を念頭に置きながら子どもの実態をとらえ、仲間と関わり、主体的な学びのある授業づくりを行う。その上で教科の本質をとらえ、内容を吟味して授業づくりを行う。 ○子どもの課題に沿った課題づくり・単元構成の工夫 ○伝え合う場面の設定 ○表現の仕方の工夫 ○協働して学ぶ場面の設定 (2) 目指す子どもの姿の具体化 校内研究会で、「授業で大切にしたい子どもの姿」について学年部で語り合い、そこから全職員で目指す子どもの姿についての共通理解を図っていく。そして、その姿が達成されるような課題を作り、手立てをとって授業づくりを進めていく。また、「授業で大切にしたい子どもの姿」については、授業研究会で確認し、加除修正しながら完成させていく。
研究 の 方 法	授業研の進め方 <pre> graph LR A[低・中・高（支援学級は関わりのある学年に参加）で教科を設定し、各学年で事前研をする。領域などを統一し、教科の系統性やそれに伴う子どもの育ちをみる。] --> B[①指導主事を招いての授業研（大研） ②指導主事を招かずに、前者の受けた指導を生かしての授業研（中研）] B --> C[研究授業は全員で参観し、全員で事後研修を行う] </pre> 第1回授業研…… 6月19日（木） 6年（算数） 以降は2学期実施 ○ 全学年で授業研究を行い、子どもの姿を通し研修を積み重ねていく。 ○ 単元を通して目指す「主体的・対話的で深い学び」のある姿について具現化し、授業づくりの視点としていく。 ○ 事前研究会の充実を図る。その際、授業の視点を明らかにして検討し合う。 また、事前研のメンバー以外にも授業研前後の授業を見合い、子どもの変容を見取る等、全員で授業をつくっていく。 ○ 授業では、子どものつぶやきや表情、行動や変容、関わりの中から出た言葉など、子どもの姿から学ぶようにする。 ○ 事後研究会では、授業の視点に沿って話し合っていく。 また、成果と課題を明らかにして、授業者も参加者も次の授業づくりに生かせるものになるよう検討していく。

学 校 名	山形市立山寺小中学校 山形市大字山寺 1 6 5 0 0 2 3 - 6 9 5 - 2 0 4 4	校 長	武田 裕子
		研究主任	神保 幸恵（小） 後藤 岬（中）
研 究 主 題	社会で通用する自立した個の力を備えた児童生徒の育成 ～自己調整力を育むカリキュラムマネジメント～（3年次）		
研 究 主 題 設 定 の 理 由	山寺小学校は全学年が完全複式学級、特別支援学級 2 学級の 5 学級で学習している。また、今年度は中学 1・2 年生も複式学級となった。複式学級や少人数での授業には、異学年の交流が生まれたり教師が一人一人に丁寧に関わったりするというよさがある一方で、多様な考えによる思考の広がりや深まりはなかなか見られないという課題がある。また、児童生徒においては人間関係の固定化による弊害も否めない。 研究主題は、本校の現状を踏まえ、児童生徒が 9 年後に山寺からもっと広い社会に巣立っていくとき、生き生きと自信を持って自分の考えを表現し、多様な人と関わりながら生きていくことができる子供たちであってほしいと考え設定した。「社会に通用する自立した個の力」とは、誰とでも協力できる力、いじめをしないたくましさ、少し難しいことにも挑戦できる力であると考えている。本研究を通して自らの将来の生き方を考えさせながら、主体的に社会の形成に参画する意欲と態度を備えた児童生徒、そして、自分自身を振り返って新たな課題を見つけ、その解決に向けて見通しを立てて行動できる児童生徒を育てたい。 一昨年度は、観光地山寺の豊富な学習材を生かすことができるもの、そして、実際の社会生活につながり、日々の授業とその学びを生かしながら小中が共通して取り組むことができるものは総合的な学習であると考え、全学年が総合的な学習を軸にカリキュラムマネジメント表を作成した。昨年度は、カリキュラムマネジメント表をさらに充実させ、全教職員で共有したことにより、児童生徒の活動を全教員が把握し指導にあたることができた。また、全学年が同日に総合的な活動を行う「1 日生活総合 DAY」を実施したことで、学年を超えて関わったり学び合ったりする姿が見られた。 今年度は、昨年度までに作成したカリキュラムマネジメント表を活用し、各教科と総合とのさらなる連携を検討する。また、昨年度課題として残った「評価のあり方」について研修を深める。さらに、児童生徒が自分の学びを表出し、社会で通用する力を身に付けられるよう、「子供が主体的に学びに向かえる教室の環境整備」についても研究する。		
研 究 の 目 標	学校教育目標『郷土「山寺」を愛し、社会に役立つ人間の育成』 重点目標 「考える子ども」「助け合う子ども」「たくましい子ども」 日々の授業とその学びを活用した総合的な学習（校内研究）を通して目標の達成に迫る。		

研究の内容	① 子供の実態を語り、めざす子供像を共通理解していく。 ② 「自己調整力」「個別最適な学び」をどのように実現していくことができるかを学習の個性化という視点で日々の授業で検証し、共有していく。 ③ 総合的な学習を中心とした社会とのつながりを通して、９年間でどのように自己調整力（失敗から学ぶ力・自治力・振り返る力・表現する力）を育てていくのかを系統立てて考え、実践しながら、さらなる学習意欲を持てるような活動の在り方を探る。
研究の方法	① 目指す子供の姿を明確にし、自己調整力を育むための９年間を見通したカリキュラムマネジメント表を作成し、実践しながら評価・改善を加え、より効果的な指導や支援を行っていく。 ② 「自己調整力」「個別最適な学び」についての研修をし、本校ではどのように具現化していくか、日々の授業を通して検証していく。また、積極的に校外の研修に参加し、学んだことを職員会議等で報告していく。<u>今年度は特に「子供が主体的に学びに向かえる教室の環境整備」に力を入れる。</u> ③ 今年度は小学生が「１日生活総合DAY」、中学生が「Yamadera Welcoming Tour」を計画、実施する。 ・「１日生活総合DAY」では、これまでの総合的な学習の学びを発表したり、学びを活用して企画を行ったりする。さらには地域の方から協力していただき、学びを深められるような活動を行う。日程は各学年裁量で、子供たち自身の必要性が高まった時期に設定する。 ・「Yamadera Welcoming Tour」では、相手を想定してガイド文や資料の事前準備を行ったり、山寺についてこれまで学んできたことを外国の方に英語で伝えたりする。実践の中で得られた学び、見えた課題を子供たちと共有し、日々の授業や将来の進路決定につなげていく。 ③ 子供たちが適切な自己評価と自己調整ができるようにするため、また、教員が適切に子供を見取る力をつけるために「評価のあり方」について研修を深める。
研究の計画	①カリキュラムマネジメント表の活用、評価、改善 ①校内研修会 （山形大学名誉教授中井義時氏を講師とした「カリキュラムマネジメント」に関わる研修） ①②小中教員の連携強化（共同教材研究、子供達の姿の共有など） ②県内外研修報告 ③校内研修会（山形大学井上敦夫氏を講師とした総合的な学習に関わる研修） 児童生徒向け総合オリエンテーションにおける目標と目指す子供の資質能力の共有 ③小学校は「１日総合DAY」（～１１月）、中学校は「Yamadera Welcoming Tour」（１０月１５日）の計画、実施、評価

<様式>

学 校 名	山形市立東沢小学校 山形市防原町4-15 TEL 629-2119 Fax 629-2907	校 長	三木 弥生
		研究主任	寒河江 ふみ子
研 究 主 題	全職員が全児童を支える学校をめざして ～ 「チームとしての学校」の可能性を探る ～ (一年次)		
研 究 主 題 設 定 の 理 由	(1)今日的教育課題から これからの社会の担い手である子どもたちには、多様な他者と協働しながら課題解決していくことが求められる。 文部科学省においては、令和3年1月の中央教育審議会答申(「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～)を受けて教科担任制を導入することとしており、小学校高学年にとどまらず中学年にも拡大するよう推進している。 山形県では令和7年度から「第7次山形県教育振興計画」がスタートし、人口減少の加速化やグローバル化の進展等に加え、超スマート社会の到来、ウェルビーイングの重視が謳われており、学校教育もそれらに対応する形で変化していくことを求めている。現在の学校では、これまでの個々の教員の経験や知識だけでは対応しきれず、この状況の解決には教職員が組織的な協働を一層重視していく必要がある。 また、一人の教員が担任として責任をもって一つの学級を運営する形態から、「チーム担任制」「複数担任制」「教科担任制」など担任を固定しない方法に移行する学校が少しずつ増えている。このことは、チームで業務にあたることによって、より高い質の教育を受けられる環境を整えようという考えに基づくものである。 (2)学校教育目標の実現を目指して 誇りと夢をもち 未来をひらく たくましい「雁戸の子」を育てる 本校では、この学校教育目標のもと、今年度の重点を *子どもが主体性を発揮できる学校 *全職員が全児童を支える学校 として、今年度より「教科担任制」「ローテーション担任制」を実施する。 校内研究では、これらの方針に基づき研究を推進していく。ここでいう児童の主体性とは、自主性に加えて、自分(たち)の生活を自分事として考え、作り出していくことまで含めたものである。よって、「チームとしての学校」の仕組みを整え、児童が安心して学び合い、自ら動く環境をつくりたい。 (3)学校の実態から 令和6年度まで9年間にわたり「主体的に考え、学び合う子供の育成 ～他者とかかわりながら自ら学ぶ授業をめざして～」とし、「相手の考えを認め、自分の思いを表現する双方向の力」を高めてい		

	くことを目指して授業改善に取り組んできた。授業改善研究については一定の成果をあげてきたと捉えている。 一方、課題としては、児童と児童、児童と教員の人間関係が限定されてしまうことによる広がりへの乏しさがあげられる。また、教員の専門性が発揮される場面が限定してしまうこと、さらに、単学級でありながら児童数が30名前後の学級では、学級担任の業務量が多く、他の職員と連携する余裕がないのが実情であった。それぞれが自分の学級の業務に追われ、他学級の経営について学び合える精神的・時間的余裕がもてないことは、大きな損失である。職員同士が学年を超えて学び合ったり、児童の成長を語り合ったりすることで学校全体が活性化されることを望んでいる。 私たちは、これらをさらなる学校経営改善の視点とし、在籍する児童全員に、東沢小学校ができる得る一番高い質の教育を提供するための体制づくりを模索していくことが必要であると考えた。本校でも、ベテラン教員の退職に伴う若手教員や臨時講師の増加の時代がやってくる。教員個々の強みを生かした組織的な対応を可能にする仕組みづくりを目指したいと考えた。 以上が本主題設定の理由である。新しい学校の仕組みづくりに挑戦し、上記のような学校としての課題を解決するため研究を進めていく。
研究主題について	「全職員が全児童を支える」とは… 本校では、職員が児童を支えることを「児童をよく理解し、児童の求めていることを把握し、自己選択・自己決定できるよう支援すること」と捉えている。授業でも生活でも、自らの課題を「わかること・できること」「わからないこと・できないこと」を捉え、他者に伝えたり助けを求めたりすることが大切だと児童も教師も理解していることが必要である。 知識及び技術の習得や活用の喜び、充実感を味わう活動を充実することを目指すためには、学級集団を安心して学べる居場所にしていきたい。一方で、様々な生徒指導上の課題が早期化して、中学校からではなく小学校中学年からの対応が必要となっていることに関しては、本校も例外ではない。児童の価値観の多様化やインクルーシブ教育の必要性も考え合わせると、学級担任だけではなく複数の教員が関わり育てていくことが重要であると考ええる。 学習指導や担任として、複数の教員が児童に関わり支えることのできる仕組み・学校づくりを行うことで、多面的な児童理解が可能になる。そして、このことが児童の心の安定につながり、学校生活全般において、児童が主体的に力を発揮していくことにつながっていくと考える。
研究の内容	(1) 学びの質の向上を目指す教科担任制 ・ 1, 2年ブロックでの交換授業 ・ 3～6年ブロックでの教科担任制 ・ 教員の専門性を発揮した教科の系統的な指導（年間指導計画の作成） ・ 教材研究の焦点化による教員の負担軽減 (2) チームとしての学校の仕組みづくり ・ 主となる担任とローテーション担任との業務の整理 ・ 児童の混乱を軽減する指導の統一（学習・生活） ・ 教室管理消耗品などの環境の統一 (3) 多面的な児童理解のための情報共有 ・ 児童の変化や課題の把握のための情報共有方法 ・ 心身の健康状態の把握のための情報共有方法

研究の方法

(1)先行実施校に学ぶ研修会

本校と同じような規模で、令和5年度から「チーム担任制」「教科担任制」を取り入れている兵庫県稲美町立加古小学校元校長吉田博明氏に指導を依頼する。加古小学校の取り組みを参考に、東沢小学校の仕組みを整えていく。

(2)実施と振り返りのくり返しによるアップデート

P D C Aサイクルを回し、やってみてうまくいかないことは改善案を出してより良い仕組みを整える。また、児童、保護者、教員などそれぞれの立場におけるアンケートを定期的の実施し、学校体制づくりに生かす。保護者には、参観日や学校だよりで情報を発信していく。

(3)山形市教育委員会委嘱研究校としての情報発信

山形市教育委員会の指導・助言をいただき、本校の試行錯誤を市内各小中学校に発信していく。年3回の研究会を開き、他校の先生方とも情報を共有できるようにする。

研究組織図

研究推進委員会	
【校 長】	三木弥生
【教 頭】	永見恵理子(渉外)
【教務主任】	五十嵐勝博(日程調整)
【研究主任】	寒河江ふみ子(統括)
【副主任】	高橋淳子(アンケート)
【学年部代表】	〈1,2学年部〉 寒河江ふみ子 〈3～6学年部〉 川合智子(児童の様子把握) 〈支援〉 高橋淳子

	1, 2 学年部	3 ～ 6 学年部
生き方指導部	田中・奥山	川合・山崎・佐藤祐
学習指導部	今川・寒河江・大坂	佐藤史・高橋
担 外	永見	五十嵐

研究の計画

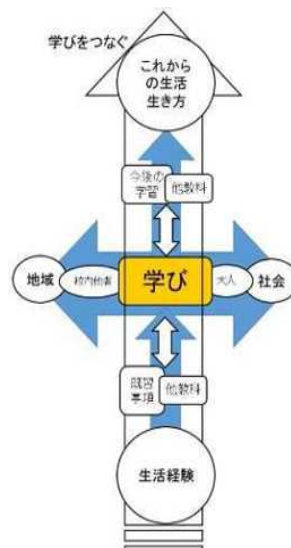
月	日	活 動 内 容
4	24 随時	簡易研究推進委員会 市教育委員会との打ち合わせ ローテーション担任・教科担任打ち合わせ
5	12 14 19 下旬	研究推進委員会（研究概要の確認・第1回研究会において） 研究全体会（研究概要の確認） 第1回市委嘱研究会（オンライン） ＜講話 元加古小学校校長 吉田博明氏＞ 児童アンケート①（3～6年）
6		研究全体会（これまでの成果と検討課題） 研究推進委員会（全体会を受けて・第2回研究会において）
7	29	児童アンケート②（全校） 研究推進委員会（全体会において） 研究全体会（第2回研究会の確認・これまでのまとめ） 第2回市委嘱研究会（オンライン） ＜講話またはワークショップ＞
8		研究全体会（2学期に向けた調整）
9	下旬	児童アンケート③ 保護者アンケート①
10		研究推進委員会（第3回研究会において）
11	下旬	研究全体会（第3回研究会において） 研究推進委員会（全体会を受けて） 児童アンケート④
12	10	第3回市委嘱研究会（参集型） ＜これまでの取り組みの紹介＞
1		今年度の研究についてのアンケート（職員）
2		保護者アンケート②（学校評価に含む） 児童アンケート⑤ 研究推進委員会（今年度のまとめ・次年度の方向性について） 研究全体会（今年度のまとめ・次年度の方向性の確認）
3		研究推進委員会（全体会を受けて） 研究報告完成・提出

<様式>

学 校 名	山形市立滝山小学校 山形市小立四丁目 1 3 - 8 6 Tel 631-2248 FAX 631-9034	校 長	大城 勝利
		研究主任	中村 高太郎
研 究 主 題	自ら 学びをつないでいく子ども(2年次)		
研 究 主 題 設 定 の 理 由	令和6年度は、研究主題『自ら 学びをつないでいく子ども(1年次)』のもと、育成したい資質・能力を意識したカリキュラム・デザインや単元構成、日々の授業における学びのプロセスを大切に授業改善に取り組んできた。それぞれの学年らしさを生かした生活科・総合的な学習の時間の授業づくりをしたことで、より具体的な「学びをつなぐ」ための様々な手立て、それぞれの発達段階にあった学びをつなぐためのアプローチの仕方があることが見えてきた。 既習事項、生活経験などとの関連は、児童・教師共に意識することができた一方で、次の単元の学習や他教科での学習へ児童自らが学びをつないでいく難しさがあった。単元や領域のつながりを捉えたり、学び得たものの見方や考え方を他のことに生かしたりすることができる子どもを育成するには、児童が学びをつないでいくために必要な資質・能力を明らかにし、それにふさわしい手立てを考え、継続して取り組んでいくことが重要であると考え。そこで、今年度は昨年度の校内研究の成果や課題を踏まえ、生活科・総合的な学習の時間を中軸に据えながら、「次の単元や他教科の学習へ」身につけた資質・能力を汎用的に活用できる力の育成を目指し、その効果的な方法についてカリキュラム全体で考えていけるよう、主題を設定した。		
研 究 の 目 標	今年度の学校経営テーマである『子どもが学びの主体となり、みんなが笑顔の学校をつくる』ためには、児童の実態を踏まえ、学年の児童に必要な資質・能力を明らかにして教育活動を進めていくことが不可欠である。特定の教科や単元だけでなく、教科横断的な視点のもと、生活科や総合的な学習の時間を中心としたカリキュラム・マネジメントを充実させていくことで、これまでよりも更に効果的に資質・能力を高めていくことができるのではないかと考える。そして、生活科・総合的な学習の時間では、子どもの関心や課題意識を起点とし、地域や故郷に目を向けることで改めてその良さを発見したり、協働的に探究することで学びを深めていったりする姿を目指していく。様々な人、もの、環境の中で学びをつないでいくことが、本校の学校教育目標である『ゆたかな心で自ら学ぶたくましい子どもの育成』につながると考える。		

研究の内容

自ら学びをつないでいくためには、学びを子どもの生活と結び付けていくことが必要である。子ども達が自分の生活の中で学ぶ必要感を感じたり、「学びたい」「できるようになりたい」「うまくいくために何とかしたい。」と学びに対する意欲や思いを持ったりすることで、学びが子どもの生活に結びついていくと考える。また、身につけた力や得てきた学びを必要に応じて自在に引き出し、生活科や総合的な学習はもちろん、他教科・他の学習活動でも汎用的に活用していくことができるようにするため、子ども達が自ら学びをつないでいくにふさわしい環境を整えることや深い学びへ導く寄り添い方を考えていく。これらを具現化できるよう、今年度はカリキュラムデザイン、単元構成、日々の授業において以下のことを共有し、大切にしながら研究を進めていく。



1 カリキュラムデザインにおいて

- ・児童が学びをつないでいくために必要な資質・能力は何かを見極め、育成したい資質・能力を明確に持つ。
- ・生活科・総合的な学習の時間を中軸にして、その学年で育成を図る資質・能力を高めていけるようなカリキュラムデザインを行う。

2 単元構成において

- ・子どもの思いを大切にしながら単元を構成する。教師側のねらいや意図は持ちつつ、学習過程の中での子どもの気づきや課題意識を吸い上げ、意欲や探究心が持続していくように人・もの・こと（ホンモノ）との出会わせ方やタイミングを工夫していく。
- ・「課題設定→情報収集→整理分析→まとめ・表現→ふりかえり・改善」の探究の過程を経由しながら、そのプロセスが何度も繰り返されるように単元を構成していく。

3 日々の授業において

- ・今の学習が、単元の中でどのように位置づけられているのかを押さえる。
- ・前後の学習とのつながりやその時間のねらいを意識して授業づくりを行う。

研究の方法

- (1) カリキュラムマネジメントの中軸に生活科と総合的な学習の時間を置く。
- (2) 学年の共同研究とし、学年の児童に必要な資質・能力を明らかにして研究を進める。資質・能力を育成するために効果的な支援や手立てを決め、年間を通じて実践を積み重ねていく。（どの教科・学習場面においても、設定した資質・能力の育成をねらっていく。）
- (3) 研究授業は小研・大研を設定する。大研は学年部から1名、その他を小研とする。特別支援学級については、今年度大研としては公開せず、小研の形をとる。
- (4) 事後研では、子どもの姿から学びを丁寧に見取っていく。実際の児童の行動や発言、表出したものから思考の流れを汲み取り、どこにその児童の学びがあったか、カリキュラムマネジメント表で設定した資質・能力の育成に迫っていたか、本時のねらいに迫っていたか等について協議していく。
- (5) 年度初め、学期終わり、年度末に定期的に学年カリ・マネ会やカリ・マネ振り返りの時間を設定することで、継続的にカリ・マネの見直しを行い、修正や相談を行いながらカリ・マネが実際の教育活動に活用されるようにしていく。

研究の計画

4/16(水)	研究全体会①	12/3(水)	大研③(年)
5/1(木)	カリキュラムマネジメント研修会	12/24(水)	研究全体会③ カリキュラムマネジメント研修会
8/4(月)	研究全体会② カリキュラムマネジメント研修会	2/25(水)	研究全体会④
9/17(水)	大研①(年)	3/4(水)	カリキュラムマネジメント研修会
11/5(水)	大研②(年)		

<様式>

学 校 名	山形市立桜田小学校 山形市桜田東1丁目1-30 Tel 624-5083 Fax 633-9794	校 長	須藤 克郎
		研究主任	小笠原 恵
研 究 主 題	仲間とともに学びを創る子供の育成(一年次)		
研 究 主 題 設 定 の 理 由	本校の学校教育目標は、「未来をひらく、英知と力のある子供の育成」である。「未来をひらく、英知と力」のある姿を下記のように考える。 情報化やグローバル化等によって激しく変化する時代の中で、多様な価値観が混在する社会を自分らしく生きるために、諸問題を他者と協働しながら柔軟な発想で解決していく姿。 学校教育目標を具現化するために、学校生活の中で生じる課題を自分事として捉えて、他者と協働して解決していくことや、互いを認め合いながら生活する経験を重ねていくことが重要である。昨年までの研究「自己の学びを創り上げていく子供の育成」では、対話を重視して研究を進めてきた。その結果、次のようなことが見えてきた。 ・ 友達の考えを共感的に受け止めたり比較したりしながら聞き、考えや視野を広げることができ、学びにつながっていた。 ・ 相手意識をもって話をしようとする態度が身に付いてきた。 ・ CCTなどの時間を通し、子供たちが多様な友達と関わったり他者理解を深めたりできるように取り組んできた。活動を重ねることで、上手に関われるようになった。 ・ 相手の考えを受け入れる姿勢は育ったが、深い学びや議論に発展させることには課題が残る。活動から分かったことをもとに課題を設定したり、失敗したときにどのようにすれば上手くいくかを考えて学びを調整したりする力はもっと育てたい。 ・ 「相手に自分の思いや考えを伝える力」や「協働的な学びや生活を行うためのコミュニケーション力」を伸ばしていきたい。 上記の課題からも見えてきたように、本校の児童は、教わったことを素直に聞き入れたり、成功体験を次に生かそうとしたりする力をもっているように思う。一方で、言われないと取り組まないという受け身の姿勢が見られたり、あいさつや言葉でのやり取りは促さないと行わなかったりする児童がいることも事実である。そうした課題を、教職員全体で見つめ直し、解決していきたいと考えた。子供たちが自己の学びを深めることはもちろんのこと、友達と学ぶ楽しさ・面白さ・達成感・満足感を感じながら「協働的に学ぶ力」を育みたい。そこで、今年度は、研究主題を「仲間とともに学びを創る子供の育成」と設定し、学校教育目標の具現化を目指していく。なお、「仲間とともに学びを創る子供」は、以下のような子供と考える。 ●仲間から学ぼうとする子供 【仲間から学ぶ】 ●仲間に寄り添い、支えようとする子供 【仲間と学ぶ】 ●仲間と一緒に学びを広げたり深めたりする子供 【仲間と広げる】 教師の授業の転換を図り、子供たちが「学び方を知り」、「子供たちによる学び合い」が実現する授業づくりを心掛けたい。		

研究の目標

学級全体、また、小グループでの学習活動を通して仲間とともに学ぶ楽しさや面白さに気づき、自己の学びを創る子供を育成するための、学習指導のあり方を実践研究する。

研究の内容

○「仲間とともに学びを創る子供」について

「研究主題設定の理由」でも述べた通り、「仲間とともに学びを創る子供」とは、

- | | |
|------------------------|----------|
| ●仲間から学ぼうとする子供 | 【仲間から学ぶ】 |
| ●仲間に寄り添い、支えようとする子供 | 【仲間と学ぶ】 |
| ●仲間と一緒に学びを広げたり深めたりする子供 | 【仲間と広げる】 |

と考える。子供たちの学びの価値観は、その学級・学校の日頃の活動、毎日の教師の関わりの蓄積によって少しずつ育っていく。自分と異なる考えをもっている人がいても、他者を尊重し、その教科の見方・考え方を働かせて話し合うことが重要だと、教師が感じて伝えていくことが大切になる。子供たちが、「仲間に頼って良い」「仲間から学ぶことで豊かになれる」と感じられるよう、教師は働きかけていきたい。

また、教師は、多様な考えが生まれる課題、考えたくなる課題の提示を工夫したり、考えることを焦点化したりするなど、授業づくりを工夫していく必要がある。そして、子供たちが「学び方を知り」、「子供たちによる学び合い」が実現する授業づくりをしたい。

「仲間とともに学びを創る子供の育成」の実現に向けた具体的な取り組みとして、下記のような取り組みができるのではないかと考えた。

●「仲間から学ぶ授業実践」

- ・友達の発表を聞く。(ペア、グループ、全体)
- ・友達の作品を観察、鑑賞
- ・ヒント屋(ミニ先生)の活用
- ・ICTの活用(まなびポケット「気づきメモ」での発言を見合う、友達が作成した「パワーポイント」を見るなど)

●「仲間と学ぶ授業実践」

- ・意見交換や発表(ペア、グループ、全体)
- ・友達の発表や作品について感想を述べたり、質問をしたりする。
- ・ヒント屋(ミニ先生)の活用
- ・グループ単位で学習を進める
- ・ICTの活用(1つの資料を分担して作成するなど)

●「仲間と広げる授業実践」

- ・友達と考えを伝え合う、説明し合う(ペア、グループ、全体)
- ・新たな考え、少数派の考えを取り上げる。(教師主導もあり)
- ・「さらに」「もっと」の追求
- ・ICT、ホワイトボード、付箋、思考ツールの活用(まとめる、広げる、整理するなど)
- ・グループ単位で学習を進める

上記の取り組み例は、ほんの一部に過ぎないため、日々の実践を重ねながら、「仲間とともに学びを創る子供」を探っていけるとよい。今年度は研究1年次ということで、主題の意味を広く捉え、様々なアプローチで目指す子供像に迫っていきたい。

○ 研究の運営について

(1) 研究授業

○研究教科

- ・学年、または、学年部で教科を決めて行う。

○事前研・事後研

- ・学年や学年部をもとに事前研を行い、授業を提案する。事後研究会では児童の姿や視点に沿った協議を行い、手立てが有効だったかを検証する。

- ・**小研**：各学級1実践。事前研は学年で、授業参観と事後研は学年部＋希望者で行う。

- ・**大研**：事前研は学年部で行う。参観と事後研は全体で行い、事後研はワークショップ形式とする。

事後研には指導主事を招聘し、指導・講評をいただく。

- ・授業記録や子供の様子は、視点に沿って各自でメモを取る。
- ・授業後一ヶ月以内に「事後研だより」を発行し、全職員に配付し、成果と課題を共有する。

○学年部ごとに目指す子供の姿の設定

○活動案の形式（別紙参照）

- ・A4両面2枚程度に収まるようにする。資料があれば付けてよい。座席表も用意する。

○データの保管

- ・作成したデータは、◎指導部会→学習研究部→校内研究のフォルダに保存する。

(2) 「学級の時間」の活用

- ・CCTや「聞く」ことを意識した活動を通して、コミュニケーション力の向上を目指す。

(3) 全体研修会

○講師による研修会

- ・講師を招聘して授業づくりや改善、学級経営等に関する理論や実践についての研修会を行う。

○OJT

- ・職員間での研修を通して、教師としての知識や技術を高める。

(4) 日々の実践

- ・落ち着いた雰囲気や学習に臨む態度の育成、子供同士のやり取りを大切に授業の展開、子供たちに学びを委ねることへの挑戦

(5) 研究推進便り「TeamSakurada」の発行

- ・学級経営や授業作りの取り組み、OJTの内容を全体で共有するために、研究推進便りを発行する。

(6) 研究のまとめ

- ・各自、活動案や事後研究だよりをファイリングしていく。保管用・提出用として15冊程度作成するので、活動案や事後研だよりは、職員配布分とは別に、15部小笠原に提出する。

○ 学級経営に関すること

- ・教師は、子供一人一人を大事にした学級経営を行い、児童理解を深める。
- ・教育活動全体を通して、子供が互いに認め合うことのできる学級づくりを進める。
- ・教師は、学級や学年だけではなく多くの子供の様子を観察し、縦割り活動等の教育活動を通して児童理解を深めていく。そして、教員間で情報交換を行い、学級経営に生かしていく。
- ・他者を思いやる心や規範意識を育む道德教育の推進を行う。
- ・他者と関わる力や人間関係を結ぶ授業実践を行う。
- ・児童理解に努め、子供の実態を見極め、来年度以降の校内研究の方法を探る。

研究
の
計
画

研究年次	主な研究内容
第 1 年次 (令和 7 年度)	【研究主題】 仲間とともに学びを創る子供の育成 友達と学ぶ楽しさ・面白さ・達成感・満足感を感じながら「協働的に学ぶ力」を育む。

○年間計画

- | | |
|-------|--|
| 4 月 | 研究推進委員会 |
| 5 月 | 研究全体会
授業実践（各学級 1 実践公開）、実践報告書 ～ 1 月
O J T ～ 1 2 月 |
| 7 月 | 研究全体会（1 学期の振り返り・課題の意識）または、全体研修会
講師を招いての研修会 |
| 1 2 月 | 研究全体会（2 学期の振り返り・課題の意識）または、全体研修会 |
| 1 月 | 学年・学年部による研究実践のまとめ、次年度に向けて協議 |
| 2 月 | 研究全体会（次年度に向けて） |
| 3 月 | 次年度の研究の方向性の決定 |

研究主題・副題

“まわり” とつながり、自ら学ぶ子どもの育成 ～「見通し」「実行し」「ふり返る」サイクルを意識した授業づくり～

1 主題設定の理由

社会的な背景から

グローバル化は我々の社会に多様性をもたらし、急速な情報化や技術革新は人間生活を質的に変化させつつある。1、2年先でも予測困難で先行き不透明な激動の時代といわれている。こうした変わりゆく社会に主体的に対応していくためには、生涯学び続けることが必要不可欠である。学齢が上がるに伴い、学習者自身が自ら学ぶべき内容や方法を選んでいく機会が増えていく。そこで、今の自分に必要な知識や技能は何かを判断し、効果的な学習方法を選択して学んでいく「自立した学習者」として学ぶ力を育成していくことが必要であると考え。これからの学校では、自立的な生活習慣と自主的な学習習慣の形成、そして生涯求められる自己学習能力の育成がますます重要な課題となっている。

子ども達の実態から（昨年度末の反省より）

学習に限らず学校生活の中で人任せな姿勢や、ルールを守ろうとする意識が薄く、「自分だけじゃないから」「他の人もやっているから」など、周囲に流され「自分はどうか」「自分はどうなりたいのか」という思いがもてない児童の実態が見えてきた。日常的に自分で判断し、自己決定、自己選択の機会を意図的に設けていくことで、児童の変容が見えてくると考えられる。また、学習に対する前向きな姿勢の高まりなども期待できると考えた。そこで、令和6年度まで研究の主体となってきた「協働的な学び」に加え、「個別最適な学び」を効果的に取り入れ、一体的な充実を図っていく。

2 主題と副題について

主題にある“まわり”とは、「人（仲間や教師、地域の先生など）・もの（教材や資料など）・こと（既習事項や今までの経験など）」を指す。「自立した学習者」の理想の姿は、1人きりで黙々と課題解決に向かうような姿ではなく、「分かった」「できた」が達成されるよう、どうしたら「分かるか」「できるか」を考え、あらゆる“まわり”とつながりながら問題解決に立ち向かう姿と考えられる。そのために“まわり”とつながることのよさを実感し、授業中に限らず、学級活動や児童会活動、行事等の特別活動、普段の生活全般の中でもそれを生かそうとする子どもの姿を目指していきたい。

副題を「見通し」「実行し」「ふり返る」サイクルを意識した授業づくりとした。これは、「見通し」「実行し（行動）」「ふり返る」サイクル＝AARサイクルといわれている。

AARサイクルとは以下の通りである。

A→Anticipation（見通す）

今からとらうとしている行動が、どのような帰結をもたらすのかということを意識して考えること

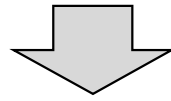
A→Action（行動）

「見通し」の段階を経て、本来の目的に沿って「行動」が行われること

R→Reflection（ふり返る）

自分自身や他者の行動を客観的に評価することで、将来の行動の改善につなげていくこと。
学習者が継続的に思考を改善し、意図的かつ責任ある形で行動することができるような反復的な
プロセス

OECD Education2030 プロジェクトが描く教育の未来より



さらに分かりやすくいうと…

ある程度の「見通し」が立ったら、まず「実行（行動）」してみて、それを「ふり返り」ながら修正し、
進化していくこと。

※特に修正しながら進化させていくことが重要である。

常に AAR サイクルの視点で、日々の授業や学級活動や児童会活動、行事等の特別活動、普段の生活全般の中で、子ども自身が「見通し」「実行し」「ふり返る」ことのよさを次第に実感し、日常化していくことを目指していきたい。

以上のように「見通し」「実行し」「ふり返る」ことを継続、日常化していくこと、そして、“まわり”とつながることで「問題を解決できた！」という実感の伴った経験を積み重ねていくことが、私たちが目指そうとする子どもの育成につながると考えた。

3 協働的な学びと個別最適な学びの一体的な充実

・「協働的な学び」

→探究的な学習や体験活動などを通じ、多様な他者と協働しながら学びを進めていく。一人ひとりのよい点や可能性を生かすことで、異なる考え方が組み合わせられ、考えが深化するような、よりよい学びを生み出すことを目指す。

・「個別最適な学び」

→子ども一人ひとりに対する「個に応じた指導」（指導の個別化と学習の個性化）を学習者の視点から整理した概念である。子どもたち自身が自分の学びを自分で調整しながら学習を進めていく。

4 単元・授業づくりの視点

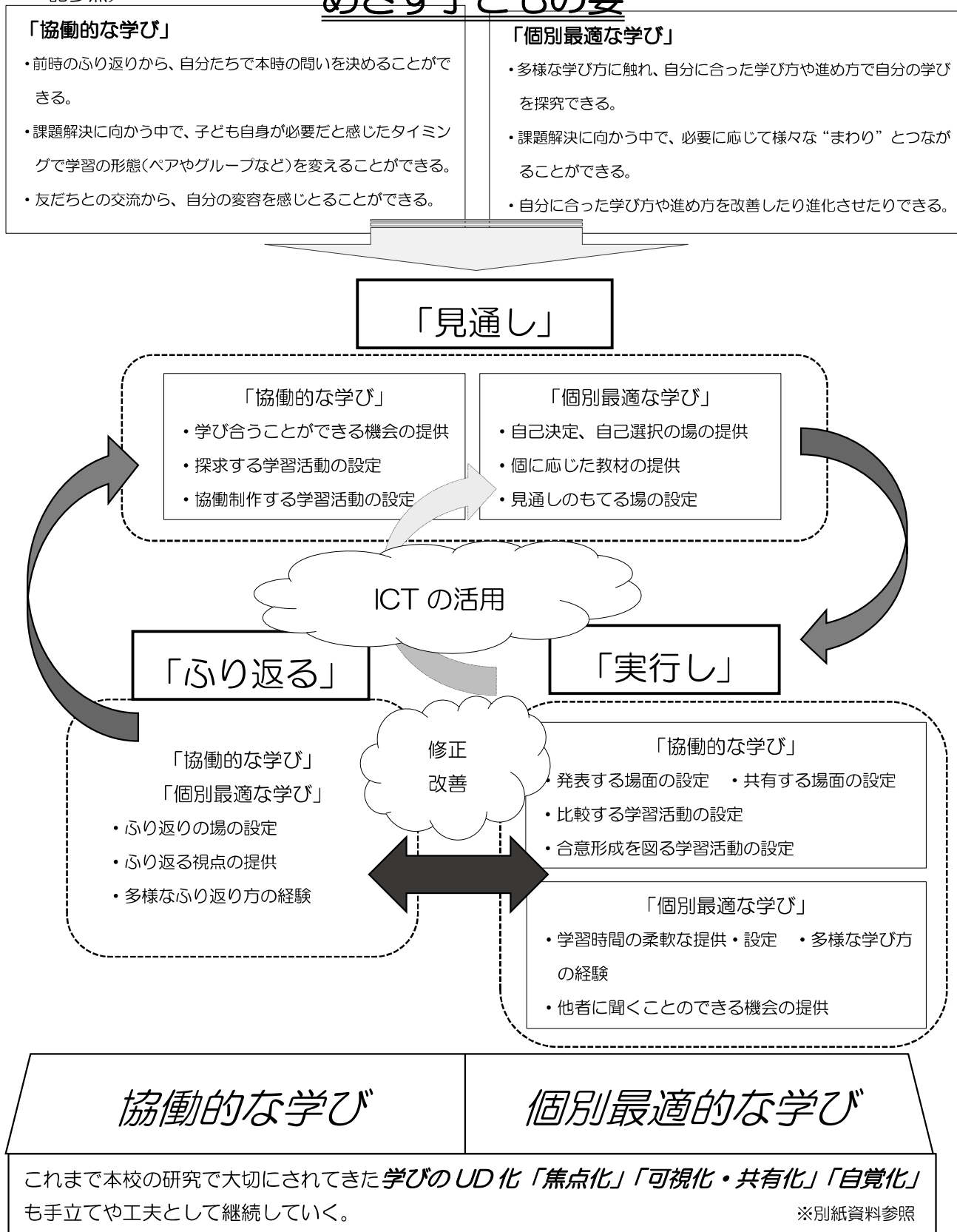
「協働的な学び」と「個別最適化な学び」の一体的な充実

○教科や単元の中で、学習内容の特性や子どもの実態に応じて「協働的」に学ぶことを重視するか、「個別」に学ぶことを重視するかをののか吟味していく。

○「協働的な学び」と「個別最適化な学び」とを往還する学習活動を展開する。

○「協働的な学び」と「個別最適化な学び」における「見通し」「実行し」「ふり返る」ための手立て（下記参照）

めざす子どもの姿



5 研究の方法

(1) 学校経営目標をうけ、学年研究日(毎週木曜日)に学年の授業リーダーを中心に単元構想や授業づくり、指導法・評価を研究し、学年カリキュラム・マネジメントを活用しながら、めざす子どもの姿に迫る。全体会・研究推進委員会・学年会・学年研究日で共通理解しながら、研究の日常化による授業改善を図っていく。

(2) 授業研究の進め方

①研究教科 全教科(めざす子どもの姿を各教科から探っていく)

②授業研究会・・・小研 一人1授業

中研 1授業

大研 1授業

※指導案の形式は全体会后、提案予定

※学年協同的な授業研究を目指し、学年カリキュラムに沿って、中核となる教科や関連する教科、単元を絞って研究を行う。

◇指導主事申請招聘・・・大研授業(中研は授業者の希望を聞く)

◇研究会参加・・・・・・・大研授業は全員参加

③事前研・事後研

◇事前研・・・小研は学年で行う。

中研、大研は、学年と研究推進委員を主とし、必要に応じて教科主任や授業者の希望する方を交えて行う。(2週間前までに)

◇事後研・・・めざす子どもの学びの姿について授業づくりの視点に沿って話し合う。小研は学年で、中研は事前研究を行った方と希望者で、大研は全員参加で検証していく。

研究授業を参観した際は、感想記入用紙を活用し授業者にフィードバックしていく。

(3) 「校内研究だより」を発行しながら、授業研究会の視点を明確にして共有化を図る。

「研究紀要」(授業研究会の成果と課題を含む)を作成し、授業を通した子どもの姿について、個々人で振り返る。

学びのUD化（焦点化・可視化・共有化）

○焦点化…授業のねらいを明確にし、単元や1時間の授業の進め方を工夫する。

- ・1単元、1時間の授業展開の構造化
（「見通し」「実行し」「ふり返る」サイクル）
- ・板書を分かりやすくする
- ・具体的な発問や問い返しの工夫

○視覚化…情報伝達の工夫として、視覚的な手がかりを効果的に活用する。

- ・前時の復習事項や、本時の学習に必要な情報を視覚提示
- ・挿絵や写真、動画、カード、図、色などでわかりやすく提示
- ・ICT機器の活用

○共有化…考えを友だちに伝えたり、話し合い活動をしたりして、様々な考えや学び方に触れる

- ・「協同的」な学習のよさを積み重ねる
- ・必要感のある学び合いの場の設定
- ・ICT機器の活用

<様式>

学 校 名	山形市立宮浦小学校 山形市宮浦17-3 TEL 645-1479 FAX 645-8346	校 長	結城 喜広
		研究主任	千場 一磨
研 究 主 題	自ら問いを持って考え、思いを伝え合う子供の育成（7年次） 重点「言語能力を育む授業づくり」		
研 究 主 題 設 定 の 理 由	本校の子供たちは、素直でエネルギーにあふれており、前向きに学習に向かおうとしている。その一方で、困難な課題にぶつかったとき、課題を自分事として捉え、前向きに取り組むことができないこともあり、粘り強さや自ら問いを持って考えようとする姿に課題があると考えられる。 少子高齢化やグローバル化等によって社会構造が多様化し、めまぐるしく変化する時代の中で、新たな課題に対して、既存の知識だけにとらわれることなく、他者と互いの思いや考えをすり合わせながら最適解を見つけていく、しなやかな生き方が必要となる。そこで重要となるのは、「自ら学ぼうとする意欲」であると考え。与えられた課題だけをこなしていくのではなく、「なぜだろう」「不思議だ」「調べたい」「解決したい」といった知的な探究心をもちながら生活できるような子供を育てていきたい。また、探究するには、他者の存在が不可欠であると考え。子供たち同士が互いに思いを伝え合い協働的に解決したり、互いを認め合いながら生活する経験を重ねていったりすることができるようにしていきたい。そこで、本校の研究主題を、昨年度に引き続き、「自ら問いを持って考え、思いを伝え合う子供の育成」とすることとした。受け身の姿勢で学ぶのではなく、自ら課題を見出し、その解決のために、習得した知識・技能を活かしながら思考し、協働的に学ぶ過程を大切にしたい授業づくりを行っていきたい。また、本研究主題は、学習指導要領が掲げる「主体的・対話的で深い学び」という授業改善の視点にも直結するものであると考え。学習指導要領の趣旨を十分に踏まえながら、育てたい資質・能力をより明確にし、授業力の向上に努めていきたい。		
研 究 の 重 点	言語能力を育む授業づくり 昨年度までの研究の重点は「資質能力を育む単元計画づくり」だった。3年間、子供たちに確かな資質・能力を育ていけるよう、単元などの内容のまとまりをきちんとデザインすることを意識して取り組んできた。本校が資質・能力として共通理解しているものは、学習の基盤となる「言語能力」「情報活用能力」「課題発見・解決能力」の3つの資質・能力に加えて、本校独自の「あきらめずに考える力」である。この4つの中でも、本校の子どもたちに最も必要な資質・能力は、「言語能力」であることを再確認した。そこで、今年度からの重点を「言語能力を育む授業づくり」と設定した。		

研究の内容・方法

1. 研究実践年間プランの作成

学級経営案及び教科の指導案としての性格を持ち合わせた、「研究実践年間プラン」の作成を行う。作成は学期ごとに行い、教育計画に位置づけていく。学級担任が、一年間で重点的に取り組みたい教科・領域を1つ決定し、育てたい資質・能力（言語能力は必須）を明確にしながら学級経営と単元計画を行う。基本的に個人で作成していくが、学年や学年部で検討する時間を設けるなど、複数人で取り組んでいく。また、研究実践年間プランの作成は、山形大学名誉教授である中井義時先生より専門的な指導を仰いでいく。子供たち同様、教職員も一人の学び手である。自己の課題を持ち、授業改善に意図的・計画的・継続的に取り組む「自律した学び」を行い、授業力の向上を図っていきたい。

2. 単元計画タイム（T タイム）の実施

会議のない金曜日の放課後 16:00 から 30 分程度を単元計画タイム（T タイム）として位置づけ、学年ごとに単元・授業について考える時間を設定する。日ごろ学級事務に追われがちな放課後の時間を、授業について語り合う時間としてきちんと確保することで、学年として計画的に子供たちを育てていきたい。また、ベテラン教員からすぐれた教育技術を継承する場としても活用されていくことを期待している。

3. 授業研究会の実施

授業の提案（小研）は、すべての学級が行う。授業づくり等は、基本的に学年で進めていくが、学年部で進めたり、同じ教科を研究している者同士で進めたりするなど柔軟に対応する。単元デザイン表に加え、本時案、授業の視点、事後記録などを作成し、職員全員に周知する。参観した教員は、授業の視点に沿った見解や自由な視点で自分が学んだことなどを授業者に伝える場を設定する。小研に加え、今年度は12月に大研を設定し、本校の子どもの育ちを全職員で語り合う機会を設ける。0

4. いつでもだれでもできる授業づくり

回数は決めずに、挑戦できる人が行う。授業を見てほしい人を自分で決め、実践を続ける。参観者からの助言をもとに、授業力向上を目指す。

研究の計画

4月	・研究推進委員会 ・研究全体会（1年の見通し）	10月	
5月	・研究実践年間プラン研修会① （研究実践年間プラン作成①） ・研究全体会	11月	・研究推進委員会 ・事前研（大研学級の授業づくり）
6月		12月	・校内研大研・事後研 ・研究実践年間プラン研修会③ （研究実践年間プラン作成③）
7月	・研究全体会 （1学期の実践振り返り）	1月	
8月	・研究実践年間プラン研修会② （研究実践年間プラン作成②）	2月	・研究推進委員会 ・研究全体会 （今年度の振り返り、来年度の方角性）
9月		3月	・研究のまとめ

1学期の実践

3学期の実践

2学期の実践

<様式>

学 校 名	山形市立蔵王第一小学校 山形市蔵王成沢西四丁目3番17号 TEL688-2210 FAX688-9041	校 長	鈴木 章人																							
		研究主任	吉田 祐佳																							
研究 主 題	「主体的に学ぶ子どもの育成」（8年次） —思いや考えをもって伝え合う力を高めるために—																									
研究 主 題 設 定 の 理 由	本校の教育目標である「豊かな心を育み、自ら学び、たくましく生きる子どもの育成」の具現化に向けて、平成30年度より「主体的に学ぶ子どもの育成」を研究主題として掲げ、継続的に授業改善に取り組んできた。これまでの研究では、課題の設定、学び合い、まとめ・振り返りという学習過程に重点を置き、子どもが自ら学ぶ授業づくりを推進してきた。 令和4年度には、特に「振り返り」の在り方に焦点を当て、単元を通した振り返りの機能や、その型の提示を通じて、子どもの主体性を育む手立てを模索しました。その中で一定の成果を上げた一方、振り返りが作業的に終始してしまう場面や、教師間で「振り返りができている姿」の共通理解が十分でないことなど、課題も明らかとなった。 こうした成果と課題を受けて、令和5年度には「目指す資質・能力の明確化」、令和6年度には「それに迫るカリキュラム・マネジメントの構築」を柱とした新たな研究構想に着手しました。その中で、子どもたちに育成したい資質・能力のうち、特に「思いや根拠をもって表現する力」に課題が見られたことから、今年度は副題として「思いや考えを持って伝え合う力を高めるために」を掲げた。 本校の子どもたちは、相手の気持ちを素直に聞く姿勢を持っており、学び合いの素地は十分にある。しかしながら、自分の考えを理由や根拠をもって伝え合うこと、自分ごととして相手の話に向き合い、対話を通して学びを深めていく姿には、さらなる育成の必要が見られる。こうした課題意識のもと、研究を通して、より高いレベルでの対話的な学びの実現を目指し、すべての子どもが主体的に学び、豊かに表現する力を育む授業づくりを進めていく。																									
	表1 蔵王第一小学校における目指す資質・能力の一覧 <table><tr><th colspan="4">目指す子ども像 「笑顔あふれる子ども」</th></tr><tr><th>学校教育 目標</th><th>豊かな心を育み</th><th>自ら学び</th><th>たくましく生きる</th></tr><tr><th>目指す 資質・ 能力</th><td>相手の考えを受け止める力</td><td>思いや根拠をもって表現できる力 自他の考えを高め合う力</td><td>目標に向かって、試行錯誤できる力</td></tr><tr><th>高学年 部</th><td>相手の意見をきき、考えや思いを推測して自分の考えで言いかえることができる</td><td>根拠をもって相手にわかりやすく伝えるように表現できる</td><td>友達とかかわりながら、新しいこともチャレンジできる</td></tr><tr><th>中学年 部</th><td>相手の意見をきき、自分の考えで言いかえたり付け足して話をしたりすることができる</td><td>相違に気づき、自他の考えを高めることができる</td><td>課題を自分事としてとらえ、粘り強く取り組むことができる</td></tr><tr><th>低学年 部</th><td>他の人の考えを受容的にきき、理解できる</td><td>自分の考えや思ったことを、理由をつけて、色々な表現を用いて相手に伝えることができる</td><td>めあてに向かって、粘り強く試行錯誤し、解決に導くことができる</td></tr></table>			目指す子ども像 「笑顔あふれる子ども」				学校教育 目標	豊かな心を育み	自ら学び	たくましく生きる	目指す 資質・ 能力	相手の考えを受け止める力	思いや根拠をもって表現できる力 自他の考えを高め合う力	目標に向かって、試行錯誤できる力	高学年 部	相手の意見をきき、考えや思いを推測して自分の考えで言いかえることができる	根拠をもって相手にわかりやすく伝えるように表現できる	友達とかかわりながら、新しいこともチャレンジできる	中学年 部	相手の意見をきき、自分の考えで言いかえたり付け足して話をしたりすることができる	相違に気づき、自他の考えを高めることができる	課題を自分事としてとらえ、粘り強く取り組むことができる	低学年 部	他の人の考えを受容的にきき、理解できる	自分の考えや思ったことを、理由をつけて、色々な表現を用いて相手に伝えることができる
目指す子ども像 「笑顔あふれる子ども」																										
学校教育 目標	豊かな心を育み	自ら学び	たくましく生きる																							
目指す 資質・ 能力	相手の考えを受け止める力	思いや根拠をもって表現できる力 自他の考えを高め合う力	目標に向かって、試行錯誤できる力																							
高学年 部	相手の意見をきき、考えや思いを推測して自分の考えで言いかえることができる	根拠をもって相手にわかりやすく伝えるように表現できる	友達とかかわりながら、新しいこともチャレンジできる																							
中学年 部	相手の意見をきき、自分の考えで言いかえたり付け足して話をしたりすることができる	相違に気づき、自他の考えを高めることができる	課題を自分事としてとらえ、粘り強く取り組むことができる																							
低学年 部	他の人の考えを受容的にきき、理解できる	自分の考えや思ったことを、理由をつけて、色々な表現を用いて相手に伝えることができる	めあてに向かって、粘り強く試行錯誤し、解決に導くことができる																							

研究の内容	研究主題に掲げた子どもの姿に迫るために、授業づくりの視点をもとに実践を積み重ねる。子どもの姿を通して、目指す子ども像に迫ることができているかをみとる。 ○授業づくりの視点 <u>自分の考えをもつ</u> ・課題の理解 ・自分事とするための課題づくり ・既習との結びつき、既習をもとに考える経験の繰り返し ・ゴールの姿の共有 ・発問の吟味 ・ワークシートの工夫 <u>思いを表現する場の設定</u> ・適切な交流場面の設定 ・様々な表現方法の使用（話す、書く、挙手、アイコンタクト、体の動きなど） ・発言をつなげる教師のコーディネート これらを様々な教科、単元、活動で同様に繰り返すことで、子ども達の力を積み上げていく。
研究の方法	(1) 授業研究会 ○研究の教科について 低・中・高学年の学年部、特別支援教育部ごとに教科を決め、授業実践を行う。 ○授業研究の進め方 ・研究主題に基づいた授業実践を、全担任が行う ・大研の授業は全教員で参観、事後研を行う。小研の授業は、学年部会で参観、事後研を行う。 ・事後研究会では具体的な子どもの姿や事実をもとに、授業づくりの視点に沿った話し合いをする。 ・事後研の後に、実践のまとめを作成する。 ○指導案や研究のまとめの形式の変更について ・昨年度まではカリキュラム・マネジメント表をもとに、授業実践を行ってきた。昨年度は様々な資質・能力を目指そうとするあまり、目指すものがぼやけてしまったという課題があった。子どもの思考の流れを意識して授業を組み立てたり、ねらいを絞って実践を行ったりするために、板書計画を取り入れた形式に変更する。本児で押さえるべきポイントを明確にし、授業を参観する側にとっても、本時の流れが見やすい形式にする。 ・授業研究会での学びを速やかに共有したり、今後の授業に生かしたりするために、授業後1週間を目安に発行できるようにする。(A4サイズ1枚にまとめる。) (2) 校内研修 ・課題の共有、教員個々のスキルアップのための研修を行う。 (3) 先進校視察 ・県内外の先進校を視察し、学んだことを研究に生かす。(オンラインでの参観も含む) (4) 研究紀要の作成 ・授業研究会で実践したことを研究紀要にまとめ、次年度に生かす。 (5) 研究の組織 ○研究推進委員会：研究についての指針を決定するとともに、内容を討議し、推進を図る。 ・校長 ・教頭 ・教務（橋本） ・副教務（松井） ・1年（柊屋） ◎2年（吉田） ・3年（成澤） ・4年（笹原） ・5年（和田） ○6年（塚本） ・特別支援（伊藤）

○校内研学年部部会：授業づくり（事前研究会、事後研究会）、理論の構築、授業実践を行う。

低学年部	・ 柊屋 ◎横尾 ・ 本間 ・ 吉田 ・ 松井
中学年部	・ 成澤 ・ 眞壁 ◎笹原 ・ 後藤
高学年部	◎和田 ・ 福岡 ・ 塚本 ・ 工藤 ・ 橋本
特別支援教育部	・ 奥山 ・ 醍醐 ◎梅瀬 ・ 伊藤 ・ 沼沢 ・ 秋葉 ・ 佐藤

※◎は大研

研
究
の
計
画

令和7年度 年間研究計画について

日 時		内 容
4 / 3 (木)	研究推進委員会	目指す子どもの姿、研究の内容、方法、計画
4 / 21 (月)	全体会	〃 (提案)
7 / 7 (月)	大研①	4年 算数
7 / 11 (金)	研究推進委員会	大研①をもとにした確認事項、研究紀要について
9 / 29 (月)	大研②	5年 算数
11 / 17 (月)	大研③	1年
12 / 5 (金)	研究推進委員会	今年度の成果と課題、研究紀要について
12 / 17 (水)	大研④	特別支援 自立
12 / 22 (月)	全体会	今年度の成果と課題、研究紀要について
2 / 19 (木)	研究推進委員会	次年度の方向性
2 / 25 (水)	全体会	〃
2月下旬		紀要原稿〆切

※小研の日程については、別で調整する。
※研究推進委員会については、必要に応じて適宜行う。

<様式>

学 校 名	山形市立蔵王第二小学校	校 長	山科 典子
		研究主任	阿部 由美
研 究 主 題	主体的に学ぶ子どもの育成（１年次）		
研 究 主 題 設 定 の 理 由	変化の激しい現代社会の中で、自分の良さを認識し、高い志をもって意欲的に物事に取り組んだり、多様な人々と協働しながら豊かな人生を切り拓いたりする力を身に付けることが求められている。その時代に求められる資質・能力を身に付けるために、生涯にわたって学び続けるためには、知識や技能の習得のみではなく、「何のために学ぶのか」「どのように学ぶか」という課題に向き合い学びの質を高める指導を吟味していく必要がある。 本校では『あかるく かしこく ねばり強く「あかねっこ」の育成』を学校教育目標に掲げ、教育活動全体を通して、「自分も相手も大切に子ども」「主体的に考え行動する子ども」「試行錯誤、挑戦し続ける子ども」の育成をめざしている。その具現化のために、「分かった」「できた」が実感できる授業や、自己の成長を実感できるような授業づくりに取り組んでいるところである。 【これまでの研究について】 令和３年度より、「思いを互いに伝え合い、学びを高める子どもの育成」を研究主題とし、【思いを互いに伝え合う子ども】【学びを高める子ども】をめざす子ども像として実践を積み重ねてきた。 令和６年度は、研究テーマを踏襲しつつ「子どもが自ら学ぼうとする授業づくり」を副題とした。なぜなら、上記に記したように、「何のために学ぶのか」「どのように学ぶか」という課題が子ども自身のものになることが、子どもの幸せにつながるからである。子どもを「主体的な学習者」に育てることが教師の使命とも言える。『主体的』とは、単にすすんで自分の考えを出すことではなく、「学習の見通しをもち、自ら学ぼうとする意欲が出てくること」と教員間で共通理解した。第１回目の研究全体会では、「自分の目標がある」「自己決定・自己選択をする」「友達と相談したり・友達の考えと比べたりする」など、具体的な子どもの姿をいくつも共有し、授業者自身も主体的に授業づくりに取り組む礎を築くことができた。外部講師を招いた計８回の研究授業で、研究全体会で共有した主体的な学びの姿に近づいているか検証したり手立てを話し合ったりすることで、さらに授業者自身も主体的に日々の授業改善に取り組むことができた。 【今年度の研究について】 今年度は、昨年度の副題を研究主題にする。昨年度、教員間で共有しためざす子どもの姿（＝主体的な姿）の具現化のためにどのような手立てが必要か、子どもの姿から教師が学ぶのにふさわしい主題であると考えたからである。 <授業づくりの柱について> 今年度の第１回目の研究全体会では、めざす子どもの姿に迫るために、授業づくりで大切にしたい柱を話し合った。昨年度までは、「学習の見通し」「考えをもつ」「交流」の３つを授業づくりの柱としてきた。柱があることで、事後研究会の話し合いが焦点化され、次の授業研究会にも大いに生かされた。このため共通の柱は必然と考えた。新しい研究主題の柱について全体会で吟味した結果、今年度は、「自分の課題、見通しをもつ」「考えを深める」「学びをつなぐ」の３つを柱とする。		

め ざ す 子 ど も 像	主体的に学ぶ子ども 前年度から引き続き、教員間で共有した主体的に学ぶ姿は、以下の通りである。 ・相手意識をもって言語活動を行う。 ・学習したことを生活場面に生かすことができる。(学習と生活・体験をつなぐ) ・新しい課題でも既習を生かすことで解決しようとする。 ・目指したいモデル(指導者・友達・尊敬する人など)がいる。 ・自分の目標(ゴール)がある。 ・自己決定、自己選択がある。(めあて、やり方も含めて) ・安心して「わからない」「どうして」が言える。 ・間違いを大切にできる。 ・試行錯誤しながら、努力する。(過程を大切にできる。) ・「知りたい」「学びたい」という意欲がある。 ・友達と相談したり一緒に考えたりする。 ・自分と友達の考えを比べながら聞く。 研究を通し、上記の姿の他、さらに主体的に学ぶ姿を見取することをめざす。 ・目標に向かうために何をすべきか、共通理解が図られている。 ・自分に合った方法で学んでいる。 ・学びの蓄積を実感し、学習の発展を期待する。 ※研究を通し、主体的な子どもの姿を増やすことをめざす。
研 究 の 内 容	めざす子ども像の具現化に向けて、授業づくりの3つの柱をもとにしながら実践を積み重ね、授業改善につなげる。 自分の課題、見通しをもつ ・新しい課題でも既習を生かすことで解決しようとする。 ・自分の目標(ゴール)がある。 ・「なぜ? どうして?」等、子どもたちが自ら課題意識をもって解決に向かう。 ・必要感を感じて学習に臨む姿がある。 ・自分で課題を見出す。「～してみたい!」 「次は～かな。」 ・今日の授業で自分(たち)は何の学習課題で取り組むのか分かっている。 ・「～したい」が明確にある。 ・目指したいモデルがいる。 【手立て】児童理解、単元デザイン、 必要感のある、学びたくなる課題 など

	考えを深める ・ 試行錯誤しながら、努力する。 (過程を大切にできる。) ・ (教科の本質に向かっている。) ・ (試行錯誤しながら、繰り返し取り組む。) ・ 受け身や周りに合わせるのではなく、自ら考えて、行動できる。 ・ 課題に対し、自分なりの方法で解決しようとする。 ・ 相手意識をもって言語活動を行う。 ・ 友達と友達の意見をつなげる。 ・ 自分から友達の考えをきこうとする。 ・ 友達の考えと自分の考えを比べながら、思考を深めていく。 ・ 自己決定、自己選択がある。 ・ 自分で自分の学び方、学ぶ道を選ぶ。 ・ 安心して「わからない」「どうして」が言える。 ・ 間違いを大切にできる。 【手立て】学習活動、教師の問いかけ・出と待ち、交流の持たせ方 など 学びをつなぐ ・ 学習したことを生活場面に生かせる。 (学習と生活・体験をつなぐ) ・ 「～したい」という思いが連続的に生まれる。 ・ 最後まであきらめずに、粘り強く取り組む ・ 試行錯誤しながら、繰り返し取り組む。 ・ 新たな課題を見つけたり、発展的に考えたりする。 ・ 学んだこと、努力したことが役に立つ達成感を味わう。(次も…もっと…友達も…) 【手立て】振り返りの場の設定、振り返りの共有、生活経験に返す など
研究の方法	(1) 授業研究会 ①研究の教科 ・ 授業者は、子どもの実態や挑戦したい意思により教科を選択する。 ②授業研究の進め方 ・ 研究主題に基づいた授業実践を行う。 ・ 研究授業日の1か月前までには、構想の会を開く。構想の会の後に、授業者は指導案を作成し、事前研究会(指導案をもとにして)を行う。 ※授業日の10日前を目安に事前研究会を行い、助言者への指導案は1週間前をめどに提出する。 ・ 事後研究会では、2グループに分かれて具体的な子どもの姿や事実をもとに、授業の視点にそった話し合いをする。その後、グループで話し合われた成果や課題を全員で共有する。 ・ 事後研究会日より(A4サイズ1枚に、グループごとの話し合いのまとめ、授業者からの一言、指導助言で出された成果や課題を簡単にまとめたもの)を授業者が作成・配付し、次の授業に生かす。(授業後1週間を目安に) ③指導案(授業デザインシート)について ・ 子どもの思考の流れと授業づくりで大切にしたい柱が明確になる指導案を作成する。本時案は、板書計画を中心にした形式にし、本時で押さえるべきポイントを明確にする。 ・ 授業を参観する側からも、本時の流れが見やすい形式にする。 (2) 校内研修 ・ 可能な限り、全ての研究授業に外部講師を招聘し、課題の共有と教員個々のスキルアップのための研修を行う。 (3) 先進校視察 ・ 県内外の先進校を視察し、学んだことを研究に生かす。(オンラインでの参観も含めて) (4) 研究紀要の作成 ・ 授業研究会で実践したことを研究集録にまとめ、次年度の研究に生かす。 ・ 実践を振り返って、研究授業だけでなく、その後の単元や他教科の学習でも見られた子どもの成果や課題をまとめる。

研究
の
計
画

研究推進委員会は必要に応じて適宜行う。

日程	予定	内容
4 / 5 (木)	研究推進委員会①	研究概要、全体会の内容
4 / 21 (月)	研究全体会①	研究概要、グループ討議
5 月	研究推進委員会②	研究の方法、日程、授業研の進め方
6 ~ 12 月	研究授業 6 回	6 年 国語
		1 年 生活
		3 年 未定
		2 年 未定
		4 年 未定
		こまくさ 1. 2. 3 組
1 月	研究推進委員会③	全体会の計画
1 月	研究全体会②	今年度の振り返り
2 月	研究推進委員会④	次年度の方向性
2 月 末	研究紀要原稿締め切り	

学 校 名	山形市立蔵王第三小・蔵王第二中学校 山形市蔵王温泉字丈二田727番地 TEL694-9042 FAX694-9373	校 長	三浦 浩子
		研究主任	齋藤 健広
研究 主 題	蔵王の魅力を探究し、国際的な視野で未来を創造する子どもの育成 ～地域の人・もの・こととかかわり、課題発見力・調整力・発信力を高める～ <1年次>		
研究 主 題 設 定 の 理 由	本校では、学校教育目標「賢く 強く たくましい 児童生徒の育成」を掲げ、「確かな学力の育成」と「蔵王の未来を考える教育活動の充実」をめざし、感性を磨く体験・交流活動等を推進している。 本校の児童生徒は、これまで蔵王自然学習や地域清掃活動などを体験してきて「蔵王に来るお客さんに喜んでもらいたい。」「もっとお客さんを増やしたい。」「という思いをもち、蔵王をよりよい観光地したいという意欲が高い。また、自分の考えや意見を発表する機会が多いことから、自分を表現することに物怖じしない。一方、極少人数であるため、相手の考えから新たな視点を見つけたり、相手の考えのよさを見つけたりする機会が少ない。これらのことから、地域の人・もの・ことに目を向けることで多様な他者とかかわり、子どもの思いを引き出すことができるだろうと考えた。また、これまでの校内研究から、育成したい資質・能力として課題発見力、調整力、発信力の3つを設定した。 一つ目の課題発見力とは、蔵王のよりよい観光地としての在り方について気付いたり、見たもの聞いたことに対して問いをもったり、解決策や計画を考え主体的に実行する力である。 二つ目の調整力とは、選択した施設や相手と電話で交渉したり、実現に向けて見通しをもったり、時間や量を管理したりしながら課題の解決のために学びを調整する力である。 三つ目の発信力とは、自分の意見を相手に分かりやすく伝える力で、自分に合った表現方法で情報を発信することである。方法例として、英文パンフレット、ドキュメンテーション、プレゼンテーションソフト等があるだろう。 蔵王という観光地は全国的・国際的に知られており、とても魅力ある地域である。蔵王だからできること、蔵王にしかできないことを探究することで、地域と一体化した学習材を発掘することにつながるだろう。そして、児童生徒が蔵王を愛し、蔵王の魅力を伝え、観光地・蔵王を誇りに思い、主体的に学習する児童生徒を育成したいと考え、本主題を設定した。		
研究 の 目 標	学校教育目標 賢く 強く たくましい 児童生徒の育成 建学の理念「含英」 「確かな学力の育成」「蔵王の未来を考える教育活動の充実」 めざす児童生徒の姿 蔵王の魅力を探究し、 ふるさとを誇りに思う 子ども 多様性を受け入れ、国際的 な視野で未来を創造する 子ども いのち輝く自他の存在を認め、 自己実現に向けて挑戦する 子ども 学校研究 蔵王の魅力を探究し、国際的な視野で未来を創造する子どもの育成 ～地域の人・もの・こととかかわり、課題発見力・調整力・発信力を高める～ 感性を磨く体験・ 交流活動の推進 ➡ ➡ ➡ 児童生徒の主体性を支援し、活動を共に探究する 多様な他者とかかわることで、協働的な学びを工夫する 生活科や総合的な学習の時間、各教科において、地域の 素材を活かした学習材を発掘する		

研究の方法

研究の計画

外部と連携

外部講師を招いた校内研修会を開き、新たな視点を見つかり、児童生徒のよさや課題を焦点化したりして校内研究に生かす。

期日・時期	内 容
4月 3日	第1回研究推進委員会(今年度の研究について)
4月 25日	第1回校内研究会(今年度の研究について)
4月	第1回総合を語る会(教員)
6月	第2回総合を語る会(児童生徒・教員)
7月 29日	第1回校内研修会(外部講師による講義・演習)
9月	第3回総合を語る会(児童生徒・教員)
11月	第4回総合を語る会(児童生徒・教員)
11月 28日	第2回研究推進委員会(研究のまとめについて)
12月 12日	第2回校内研究会(研究のまとめについて)
1月	第5回総合を語る会(児童生徒・教員)
2月 16日	第3回研究推進委員会(次年度の研究構想・計画について)
3月 9日	第3回校内研究会(次年度の研究構想・計画について)

<様式>

学 校 名	山形市立南山形小学校 山形市大字松原字東河原 1 8 8 番地 TEL 6 8 8 - 2 4 3 0 FAX 6 8 8 - 9 0 4 3	校 長	遠藤 克裕
		研究主任	朝倉 諒
研 究 主 題	主体的に学びを求め、互いに認め合って生活 する子どもの育成（3年次）		
研 究 主 題 設 定 の 理 由	社会の在り方が劇的に変わる「Society5.0 時代」の到来、新型コロナウイルス感染症によって医療・教育・経済等の問題が引き起こされたことを代表する「予測困難な時代」において、一人一人が自ら考え、判断して問題を解決していく主体的な態度が求められている。また、一人ひとりの個を尊重し、様々な価値観を共有しながら課題を乗り越えていく協働的な態度も求められている。 このような社会的背景を踏まえ、本校では、これからの時代を生き抜くことができる子どもたちを育てるために、重点目標として「主体的に学びを求め、互いに認め合って生活する子ども」を設定している。この達成のためには、具現化への方策が明確であることに加え、教職員のベクトルが同じ方向を向いていることも重要であると考え。従って、今年度は学校教育の重点目標＝研究主題とし、よりシンプルに、教職員が目指す方向性を一致させて校内研究に取り組むこととした。 本校の子どもたちは、とても素直で、前向きに学校生活を過ごしている。また、コロナ禍が終わり、関わり合いが増えたことにより、話し合うことの重要性や楽しさを感じ取る姿が少しずつ見られるようになってきている。一方で、自分から進んで学ぼうとしたり自信を持って表現したりすることが苦手な子どもが多く、仲間との違いを受け入れることができない場面も見られる。そこで、育成したい資質・能力を『主体性』と『協働性』とし、これらを柱に重点目標（研究主題）に迫ろうと考えた。昨年度、職員間での主体性と協働性の捉え方が曖昧だったという反省を踏まえ、今年度は育成したい資質・能力を下記のように設定し、より具体的に捉え、研究に取り組んでいくことにした。 主体性…○自ら問題を発見し、課題を設定し、進んで解決しようとする力 ○粘り強く取り組み、学びを生活に生かそうとする力 協働性…○相手のよさや苦手なことも、互いに認め合う力 ○思いや考えを伝え合いながら、よりよい方法を生み出していく力		
研 究 の 目 標	育成したい資質・能力の主体性と協働性を柱として、日々の授業づくりを行いながら、授業改善・授業力の向上を目指す。		
研 究 の 内 容	（１）日常的な授業実践 子どもの思いに寄り添った単元構成や主体性と協働性を育成する単元のあり方などについては、日々追究し、日常的に子どもの成長を目指して実践する。また、授業だけではなく、学校行事、委員会活動やクラブ活動、たてわり班活動、清掃など教育課程全体で子どもを育てていく。 （２）学級カリキュラムマップの作成 学級経営案と学級カリキュラム、両方の性格を持つカリキュラムマップを作成する。「Ａ３」１枚にまとめ、つけたい資質・能力が育まれたのか可視化できるようにしたい。また、定期的に更新し、PDCAサイクルをしっかりと回していくものとする。		

(3) 校内授業研究会

校内授業研究会を通して、教師の授業力を高め、日常の授業の充実・改善に生かしていく。授業研究は学級経営の中核となり、重点に迫りやすい教科「国語」「算数」「生活・総合」から決定して実践を積み上げる。

- ①大研…今年度は、低学年1回、中学年1回、高学年1回、特別支援学級1回の計4回とする。
全員が参観する。
- ②事前研究会…学年で構想し、各学年部で指導案を検討する（下学年部会は1～3年、すぎのこ学級、担任外とし、上学年部会は4～6年、すぎのこ学級、教務主任とする）。事前研の日程は、研究推進委員と教務主任で調整する。
- ③事後研究会…主体性と協働性の育成を実現する授業のあり方について多角的な見方から迫っていけるようにする。外部講師を招聘し、指導を仰ぐ。
- ④研究のまとめ…授業者以外の教員がまとめ、次の研究授業や日々の授業づくりに生かせるようにしていく。

研究の方法

授業構想（学年で）

- ・授業者の思いや授業構想の共通理解
- ・大まかな単元の指導計画や本時の展開の検討

指導案作成

指導案検討（事前研）（上下学年部で）

- ・単元計画、本時の目標・学習活動・評価の一貫性、資質能力を育てるための手立てや工夫が適切か検討

指導案修正→指導案完成 （1週間前まで）

授業研究会（全員参観）

- ・育成する資質能力を中心に、子どもたちの主体的な学びの姿を見取る。
- ※授業記録や写真は学年部で分担

事後研究会（全員参加）

- ・子どもの学びの姿を中心に、手立てや工夫について
- ・重点や資質能力、カリキュラムマップと授業との関連について

研究だより「東雲」発行

授業者の振り返り、授業研での学びをこれからの日々の授業にどう生かすか、お互いの授業力の向上につながるように、成果と課題をまとめる。（学年部で発行担当を決める）

研究 の 計 画	月	校内研究全体会	大研(下学年・上学年)
	4	1 4 日 (月) 研究推進委員会① 2 1 日 (月) 研究全体会① 2 3 日 (水) 総合・生活構想 3 0 日 (水) 学カリ研修① (山大中井先生)	
	7	4 日 (金) 研究全体会② (授業研・事後研) 1 0 日 (木) 研究推進委員会② 2 8 日 (月) 研究全体会③ 3 1 日 (木) 学カリ研修② (山大中井先生)	4 日 (金) 大研①
	10	3 1 日 (金) 研究全体会④ (授業研・事後研)	3 1 日 (金) 大研②
	11	2 8 日 (金) 研究全体会⑤ (授業研・事後研)	2 8 日 (金) 大研③
	12	5 日 (金) 研究全体会⑥ (授業研・事後研) 1 6 日 (火) 研究推進委員会③ 2 2 日 (月) 研究全体会⑦ (まとめについて)	5 日 (金) 大研④
	2	2 日 (月) 研究推進委員会④ 1 6 日 (月) 研究全体会⑥	
	3	下旬 研究のまとめの完成	

<様式>

学 校 名	山形市立みはらしの丘小学校 山形市みはらしの丘三丁目4番地 TEL 023-689-0181 FAX 023-688-2333	校 長	馬場 賢
		研究主任	武田 俊紀
研 究 主 題	自ら考え、深く学び合う子ども（4年次） ～見方・考え方を働かせる ICT の効果的活用～		
主 題 設 定 の 理 由	本校では、教育目標を次のように掲げている。		
	夢と感動 勇気と感謝 みはらしの丘の未来を創る 生きる力にあふれる子どもの育成 現在みはらしの丘小に通う子どもたちが、成人し社会で活躍する頃には、我が国は厳しい挑戦の時代を迎える。生産年齢の人口減少、グローバル化の進展、絶え間ない技術革新等と、変化の予測が困難な時代になる。このような社会の変化に受動的に対応するのではなく、主体的に関わり自らの可能性を発揮し、よりよい社会と幸福な人生の創り手となってほしいと考える。そのためには、資質・能力を確実に育成することのできる校内研究にしていきたい。多様な子どもたち一人ひとりに、より確実に資質・能力を身につけるには、ICTを活用した個別最適・協働的な学びが有効である。また、ICTを効果的に使うことで、学びの質が高まり、深い学びにつながっていくことが期待される。そして、様々な問題において他者と協働し、その力を発揮して未来を切り拓いてほしいと考える。		
授 業 づ く り 視 点	視点 教科の見方・考え方を働かせるのに、ICTは効果的であったか		
	例・算数 3年 三角形と角 数学的な見方・・・辺の長さに着目する。 数学的な考え方・・・三角形の特徴を考える。 統合的・・・3つの辺で囲まれた形は三角形だ 発展的・・・3つの辺の長さが等しい三角形は正三角形だ 2つの辺の長さが等しい三角形は二等辺三角形だ ICT タブレットの画面で三角形を回転させたり、移動させたりして、同じ長さの辺がいくつあるのかなど、辺の長さに着目できるようにする。 ※必ずしも1単位時間の授業の中で全てが実現されるものではないので、単元などの学習のまとまりの中でICTをどのように活用することができるのか検討していく。		

（１）研究授業について

全職員が指導案を書いて授業を公開する。 授業づくりは全職員が行う。

① 研究企画授業研究会（全体研）年３回

- ・全員で研究の方向を確かめるため、１学期の早い段階で１回目（企画研）ができるとう望ましい。
- ・職員全員で参観し、事後研究会を行う。
- ・事前研や授業づくりのアドバイス等は学年部で行う。
- ・全体研授業者は、授業前に指導案（裏表１枚）を作成し、職員室共有にデータを入れる。また、プリントアウトし、職員室前の引き出しに入れる。
- ・外部から講師の先生を招き、指導していただく。（依頼したい先生がいる場合は、研究主任に相談する。）

② 学年授業研究会（学年研） 各学年・支援学級

- ・全体研を行わない教員が授業を行う。（学年の教員全員が参観する。）
- ・事前研、事後研は学年と希望者で行う。
- ・支援学級は、事前に参観することを担任に伝え、必要に応じて参観する。
- ・指導案（裏表１枚。「３ 指導にあたって」以外を作成）は職員室共有にデータを入れておく。また、プリントアウトして職員室前の引き出しに入れる。

- ・計画を立てる
- ・一覧表にする
- ・月曆に載せる

③ 参観について

- ・全体研３つ、担当の学年研は参観するようにする。他の学年研にも、可能であれば参加する。

（２）教科について

教科や単元はしぼらない。単元を通して、教科の見方・考え方を働かせて、どんな資質・能力を育成していくのかを明確にして授業づくりをしていく。

また、ICT の活用を通して情報活用能力も共につけていけるようにする。

（３）指導案について ※別紙参照

（４）まとめ方について

- ・昨年度までは研究通信を作成していたが、実践を共有する機会が不十分であった。そこで本年度は、研究通信のかわりに学期末の研究全体会で実践を交流する。

（５）指導案、授業写真の保存

☆指導案は、教科および学年ごとにまとめて保存し、普段使いできるようにする。

保存場所「職員室共有→Ⅱまなびづくり指導部→２校内研究→指導案→〇年→△△（教科）」

※指導案のファイル名を単元名に変更して保存する。

例：整理のしかたとぼうグラフ 「クリスマス会計画 ～みんなでやりたいことは何？～」

- ・可能ならば、板書の写真も合わせて保存しておく。

研究計画と目指す子どもの姿

【1年次】

○校内の体制づくり

- ・情報主任も加わり、研究推進委員会で校内の ICT を使って何ができるか検討する。

○カリキュラムの検討（教科部会・各学年）

- ・前年度のカリキュラムとタブレット使用状況をもとに、ICT を効果的に活用できそうな教科や単元、学習内容を探る。

各教科の授業

総合的な学習の時間…ICT を活用した地域学習

○校内研修会の設定

- ・先進校の実践事例について（カリキュラム・マネジメント中心に）

○学年で育成をめざす資質・能力の重点化

- ・資質・能力（言語能力・論理的思考力・情報活用能力）を重点として取り組み、ICT を取り組む。

○指導案検討（ICT の活用を明記する）

☆学びの中で ICT を日常的に取り組む。

【2年次】

○実践を職員間で共有し、活用場面を広げる。

- ・ICT を活用した単元を学年カリキュラムに明記する。

○資質・能力を発揮・自覚させ、繰り返し育成する。

- ・ICT の効果的な活用により、論理的思考・表現力を育成し授業を行う。

☆ICT の活用と学びの幅が広がる。

【3年次】

○学校で ICT の効果的活用場面についてまとめる。

- ・3年間の取り組みを振り返り、効果的な活用場面と今後の可能性について話し合う。

○学年で育成をめざす資質・能力の話し合いと振り返り

- ・ICT を系統化し、日常化していく。

☆ICT をツールの選択肢の一つとして使い、学びに生かす。

【4年次】校内研究全体会・研修会（予定）

5月 2日（木）第1回全体会 校内研究の計画と進め方（概要をもとに）

5月 27日（火）校内研修（見方・考え方について山形大学野口教授による講演）

6月中（予定）第1回全体研

7月 28日（月）校内研修（見方・考え方について）

11月 20日（木）第2回全体研（予定）

12月 11日（木）第3回全体研（予定）

12月 22日（火）第2回全体会 今年度の研究の成果と課題を確かめる。

2月 18日（火）第3回全体会（仮）今年度の成果と課題、来年度研究について

☆教師のニーズや教育課程等に併せて、ミニ研修会を随時行う。（情報主任と相談）

○月一回程度、研究推進委員（必要なら情報主任も）が集まり、

実践の共有・発信と情報教育の推進の話し合いを行う。

☆ツールの一つとして ICT を活用し、教科の本質に迫る。

<様式>

学 校 名	山形市立本沢小学校 山形市大字長谷堂 1111 の 1 TEL (023) 688-2420 FAX (023) 688-9044	校 長	黒 原 裕 一
		研究主任	志 田 修 一
研 究 主 題	子どもの主体性を伸ばす 自由度の高い授業の実践 ～若手と共に考える 評価から設計する授業～		
研 究 主 題 設 定 の 理 由	《社会的背景》 産業社会から知識基盤社会への構造転換 ・「正解」よりも「最適解」を場面に応じて自力で、または多様な他者と協働して生み出すことが求められる。 ・国連が示した「SDGs」を達成するために、持続可能な社会の担い手を育成する教育への取り組みが必要となる。 ・コンテンツ（内容）・ベイスの学習観からコンピテンシー・ベイスの教育への転換 ・学習指導要領において、「主体的・対話的で深い学びの実現」が求められている。 ・令和3年中教審答申において、新しい時代の学校教育の姿として「全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現」が提言された。 →「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を図ることが求められる。 《これまでの研究》 「学びのつながりを意識して、豊かな言語で表現する子ども」 ○国語科を窓口として、「話す・聞く」ことに焦点を当てつつ、手紙や自分の考えを「書く」姿で子どもたちがどのように表現するのかを検証してきた。 ○教師の側としては、子どもたちが学びのつながりに気づけるようカリキュラムを組んだり、明示的に知らせたりすることをくり返し、力の育成にあたってきた。 ○これまでの実践の積み重ねで、学年に応じて生活科や総合的な学習の時間を核としたカリキュラムが築かれてきている（ただし、協力してくださる地域の方の高齢化が進み、これまでと同様に活動していけるかについて見直しが必要な時期に入っている）。 ○若手と共に育つことを掲げ、日常の授業を大切にする流れの中に研究授業を配置して学び合う機会としてきたことで、ベテランの技術や見方を知ったり、若手の熱意に影響されたり、これまでとは違った学習方法に挑戦したりすることができた。 ▲子どもたちが自分の思いを伝えることを意識して授業を仕組んでいるが、その活動が授業のねらいに迫るものかは十分に検討されていない面がある。 ▲子どもが自らの学びを適切に評価する力を高めたい。同時に教師も評価を適切に行いたい。 ▲中学年くらいから授業の中で発言する子が固定されてしまう面がある。 ※全校児童にアンケートを実施（8月・3月）して変容を見たが、「話す・聞く」ポイントについて8月期よりも3月期の方が苦手意識をもつ割合が増えている。 《子どもの実態》 ・総合や道徳などの学習では、自分の思いを素直に語れる姿が見られる。 ・書くことで自分の思いや考えを表現することができる子がいる。 ・友達の考えや既習事項を活かすことで（真似をする）、より良く学ぶ姿勢が高まってきている。学びのつながりを意識することができるようになってきた。 ・国語、社会、算数、理科では発言が一部の子に限られたり、話し合うことでそれぞれの教科の核となる部分に迫ったりするようなやり取りが十分には行われていない。 ・少人数であるがゆえに、考えを練り合い、高め合うことが難しい面がある。 ・大人が答えを教えてくれるという受け止め方があり、最終判断を教師に求め、自らクリティカルに思考しようとする気持ちが育っていない。		

	《考察》 ☞道徳で価値にせまるときに子どもたちが生き生きと語る姿が見られるのは、授業のねらいが明確だから（子どもにとっても教師にとっても＝共有されている）だと考えられる。 ☞自己評価力を高めるには、目標が大切である。 ☞教師の側が子どもの話す姿（＝表面的な姿）にだけ目が行き、授業のねらいにせまる内容になっているのを見取れていないのではないかな。 ☞子どもの可能性を信じて「待つ」ことと、積極的に教える場面の使い分けを整理して取り入れていくことで、子どもたちの主体的に学ぼうとする気持ちがたかまるのではないかな。 令和6年度時点で本沢小学校教員が感じる子どもたちの課題や目指したい姿 ★自分で学びをつくっていくような主体性がほしい。 ★あきらめてしまい、粘り強く取り組むことが難しい。 ★一部の子に任せきりで、自分で考えようとしないう子がいる。 ★自分の思いを、他者にわかるように伝えることが苦手な子がいる。 ★自分自身の学びの様子を適切に評価し、学びを調整したり、次の学びへとつないだりできるようにしてほしい。 以上のように令和6年度の研究をふり返り、本校の子どもの実態を受けて、今年度の研究主題を 「子どもの主体性を伸ばす 自由度の高い授業の実践 ～若手と共に考える評価から設計する授業～」 と設定した。 教師の側が子どもの学びに対して適切に評価を与えることで、子どもたちも自己評価さらには他者評価を行う力を伸ばし、自ら学ぼうとする姿勢が高まっていくと考える。また、授業の目的が明確であれば、子どもたちはよく考え伝えようとするだろう。
	「評価から考える」ために ①その授業または単元を通してどのような資質・能力の育成を図るのか、子どものゴールの姿を指導要領で確認し、ねらいを明確にした授業を構成することを意識する。 ②学習内容の系統性、上下学年のどの学習とつながっているかを確認する。 ③指導と評価を一体的にとらえることを意識した授業づくりを行っていく。 ④自由進度学習で配付する「てびき」のように、子どもに単元の目標や流れを開示することで、教師と子どもの共有化を図る。 「(学びの) 自由度を高める」とは ① 単元の目標を共有すること ・明確な目標を設定し、教師と子どもがその目標を共有する。 ② 学習における選択場面があること ・目標を達成するための選択肢が多様であること 一人で、または協働して学ぶ 学び方等 ③ 教材、学習進度の工夫や単元の設定を仕組むこと ・目標を達成するための実態に応じて教材を工夫したり、進度の幅をもたせたりする。 ・創作的な活動や創造的な学習を仕組むことで、自由度を高める。
研 究 の 目 的	①ねらいと評価を一体化させることを意識した授業づくりを進めていく ・評価（授業のゴールの子どもの姿）から授業を構成し、ねらいにせまるための手立てや教材について検証を重ねる。 ・その単元がどのように位置づいているか学習の系統性を意識して授業づくりを行う。 ②教師の授業力の向上と授業改善を図る ・本校の子どもの課題を解決するために授業実践を行っていくが、授業の腕を磨くことが必要である。現行指導要領で求められている授業が具現化されているかを確認しながら進めていく。 ③評価を行う場を意図的に仕組み、評価を重ねることで資質・能力を高めていく ・教師による評価、子ども自身で行う評価、子どもどうしで行う評価を行う場を設定する。

研究の方法	① 日々の授業実践 ・研究テーマの理解にもとづいて、日々の授業を重ねていく。 ・中学年（音・図）、高学年（国・算）と担任間で授業を縦持ちし、学びの系統性を意識していくと共に、様々な教師から評価を与える機会とする。 ・全校児童にアンケートを実施し、「評価」に対する子どもの意識を把握して、授業に活かす。 ②授業研究会→日々の授業の中に位置づけ、教科の授業実践を行う ・提案授業を全員で見て気づいたことを話し合ったり、講師を招いてアドバイスをいただいたりすることで、一人一人の日々の授業実践に活かしていく。 ・校外の先生方に向けて授業を公開し、事後研に参加していただく。幅広い視点から意見をもらい、研究がさらに充実するようにする。 ③カリキュラムマネジメント表の活用 ・生活科・総合的な学習の時間を中心としたカリキュラムマネジメント表を作成し、年間を通して意図的・計画的に資質・能力の育成を図っていく。 ・本校で育てたい資質・能力を整理し、子どもの成長を確認する際の手がかりとする。 ④評価の日常化 ・学校生活全体の中で評価を行うことを意識し、「目標を立てる→評価する」というサイクルを大切にする。 ※評価はできるだけポジティブに行うよう留意する。 ⑤視察・外部講師の招聘・研究会への参加 ・校外の実践を視察したり、各種研究会に参加したりして、学んだことを紹介し、校内で共有する。 ・外部講師を招聘し、校内研究を充実させる。 ・市の委嘱校（五小、東沢小）の公開に参加し、各校の実践に学ぶ。
研究の計画	<研究全体会> 5月 2日（金）…今年度の研究の提案とカリマネ作成 7月 28日（月）…カリマネのふり返りと研修報告等 2月 27日（金）…今年度の反省と次年度について <授業研究会> 6月 20日（金）…飛田先生 国語科の授業提案（5時間目） 鈴木貴子先生 7月 16日（月）…志田 提案授業 算数科 ※市委嘱公開 齊藤一弥先生 12月 10日（水）…小池先生 提案授業（自由進度学習） 有澤 徹 山形市教育委員会主任指導主事 1月 22日（木）…富松先生提案授業（内容：未定） <研究の日常化> ・初任研の授業参観 ・実践報告（打ち合わせ時）

<様式>

学 校 名	山形市立西山形小学校 山形市大字柏倉 3774 番地 1 TEL 643-3011 FAX 645-8602	校 長	森山 謙一
		研究主任	稲村 良平
研 究 主 題	自ら学びに向かう児童の育成（２年次） ～カリキュラム・マネジメントの活用と課題設定の工夫～		
研 究 主 題 設 定 の 理 由	本校は「たくましい心と体を持ち、進んで学び、郷土を愛する子ども」を教育目標に掲げ、短・中期的にめざす具体的な子どもの姿である「これからの社会の担い手として必要な学力や資質・能力を持ち、西山形地区に生まれ育ったことを『誇り』に感じている子ども」の実現に向けて教育活動に取り組んでいる。 昨年度より、「自らに学びに向かう子どもの育成」を研究主題に掲げ、子どもが主体的に学ぶ姿をめざして、カリキュラム・マネジメントを軸とした指導法の工夫を研究してきた。子どもの実態に合わせて、カリキュラムをマネジメントすることで、各教科をつなげた合科的な学習を実践することができ、子どもが見通しをもちながら、めあての達成や課題解決に向けて進んで考えたり活動したりする姿が見られるようになった。また、少人数のよさを生かして互いに意見を出し合いながら協働的に学び合う姿が見られたり、学校内外における様々な人的・物的な資源を活用しながら学習を進めたりすることで、子どもたちは意欲的に思いを膨らませながら学習に取り組むことができた。これは、半期及び年間の見通しをもちながらカリキュラムをマネジメントし、学習の計画・準備・実践にあたることができたことが大きいと考える。 一方、少人数での関わりのよさがある反面、個々の様子においては、周りとは異なる考えでも臆せず表現したりすることや、様々な考えを受け取りながら批判的に考えたりすることに課題が見られた。また、子どもたちの「やってみたい」「考えてみたい」などの気持ちが揺さぶられるような課題設定をすることが教師側の課題として見られた。子どもが自分たちで進んで学びに向かうためのこうした課題をしっかりと把握し、発達段階に応じた付けたい資質・能力を系統的に捉えて授業実践していくことができるよう、学校全体として育成する資質・能力をさらに具体的なものにしていく。それをベースにカリキュラムをマネジメントしていくことが有効であると考え。 今年度は、「自ら学びに向かう子ども」の具体的な姿を「自ら進んで考え出す子ども」「仲間と学び合い、高め合う子ども」「最後まで本気でやりぬく子ども」とし、友達・教師・地域の人達との関わりを大切にしながら、進んで課題を見つけたり新たに挑戦したいことに取り組んだりする意欲をもつなど、自ら生き生きと学ぶ子どもの姿を育てていきたいと考える。そのために、学習活動の軸となるカリキュラム・マネジメントを計画的且つ日常的に行い、課題設定を工夫した授業を日々実践していくとともに、様々なアプローチ（教科横断的学習、ＩＣＴ活用、地域学習、自由進度学習など）で授業改善を図っていく。また、本校の教育力の一つとなっているコミュニティスクールをさらに生かし、地域とのつながりを大切にしながら、子ども自身が地域及び学校の一員としての自覚や西山形地区に対する思いを深めていくことができるようにしていく。		

1. カリキュラム・マネジメントの活用

子どもの実態を的確に見取り各学年で付けたい資質・能力を明確にした上で、カリマネ表を作成する。授業にあたっては、育成する資質・能力を踏まえ、教科横断的な視点をもって単元の全体構想を考え実践する。

2. 課題設定を工夫した授業実践

研究＝日々の取り組みという意識をもち、子どもが見通しをもって自ら学び出すような課題設定を工夫した授業を日々実践していく。日々子供の実態や成長を捉えながら、めざす子どもの姿に向けた授業づくりを行う。

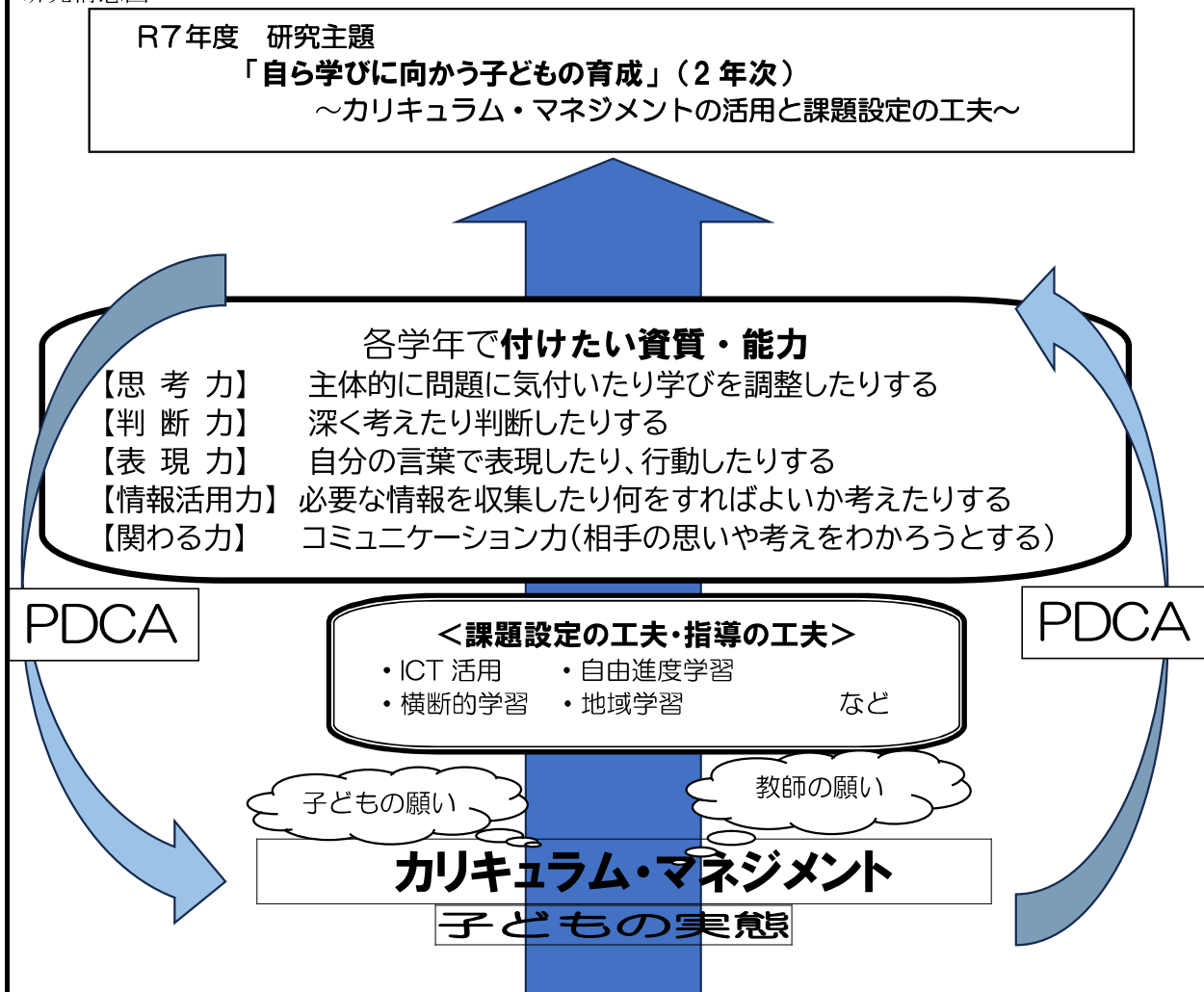
3. 「見合う授業」の実施

一人一授業の提案をすることで、学び合う場を設定する。授業後には、参観者による話し合いの場をもち、各学年の「資質・能力」の向上に向けた手立ての具現化から、その有効性について、主に子どもの姿から語り合うことで授業力の向上を目指す。

4. 定期的に学び合う場（カリマネの日）の設定

月1回程度、カリマネの日を設定し、定期的に日々の授業について語り合ったりカリマネ表の見直したりすることで、授業改善につなげていく。

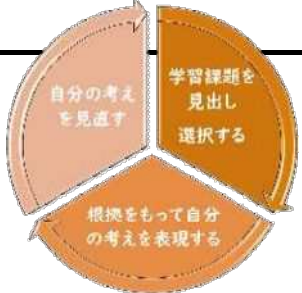
研究構想図



研究
の
計
画

日時	内容
4月22日	研究全体会① 研究の概要
4・5月中	カリマネ表の作成
6月6日	カリマネの日①
6月23日	大研① 3年授業研究会
7月18日	カリマネの日②
8月29日	カリマネの日③
9月12日	カリマネの日④
11月14日	カリマネの日⑤
12月5日	大研② 授業研究会 森田智幸先生（山形大）
12月19日	カリマネの日⑥
1月9日	カリマネの日⑦
2月6日	カリマネの日⑧
2月9日	研究全体会② 研究のまとめ
2月中	研究収録作成

<様式>

学 校 名	山形市立村木沢小学校	校 長	村山 理香
	山形市大字村木沢 6 0 4 6 番地 TEL 023-643-2240 FAX 023-645-8606	研究主任	新田 亜紗恵
研究 主 題	学びを深めるために（2 年次） ～自律して学び進める子供を目指して～		
研究 主 題 設 定 の 理 由	昨年度は、『学びを深めるために～自律的に学び進める子供を目指して～』を研究主題として「自律」を大きなキーワードに掲げ、子供たち一人一人が意志や考えをもち、自律して学び進めることを目指して研究に取り組んできた。また、子供たちの「深い学び」を実現するためには、各教科の特質に応じた見方・考え方を働かせた学びが大切であるということを教師間で共有し、教材研究や研修を行ってきた。 昨年度の研究成果から、「目的意識をもたせる導入・教材提示」「自己の変容を振り返る機会の確保」「学習計画を立てること」などが、自律的な学び、そして深い学びに必要であることが明確になった。さらに、「子供たちの自律した姿とはどのような姿か。」を模索していく中で、「自己調整力」を身に付け、自分で学びを選択したり、自分の姿を客観的に理解して学習課題を見出したりすることが、深い学びにつながっていくであろうことが見えてきた。 今年度は、子供たちが自分自身を見つめ直し（自己理解力）、必要な学習課題を見出し（自己選択力）、根拠をもって考えを表現すること（自己表現力）ができるような授業づくりを通して、子供たちの自律的な学びを支えていく。令和 9 年度の完全複式学級編成を見据え、ガイド学習や合同学習などに取り組んできたことを踏まえながら、教科を問わず発揮できる自律的な力の育成を目指していく。		
研究 の 重 点 と 目 指 す 姿	（1）研究の重点 ◇子供が主体的・協働的に取り組む中で 学びを深めていく授業の工夫 （2）研究でめざす姿 ①めざす子供の姿 ◇自ら学び、友達と学び、<u>学びを他教科や日常生活等とつなげたり、次の学習課題を見出したりすることができる子供</u> ◇友達の意見や考えを聴き、<u>根拠をもって自分の考えを表現したり、言葉でつないだりすることができる子供</u> ◇多様な考えや様々な情報をもとに、<u>自分の考えを見直したり再確認したりすることができる子供</u> （下線・・・村木沢小「育成すべき資質・能力」と関連） ②めざす教師の姿 ◇教科を問わず子供たちの自律した学びを支えることができる教師 ◇子供たちの学びをつなぐためのコーディネートができる教師 		

研究の視点と内容	(1) 研究の視点 ◇学びを深めるための手段や手立て ・既習とのつながり ・学習ツール（図・式・タブレット等）の活用 ・教師の発問 ・ワークシートの工夫など ◇自律した学びを行うための手段や手立て ・教師の「待ち」と「出」を意識した授業計画 ・ICT の活用 ・個の学習の充実と協働的な学習の充実 ・単元構成の工夫など (2) 主な研究内容 ・どの教科においても同様に研究主題に迫れるように、学びを深めたい教科、道徳及び外国語活動、合同学習等も積極的に研究し実践する。 ・【村小スタンダード】を共通のものとし、研究の日常化を図っていく。その上で、いろいろな視点から研究・授業等を行い、各自で研究主題へ迫っていく。 【村小スタンダード】 ①「課題」「まとめ」を明確にし、1 時間の授業が見える板書をする。 ②学びを自覚できる、次時の学習につながるような「振り返り」の視点の工夫をする。 ・各教科の特質に応じた「見方・考え方」を働かせた学びを大事にする。指導案に具体的な「見方・考え方」を働かせている子供の姿を記述し、「深い学び」に迫る。 ・子供たちの「学びが深まっている姿」「自律して学ぶ姿」とはどんな姿なのか教師間で共有し、研究でめざす子供の姿に迫る。子供たちの自律した学び、さらには深い学びを目指していく。												
研究の方法	・研究の日常化を図る。 →研修や日々の授業の中で「学びが深まった姿」「学びを深めるために効果的だった手段・手立て」「自律して学ぶ姿」などを話題にし、OJT や教材研究の時間などを活用して教師間で共有する。 また、共有フォルダを活用して資料やデータを集積していく。 ・授業研究を一人一回行う。授業者は「研究のまとめ」を発行する。 ・年度末には研究成果、反省を受けて、次年度の研究につなげていく。												
研究の計画	<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 20%;">4 月～5 月</td><td> ・研究全体会（校内研究内容の検討） ・校内研修会（学年カリキュラム検討） </td></tr> <tr> <td>7 月</td><td> ・校内研修会（学年カリキュラム検討） （全国学調・学力テスト分析） </td></tr> <tr> <td>6 月～12 月</td><td> ・授業研究会 </td></tr> <tr> <td>12 月</td><td> ・校内研修会（学年カリキュラム検討） （本校の児童のよさを生かし、課題を克服するために） </td></tr> <tr> <td>1 月～3 月</td><td> ・研究のまとめ作成・発行 </td></tr> <tr> <td>2 月</td><td> ・研究推進委員会 ・研究全体会（研究の振り返りと次年度の研究に向けての協議） </td></tr> </table>	4 月～5 月	・研究全体会（校内研究内容の検討） ・校内研修会（学年カリキュラム検討）	7 月	・校内研修会（学年カリキュラム検討） （全国学調・学力テスト分析）	6 月～12 月	・授業研究会	12 月	・校内研修会（学年カリキュラム検討） （本校の児童のよさを生かし、課題を克服するために）	1 月～3 月	・研究のまとめ作成・発行	2 月	・研究推進委員会 ・研究全体会（研究の振り返りと次年度の研究に向けての協議）
4 月～5 月	・研究全体会（校内研究内容の検討） ・校内研修会（学年カリキュラム検討）												
7 月	・校内研修会（学年カリキュラム検討） （全国学調・学力テスト分析）												
6 月～12 月	・授業研究会												
12 月	・校内研修会（学年カリキュラム検討） （本校の児童のよさを生かし、課題を克服するために）												
1 月～3 月	・研究のまとめ作成・発行												
2 月	・研究推進委員会 ・研究全体会（研究の振り返りと次年度の研究に向けての協議）												

<様式>

学 校 名	山形市立大曾根小学校 山形市上反田 2 7 8 番地 Tel (0 2 3) 6 4 3 - 2 1 3 4 F a x (0 2 3) 6 4 5 - 8 6 1 4	校 長	晋道 康史
		研究主任	佐藤 卓生
研 究 主 題	他に働きかけながら、自分らしく学び続ける子どもの育成 ～自分と向き合う力、自分を高める力、他とつながる力を育てる教育活動の展開～		
研 究 主 題 設 定 の 理 由	本校では、資質・能力ベースの学力観を前面に打ち出した学習指導要領や関係法規、変化が急激で不確実性が高く将来を予想することが困難なVUCA 時代に突入したと言われる社会背景、地域の伝統や特性、子どもたちの実態を踏まえて、 「大曾根に誇りをもち、未来を拓く子どもの育成」 を学校教育目標に掲げている。そしてその具現化に迫るための資質能力を、 ○ 身に付けた知識や技能を学習や生活に生かすことができる。 ○ 根拠や理由を明確にして、自分の考えを表現することができる。 ○ 自ら学習を調整しながら、粘り強く取り組もうとする。 と設定し、教育活動に取り組んできた。 しかし、その中で ○ あらかじめ用意されたことにしか対応することが出来ない。 ○ 困難なことがあると黙ってやり過ごせる、誰かがやってくれると思っている。 ○ さらに高まろうとする意識がない。 ○ まわりの「こと」「もの」「人」に対する関心が薄い。 といった課題も明らかになってきた。 学習指導要領が示している資質・能力の柱の一つである、「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか（学びに向かう力、人間性等）」は、非認知能力に大きくかかわるものである。また、VUCA 時代をたくましく生きていく子どもを育てるためには、目の前の問題に対して、他と協働しながら自律的に対応するための非認知能力の育成が重要であるといわれる。こうした主張は、本校の学校教育目標やそこに近づくために育成を目指す資質・能力の設定、本校の子どもが抱える具体的な課題と符合するものであると考える。そこで、本校でも、テーマを上記のように設定して非認知能力を基盤に据えた研究を推進する。		

研究の目標	以下のような力の育成を通して、研究テーマの達成、ひいては学校教育目標のを目指す。 ○ 自分と向き合う力・・・現在の自分を維持・調整する能力 自己制御、感情調整、レジリエンスなど ○ 自分を高める力・・・現在の自分を変革・向上するための力 意欲、自尊感情、グリットなど ○ 他とつながる力・・・他とかかわり、協働する力 共感性、協調性、コミュニケーションなど
研究の内容	○ 学校研究を「4 5 分の授業づくりの方法」等を検証するものとしてではなく、学校の教育目標を具現化する方策としてとらえ、平成7年度の教育活動全般を対象とする。 ○ 目指す子どもの姿・支援や指導の在り方を全職員で共通理解する。 (1) 子どもを見る 子どもの実態をどうとらえるかが、そのあとの展開や支援の仕方を描く際のよりどころになる。つまり、学習材や実践方法は、子どもが対象にどのような目を向け、どのような思いをもっているのかをとらえることなしに語ることはできないということである。 そこで、常に子どもの姿を根拠にしながら、子どもの学びをより深くとらえることを非認知能力を育てるための教育活動の基盤にする。 (2) 学習材を見る くらしの中で、「三角の形をしているものはなんとなく同じ」ととらえていた子どもが、算数科の学習を経て、くらしの中で身の回りにある様々なものを算数的な見方でとらえなおしたり算数的な見方で分類・整理していくことができたり、そのような自分の姿を自覚的にとらえたりすることができたとする。この場合、算数的な認知能力だけではなく、算数を題材として非認知能力を成長させた姿であるのとらえることができる。 このように考えると、単元を構想したり活動計画を立てたりする際に、子どもが出会う学習材が、 ・子どもがどのような目を向けるものなのか。 ・どのように資質・能力の向上を図っていくことが可能なものであるか。 ・どのような非認知能力を育てる可能性があるものなのか。 などを十分に検討していくこと大切にする。 また、子どもが学習材やまわりの人たちにどのように働きかけ、どのように学んでいくことで、どのように資質・能力や非認知能力を向上させていくのか、また、その時に教師はどのような指導・支援をしていくのかということを具体的に描いていくこと、あるいは瞬時に判断することが重要であると考え (3) 教師が自分自身を見る 教師自身が、どのような意識で教育活動に当たっているのかということは、形には表れなものの子どもの育ちに極めて大きな影響を及ぼすものであると考える。そこで、教師が自身が、どのような意識に基づいて教育実践にあたっているか、それに基づいた実践の中で子どもや学習材が見えているか、さらには、その上での指導・支援は最善であったかを常にモニターしながら教育活動を展開する。

研究の方法	＜子どもを見る＞・・・研究授業、子どもの記録、教育相談・特別支援教育、スピーチ ＜学習材を見る＞・・・研究授業、特別活動、教育課程 ＜教師が自分自身を見る＞・・・研究授業、職員会議・職員研修、研究のまとめ
研究の計画	1 学期・・・おまかせ校務のいいところみつけを活用した子どもの記録の蓄積 スピーチの時間の参観・討議 2 学期・・・研究授業 3 学期・・・教育課程 研究のまとめ